#### 平成30年3月NHK近畿地方放送番組審議会

3月のNHK近畿地方放送番組審議会は、14日(水)、NHK大阪放送局において、7人の委員が出席して開かれた。会議では、事前に視聴してもらった、ルソンの壺~2月号~「"色"で進化する伝統の逸品~新たな顧客をつかめ~」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、4月の番組編成の説明が行われ、 会議を終了した。

# (出席委員)

委員長 西田 賢治 (大阪商工会議所 元常務理事) 副委員長 山崎 弦一 (日本労働組合総連合会大阪府連合会 会長) 委員 市田 恭子 (デザイナー集団 Team coccori 事業代表) 片山九郎右衛門 (公益社団法人京都観世会 会長) 小林祐梨子 (スポーツコメンテーター) 鈴木 元子 (月刊大和路ならら 編集長) 原 さだ (財団法人龍神村開発公社 専務理事)

#### (主な発言)

<ルソンの壺~2月号~「"色"で進化する伝統の逸品~新たな顧客をつかめ~」 (総合 2月25日(日)前7:45~8:24放送)について>

○ 民放で日曜朝に放送されるビジネス番組を見ることも多いが、この番組は、放送されていることに気づいたときにときどき見ている。行政や商店の方々でこの番組を見ている人は多いので、番組冒頭の「色を変えたら商品が売れた」という部分を見て、うのみにしたら困ると感じたが、コメンテーターの真山仁さんが「色を変えただけで商品は簡単に売れるものではない」と注意を促してくれたのでよかった。最後は「色より華」ということばでまとめていたが、「色を変えることが出発点ではなくて、自分たちを体現するために、色をどう使うか、どう伝えるかが重要だ。」と話していて、多くの人に聞いてほしいと感じた。今回紹介された2人の社長は同世代で、ともに次世代に家業をつないでいく人だったが、京都の生地加工会社の高橋聖介社長の売りたいだけではなく、客にどうしたら楽しんでもらえるかという姿勢が印象的だった。京都という土地柄なので、「伝統は継承をしないといけないが、お客様にも楽しんでも

らいたい」と1本筋が通っているところがいいと思った。ここの商品は手にとったこともあったが、商品の一つ一つに和柄の説明を付けていることは知らなかった。筆メーカーの事例で、2007年から2017年までの売り上げのグラフが出ていたが、その説明がわかりにくかった。2017年の売り上げは9億から10億ぐらいだったかと思うが、会社全体の売り上げなのか、カラー筆ペンの売り上げなのか、知りたいと感じた。

- この番組を見るのは初めてだったが、今の社会を映し出し、自分の生活にも直結し ているように思える経済番組で、興味深い内容だった。番組タイトルからは作り手の やる気も見えて、今後も魅力的なタイトル付けを期待している。番組キャラクターの 助左衛門くんが、"キモカワ"ということばがあるが、気持ち悪いが麗しい"キモウ ル"な感じで非常に気に入った。アプリのスタンプのようで、若い人の感性にも引っ かかるような努力をしているように思う。カラー筆ペンは使ったことがあるが、商品 開発に至るまで、伝統に培われた技やいろいろな苦労があったことを初めて知り、感 慨深いものがあった。色がテーマだからか、テロップにいろいろなフォントや色が使 われていて、主役の色を殺してしまうように感じた。また、スタジオの演出が少し中 途半端に感じた。スタジオでゲストに話をしてもらえるのであれば、社長だけでなく 現場責任者にも来てもらって、開発過程や葛藤について話してもらえるとおもしろか ったと思う。他社の事例からヒントを得ようとする番組だと思うが、社長のお悩み相 談のコーナーはとってつけたように感じた。最後の若手社員を紹介する「わが社のル ーキー」のコーナーは、雰囲気が変わり、それまでの感動が引いてしまったので、な くてもよいと感じた。全体としては、会社経営に限らず、個人としても生きる知恵や ヒントなどをいろいろともらえる番組だったと思う。
- 色をテーマに伝統ある2社を取り上げていて、伝統のものを進化させているという 共通点があり、おもしろかった。創業300年の筆メーカーの水谷家に代々伝わる「最 後の筆屋になれ」という家訓が社長の原動力で、筆の需要があるかぎり筆屋を続けて いくためには親から引き継いだことと同じことをしてはいけないという精神だが、先 代が今まで培った技術で後押ししていることも、非常によかった。日本の伝統色の表 現の話や、伝統色のインクを作るのに黒の使い方が重要だということを初めて知った。 カラー筆ペンを販売していることは知っていたが、開発までの苦労は知らなかった。 また、もともとは、生地の加工をしていたが、業績が低迷する中、和柄の小物ブラン ドを立ち上げ、売り上げを倍増させた社長の高橋さんの「わが社のツボ」は「新たな 色で伝統に命を吹きつける」ということだが、同じ柄に違う色をつけていく映像は非 常にわかりやすかった。コメンテーターの真山さんが小説家であることは知っていた

が、社長の悩みに答えていることを意外に感じた。一方、ナビゲーターを務める漫才 師の方には、違和感を覚えた。この番組はこれまでも見たいと思って録画してそのま まになっているので、しっかり見ようと改めて思った。

- 今回のテーマの色は誰にとっても身近で、番組にまとまりがあって見やすかった。番組の冒頭では、ナビゲーターの漫才師の方がボケたときにしらけた雰囲気になっていたが、終盤では、ボケても和気あいあいとした感じになっていてよかった。カラー筆ペンを開発する際に伝統色独特のくすみを出すには苦労があったことや、筆先はいつも湿っており、動物の毛では腐るためポリエステルを使っていることなど、知らない知識を得ることができた。日曜の朝に落ち着いて見るにはちょうどいい番組だと思う。特に、若くてエネルギッシュな2人の社長に好感を持ったが、どこにヒントが隠れているかわからないところが共通していると感じた。ほかの出演者も明るくて、元気をもらえた。私自身も筆ペンを使う機会は年に数回しかないが、伝統あるものが生き残ることの大変さを改めて痛感するとともに、カラー筆ペンなど形を変えながらでも伝統あるものを継承していかないといけないと感じた。最後の「わが社のルーキー」のコーナーは違う番組が始まったような印象を受けたので、2社の事例で終わったほうが番組にまとまりがあったと思う。
- 非常に興味深いと思う一方で、複雑な思いを抱いた。老舗の筆の会社の社長には共感し、生地加工の会社の社長には疑問を感じるところもあった。カラ一筆ペンを開発する話を見ていて、色の取り合わせや風合いで日本の伝統色は生まれているので、社長の話は理にかなっていると感じた。筆ペンの筆先には新素材を使うが、1本ずつ手作りするやり方は伝統的だということで、技術が少しでも残っていく方法を選んでいると感じた。「最後の筆屋となれ」という家訓に納得し、自分自身も見習うべきところは見習いたいと感じた。ただ、2社目の事例で、インクジェットプリンターで布に印刷するときに、イメージに合わせるために色見本が出てくるが、それだけで再現するのは難しい日本的なものの価値が、番組でもう少し見えてくるようにしてほしいと感じた。コメンテーターの真山さんが「色より華」と言っていたが、このような形で日本的な伝統との融合が進んでいくことは、素直に認めにくいと思った。こうした職人さんの技に、商品を使う側も気づかないので、番組を通じて興味を持つきっかけを作ってほしいと思う。100年前の図柄との紹介があったが、もっと昔からある図柄やそれより最近のものもあるように思えるので、もう少し精査する必要があると感じた。
- 数年ぶりに「ルソンの壺」を見たが、「新たな色で伝統の逸品を進化させて生き残りを図る」という老舗の新たな挑戦を興味深く感じた。最近は筆や筆ペンを使う人が

少なくなっているので、ビジネスとしては大変だと思うが、カラー筆ペンに挑戦する 姿に感銘を受けた。女性小物の事例については、社長が昔の図案を見てひらめいた、 直感力のすごさを感じた。ただ、図案の知財権がどうなっているのかが気になった。 経済学者のシュンペーターが「イノベーションの本質は、今あるものの組み合わせに ある」と言っているが、今回の2つの事例はその考えを実証する例だったのではない かと思う。

- 今回も老舗企業の生き残り策として興味深く見た。伝統の殻を破る大胆な発想の転 換が時代のニーズにマッチした商品を生み出し、老舗の生き残りに大きく貢献してい ると思った。老舗企業は、過去の成功体験から抜け出せず、グローバル化や多様化す るニーズの中で生産性向上への投資もできず、倒産に至るケースが多いと言われてい る。こうした中、今回紹介された、老舗筆メーカーは、社長の水谷豊さんが、筆を使 う人が少なくなることを見越して、カラー筆ペンの開発に踏み出したことが成功の鍵 になったと思う。また、徹底したモノづくりへのこだわりが消費者の心をつかんだの ではないか。先代が筆先の開発に協力したことで、同族企業によくある親子対立を回 避でき、職人たちの抵抗も抑える事ができたと思う。安い海外の模倣品と戦っていく ために、真山さんは「安物はダメと思わせることが大事」と言っていたが、低価格志 向の消費者が多い中で、実際には難しいと思う。次の生地加工の会社では、偶然見つ けた明治大正の図案を京都の宝物と受けとめ、新たな色を吹き付けて、女性にウケる 和装小物ブランドを立ち上げた高橋社長の感性やひらめきが、成功のポイントだと思 う。さらに、女性デザイナーの雇用や、プリントした生地の色とパソコン画面との色 のずれを調整するための工夫も組み合わさって、商品の差別化ができていると思う。 また、柄の意味を書いたラベルを付けるという工夫も、女性の購買意欲をそそるのに 役立っていると感じた。真山さんへの質問コーナーで、海外へのPRをどうすればい いのかと社長は尋ねていたが、真山さんのアドバイスのとおり、京都には外国人が非 常に多いので、ブロガーになってもらうというのは非常にいいと思う。
- 今回は"色"がテーマで、しかも、奈良伝統の筆と、京都の明治・大正期の図案の再生という内容だったので、興味深く視聴できた。また、試行錯誤を重ねてカラー筆ペンを作ったものの、売り先を見つけるのが困難だったという話に納得した。ただ、筆ペンの色を4色の合成染料だけで出していることは、なぜかと思った。合成染料にはおびただしい種類があるので、その理由を知りたいと思った。カラー筆ペンの色として、「伝統色」にこだわったというのもうなずけるものがあったが、かたや、京都の小物ブランドでは、「伝統色」は沈んだくすんだ色合いが多いので、新たなポップな色に変えているというのを知り、その違いの理由をもう少し知りたいと思った。小

物の柄の意味を付加して提供していると言っていたが、花言葉との違いも知りたいと 思った。

- まず奈良の筆の老舗メーカーでは、字を書くことから絵を描くことに発想を転換してカラー筆ペンを苦労して開発していた。筆の伝統の製法を取り入れながら新しくインクや筆先の技術開発を行い、「最後の筆屋になれ」という家訓をもとに何もしなければ先細りとなりかねない毛筆の分野を広げていくために奮闘していると感じた。なお、水谷社長が海外から模倣品も出てきていると話していたが、既に様々なメーカーが参入して販売されていることを初めて知った。苦労して開発しても簡単に海外で模倣品が作られて逆輸入される世の中となっているが、真山さんがおっしゃったように、価格ではなくて高い品質を保つことが、今回の例に限らず、技術立国日本のとっていくべき姿であると思った。次に京都からは生地の加工のみでは業績が低迷する中、伝統の図柄に新たに現代風の配色を行い、そのために新たな技術開発を行いながら、新しい商品を開発する企業を紹介していた。また、一つ一つの柄にはそれぞれ意味があり、その伝統を伝えていくことは顧客が喜ぶ壺を心得ていると思った。このように旧来の伝統を守りながら新たなものに挑戦していくことが、日本の伝統文化が受け継がれていくための一つの重要な要素ではないかと感じた。
- 奈良で 300 年続く筆の会社の新しい取り組みは、ヒットまでの工程で、描く筆に適した筆先を徹底的に追究し、15色の伝統色のインクを1年半かけて作り出すという妥協しない姿勢が具体的に紹介されていて、よかった。一般的な色ではなく、日本の伝統色にこだわったことも受け継いできた伝統を崩すことなく新展開ができていると思う。また、京都の生地加工会社が、昔の帯地柄に新しい色使いをしてヒットさせている話は、色使いひとつでこんなにも新しいものとして受け入れられるのだということがよくわかった。実際、京都ではよくみる商品で、モダンに生まれ変わっているというのも知ってはいたが、当時のものを見てその変身ぶりに驚いた。2社ともに、しっかりとしたヒットの裏付けが丁寧に描かれていたので、それが単なる思いつきだけでは成功しえなかったのだということが、番組を通して多くの人に伝わったと思う。「色で進化する伝統の逸品」というタイトル通りの内容でおもしろかった。
- 視覚に訴えるテレビという媒体を使って、「不易流行」という成句が現代ビジネスの世界でも、ぴったりあてはまることをテーマとした説得力ある番組だと感じた。伝統的筆記用具ではあるが将来的にはどうしても需要が減るだろう筆や、すでにお蔵入りになっている一時代前の図柄帳の模様を、今々の好みや必要性に応じて変革させて新たな商品を創り、販売に成功している見事な実例を、わかりやすく紹介していると

思った。伝統から離れた方向への転換には、確執や不安もあったと思うが、両社とも、 伝統や経験に裏づけられた確かな技術に支えられ、柔軟な発想をとりいれて、納得の いくような成果をあげていることに感心した。そこに絵手紙や大人のぬり絵の流行、 大正・昭和ロマンのブームなどの追い風が吹いたことも指摘していて、幸運も働いた ことがよく分かった。そして、"色"を変えたことは手段であって、目的が何かとい うことを考えることが大切だという指摘も、大切なことだったと思う。

## (NHK側)

関西の企業の盛り上がりがますます期待される中で、機械産業 含め中小企業が多く、あるいは医療分野をはじめとして非常にポ テンシャルが高い関西で役に立つ番組として、さらにリニューア ルしてパワーアップしたいと考えている。

#### (NHK側)

この番組は 2007 年から続いている番組で、かつてはウイークリーの番組だったが、現在はほぼ月 1 回、月末に放送している。「わが社のルーキー」のコーナーは、さまざまな業界や企業の活動を取材するきっかけにもなっている。

# (NHK側)

筆の会社の売り上げのグラフは、会社全体の売り上げを示しており、カラー筆ペンの売り上げは会社全体の2割を占めている。社長からの真山さんへの質問のコーナーは、新年度から、スタジオに社長を招くことにしていて、何か新たな情報を付加できないかというねらいがあった。真山さんは、ジャーナリストに近い取材をしたうえで一本の小説を書くので、非常に豊富な知識を持っている。真山さんが大阪を非常に愛していて、アドバイスをする場があれば伝えたいということで、このコーナーを設けた。和柄の知財権については確認のうえ、女性小物の製品化にあたったとのことだ。合成染料についてだが、合成染料はたくさんある中で、カラー筆ペンのインクとして使えるものは4色ということだ。ナレーションで「インクに使える合成染料は」という前置きはしたものの、十分に分かりやすい表現にはなっていなかったかと思う。

- 3月5日(月)のまちけん参上!~あなたの街のおもしろ検定~「京都市 上賀茂神社・下鴨神社界わい」(総合 前 0:10~0:53)を見て、深夜でも日中でも見られるような番組だと思った。「上方漫才コンテスト」で優勝したアインシュタインなど、旬のお笑い芸人が出演する、大好きな番組だ。シドニーオリンピック銀メダリストの篠原信一さんや、評論家の山田五郎さん、関西ジャニーズJr.などバラエティー豊かなメンバーが出演しているのもいいと思う。出題される3間のクイズはどうでもいいような内容だが、答えが気になってしまう。第1問目では、篠原さんが「水泳」と解答したときに、寒い中なのでボケたのだろうかと思ったが、それが正解だったので番組にのめり込んで見てしまった。京都市の北部にある大学の学生食堂の場面を見ていたら、すっかりおなかがすいてしまった。出題された3間のクイズも、学生リサーチャーが取材をして作成した地図からも、地元に寄り添い魅力を引き出そうとしていることがよく伝わってきた。「じもてい愛情マップ みんな すきやねん!」の時から変わらず、心が和む番組だと思う。
- 地元の人間としては、かゆいところに手の届かない番組のように感じた。民放の番組であれば老舗和菓子店の名前も出てくると思うし、大学の場面では大学の紹介に終始していたり、何もない道でありきたりのコメントをしながら歩く場面なども長く感じたりして、少し退屈した。土産物店の店主が番組の出演者に言いたいことがあるということで紹介していた芸舞妓のタオルには、困惑した。海外からの間違ったイメージを払拭(ふっしょく)しようとしている中、番組を見て不愉快に思う人もいるのではないか。今回紹介した場所まで行くのであれば、さらに北部の静原まで行けばテキスタイルスクールのように人を育てている場所もあり、発掘すればたくさん紹介する場所はある。学生リサーチャーにもう少しアドバイスをして、いろいろなものを番組で紹介してほしいと感じた。
- 学生リサーチャーの地図はうまくはないが、懸命に取材したことが伝わってきた。 番組では、上賀茂神社の境内の縁結びの神・片岡社や、下鴨神社がみたらしだんごの 発祥の地とされていることなどが取り上げられていて、若い人たちは行ってみたくな るのではないか。ゴルフ場内の池で古式泳法の教室をしていることを紹介していて、 その指導者の岩崎永さんの泳ぎの美しさに感動した。もともと水泳教室をしていた場 所に、後からゴルフ場ができたことに驚いたが、ゴルフ場には農薬が散布されるので はないかと心配になった。若者向けの番組と思うが、楽しかった。

- 「まちけん」というので、ご当地検定のようなマニアックな質問が出題されると思っていたが、街やその街の人とゆるい関わり合いを楽しむ番組だった。淡々とした環境番組のような感覚のバラエティー番組で、頭がさえているときにはテレビをつけながら仕事をするのにとてもよく、疲れているときにはまったりとしたペースで見られる番組だと思う。MCの力なのか、ラジオ番組に絵を付けたような番組で、見ないから消そうという気には決してならない、寄り添われているような感じの番組だった。
- 土地勘のある場所なので、学生リサーチャーの地図を一生懸命に見たが、番組で「パンダの出来損ない」とコメントされていたイラストが豆餅だったりと、突っ込みどころ満載だと思った。番組の中で、上賀茂神社の神馬と大学の馬術部で世話をする馬がつながったので、何となくすっきりしてよかったと思う。
- おもしろい番組ではあるが、自分自身は対象年齢から外れているという印象だった。 タイトルが「京都市 上賀茂神社・下鴨神社界わい」なので、歴史的な内容を期待していたら、番組ではほとんど出てこないので拍子抜けした。古式泳法や豆餅は町に由来する一方で、大学の学生食堂やタオルは違うと感じたが、「おもしろ検定」として理解すればいいのかとも思った。「ルソンの壺」も「まちけん参上!」もお笑い芸人が出演し、現在放送している連続テレビ小説にも多くのお笑い芸人が出演している。 大阪におけるお笑い芸人の存在の大きさを改めて感じた。
- ひさびさにこの番組を見た。最初のクイズの内容がよかったので今回はひと味違うと期待したが、2問目や3問目にはがっかりした。出演者の回答を聞いていると、N H K の評価を損ないかねないと思うこともあった。この番組は若者の視聴率向上をねらっている番組だと思うが、実際にどれほど役立っているのか疑問に思う。上賀茂神社の境内の片岡社や下鴨神社の御手洗池の話、上賀茂神社の神馬を大学の馬術部が40年以上にわたって世話をしていることが聞けたのはよかったと思う。
- 今回は3か所で問題が出されたが、最初のゴルフ場でのシーンが一番印象的だった。 出題者がサンダル履きで、それは単なる趣味と言っていたのもおもしろかったが、答 えが「水泳」で、それも古式泳法の練習というのは驚きだった。水温6度の中で泳い でいたのもすごくて、久しぶりに愉快な気分になった。2問目の大学の食堂での問題 の答えがチキン南蛮ランチと聞き、ほっとした。最近の男子学生は草食系で、がっつ り食べる人が減っていると思っていたので、そう感じたのだと思う。また、馬術部が 本格的だったことにも驚いた。一方で、スタジオの観客を映したとき、ほとんどが若 い女性だったことにも驚き、なぜか少しがっかりした。この番組は深夜の放送だった

ので、放送番組審議会の参考番組でなければ、寝ていて見ることがなかった番組だと 思う。

- 老若男女、幅広い層が一つは興味を持てるネタが入っていたのが、いいと思う。それぞれの神社のことも触れながら、周辺エリアの話題を散りばめていて「まちけん」らしい展開だった。ただ、京都で冬といえば「すぐき」は普通に食べるが、その有名漬物店の「すぐき」を紹介する場面で、初めて見て、食べたかのような学生のリポートにはかなり違和感があった。この学生たちは、京都市以外の出身なのだろうか。もし、学生たちが京都出身でないという前置き説明があればわかるが、「すぐき」を知らない他府県の人がこの場面をみたときに、本当にこのエリアだけで作られて食べられている、めずらしい漬物だと思ってしまうのではないかと思う。京都は学生のまちで、地元ではよく知られているものも、市外出身者だと知られていないこともある。それが見る人の受け止め方を変えてしまうこともあると思うので、そのあたりを留意していただきたいと思う。
- この番組は偶然見る機会があった時などに少し見ていたが、銀シャリの2人のほんわかとした雰囲気が番組にいい影響を与えていると思う。突っ込みで返しが天才的にうまい橋本直さんが本来MCをするべきと思うが、あえてそんなに司会には向いていないと思われる鰻和弘さんがMCで、橋本さんが回答側にまわり、それがまたおもしろい番組の味となっている。最初のクイズでは、ゴルフ場の中の池が古式泳法の訓練場であることがわかり、これには少し驚いた。2間目は大学の広報の学生らしくさりげなく大学の宣伝をして、最後にアニメで有名になった地元の商店街からのクイズでオチがついたと感じた。上賀茂・下鴨神社とその周辺は平安京が開かれる前からの信仰の地であり、歴史的な地だが、この番組では「みたらし団子」以外はそれほど古の歴史的な面は強調されておらず、それはそれで親しみやすい雰囲気づくりにつながっていたようにも思えた。

#### (NHK側)

「まちけん参上!」は、当初は、人にまつわるクイズを出題することが多かったが、少しずつ地域色を重視して制作するようにしている。駅周辺の何気ないスポットを扱うことが多いが、今回のように「上賀茂神社・下鴨神社」だと、スタンダードな旅番組への期待感が高まるように感じてしまうかもしれない。通常は、その街に出かけて、その街に住む普通の人を紹介しながら味わいを出していくというスタイルをとっている。

#### (NHK側)

若年層のNHK離れが深刻であり、地域放送としてもその課題に取り組んでいる。「まちけん参上!」は若者をターゲットとする番組で、学生がクイズを作成する演出なども取り入れている。いつもはもう少しエリアを絞ってニッチなネタを出題することが多いが、今回はエリアが少し広がったことで散漫な感じになったかもしれない。また、タオルの件については、今後はそういったところも留意していきたい。芸人さんと地域の人との楽しいやりとりや、関西の人たちの人柄と土地柄を楽しく見せていく番組を目指しているが、地域に対する知的好奇心をもう少し盛り込むようにしていけば、いろいろな層の方々にも支持されるのではないかと思う。今日のご意見を参考に、さらに番組をブラッシュアップしていきたいと思う。

## (NHK側)

地域のよさを若い人たちにどうやって伝えるかを考えながら番組を制作している。地図は学生リサーチャーが書いており、絵の感じや縮尺は毎回違う。その味わいも含めて、街のよさを伝えながら、楽しんでもらう演出をとっている。京都をどう伝えていくかについては、京都の印象が変わるようなことのないよう、しっかりと留意していきたい。

#### (NHK側)

「まちけん参上!」のスタジオ観覧は圧倒的に若い人が多く、若者がテレビ離れしている現在、NHKの活動にダイレクトに触れていただく機会となっている。今回の世帯視聴率は深夜にしては高かった。来年度は日中と深夜の両方に放送枠を置き、いろいろと検証を重ねながら、多くの年代に見ていただけるよう努力を重ねていきたい。

○ 連続テレビ小説「わろてんか」が大好きなので、今月で終わることが寂しく思う。 大阪放送局で開催中の「わろてんか」のセット公開に若い人たちがたくさん集まって いたので、いろいろな人が番組を見ているのだろうと感じた。オープニングの映像と 主題歌が流れると、子どもが絶対に泣きやむので、番組を録画して永久保存にしたい と思う。民放でも、子ども向けの長寿番組が終了すると知り、自分も見ていた番組だったので、残念に思った。子ども番組はコストも時間も手間もかかると思うが、NH Kには、視聴者に寄り添うという意味で大事にしてほしい。

- 「覆面リサーチ ボス潜入」を何度か見ている。2月14日(水)の「大手宅配ピザチェーン」(BSプレアA後9:00~10:00)では、社長が店の現状を知りたいと3週間にわたって潜入した。最後に社長が素性を明かして、社員にことばをかけて勇気づけ、自信を持たせる姿に感動した。2月28日(水)の「大手下着メーカー」でも、社長が「あなたの仕事ぶりは尊敬できる。課題に対して支援します。」と提案するが、何歳になっても褒められるのはうれしいもので、その時の社員がものすごくいい表情をしていた。人を褒めたり認めたりすることがうまくできない世の中なので、番組を見終わった後にすがすがしい気持ちになった。社長の素性がいつまで知られずにすむのかと思うが、続けてほしい番組だ。
- 1月1日(月)の香川照之の昆虫すごいぜ!特別編「カマキリ先生☆マレーシアへ行く」(Eテレ 前9:00~9:44)は思い返すと笑ってしまう番組だ。香川さんの興奮具合や熱さ、止まらないオタクぶりが本当におもしろいので、続編を作ってほしい。みんながスマートに生きている時代だからこそ、香川さんの昆虫が大好きな気持ちが伝わってくる、いい番組だと思う。
- 「わろてんか」のセット公開に、老若男女たくさんの人が見に来ていた。番組では、ヒロインのてんが若く見えて違和感があるので、年齢設定を知りたい。このドラマは夫婦愛の物語と聞いていたが、風太とトキの息の合った掛け合いを毎日おもしろく見ている。3月13日(火)の回でも、てんの家に泊まりにいくトキが「ちゃんと洗い物しといてや」とつぶやき、風太がトキと掛け合うところがおもしろかった。また、昨年の6月3日に放送した「谷4爆笑養成所」(総合後11:25~4日(月)前0:00近畿ブロック)で「わろてんか」への出演権を獲得したお笑い芸人のことについても知りたいと思う。

# (NHK側)

「わろてんか」の主人公・てんの年齢設定についてだが、葵わかなさんは17歳から53歳までを演じている。てんは焼け跡の場面で53歳なので、昭和14年(1939)以降を描く第24週は40代後半という設定だ。

#### (NHK側)

「わろてんか」への出演権を獲得したプリマ旦那は、昨年11月 20日(月)の回で寄席に来る客として出演している。

- 「西郷どん」を見ていて、最後のナレーションに出てくる「チェスト!」を含め、 聞いていてわからない薩摩弁が結構出てくる。ホームページなどで解説してほしいと 思う。
- 「クローズアップ現代+」はいつも見ている。2月27日(火)の「コンビニ"飽和"時代!?激化するサービス競争」について、大阪市内ではビルが建つとコンビニが入居するので、それほどコンビニの需要が大きいものかと半信半疑だったが、コンビニはすでに全国で飽和状態にあり、コンビニ間の競争が激化していることを伝えていた。フィットネスジムや介護相談窓口、シェア自転車など新たなサービスで客を引きつけようとしているようだが、コンビニ間の競争にとどまらずに、通信販売やドラッグストアとの競争が今後ますます激しくなっていくと思う。数年のうちに、コンビニだけでなく、スーパー、地方百貨店も含めて、かなりの整理が進んでいくと考えているので、私たちの日常生活に大きな影響のある流通業界の動きをさらに取材し、番組で紹介してほしいと思う。
- 「わろてんか」が終わろうとしているが、連続テレビ小説では今回初めて全話見ている。祖父母は私が幼稚園に行く前から寄席に連れて行ってくれたが、私の世代の人たちが知らない芸人さんの漫才や落語の名人芸を聴いた体験が今の私の仕事に大きな影響を与えている。「わろてんか」で描いた時代に活躍していた、エンタツ・アチャコさんの漫才は生では聴けなかったが、すぐ次の世代の芦乃家雁玉・林田十郎さん、東五九童・松葉蝶子さんなどの高座を体験したので、本当にこの番組を楽しめた。実在した芸人さんたちやエピソードをもとに、すばらしい脚本と出演の皆さんの印象深い演技で、楽しませてもらった。

NHK 大阪放送局 番組審議会事務局

## 平成30年2月NHK近畿地方放送番組審議会

2月のNHK近畿地方放送番組審議会は、21日(水)、NHK大阪放送局において、 11人の委員が出席して開かれた。

会議では、「NHK経営計画 2018-2020 年度」の概要についての説明、「平成30年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」についての報告があった。引き続き、「平成30年度近畿地方向け地域放送番組編集計画(案)」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。続いて、事前に視聴してもらった、NHKスペシャル「遺児たちのいま 阪神・淡路大震災23年」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、3月の番組編成の説明が行われ、 会議を終了した。

# (出席委員)

委員長	西田 賢治	(大阪商工会議所 元常務理事)
副委員長	山 﨑   弦 一	(日本労働組合総連合会大阪府連合会 会長)
委 員	浅 野 秀 剛	(あべのハルカス美術館 館長)
	市 田 恭子	(デザイナー集団 Team coccori 事業代表)
	片山九郎右衛門	(公益社団法人京都観世会 会長)
	小 林 祐 梨 子	(スポーツコメンテーター)
	鈴 木 元 子	(月刊大和路ならら 編集長)
	田 辺 眞人	(園田学園女子大学 名誉教授)
	原さだ	(財団法人龍神村開発公社 専務理事)
	安 井 良 則	(大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼
		感染管理室室長)
	山 舗 恵子	(京都リビング新聞社 編集部長)

# (主な発言)

- <「平成30年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」について>
- 「2020年に向け最高水準の放送・サービスの実現を目指す」ということだが、2020年以降に低下していくことはないか。また、「又吉直樹のヘウレーカ!」という番組

名は、アルキメデスが叫んだことばからきていると思うが、「ヘウレーカ!」ではなく正しくは「エウレーカ!」ではないか。

# (NHK側)

「2020年に向け最高水準の放送・サービスの実現を目指す」は、「NHKビジョン 2015→2020」に盛り込んだ文言だ。国内外問わず注目を集める東京オリンピック・パラリンピックが開催される2020年に、一つの照準を合わせて、放送・サービスを充実させていくことを目標にしている。もちろんそれ以降も放送・サービスの質は落とすことなく、むしろそれ以上を目指していきたい。

○ 何をもって「最高水準の放送・サービス」を定義されているのか。

## (NHK側)

NHKのそれぞれの部署や立場で最高水準を目指していくということで、あらゆる視点から議論を重ねている。大事なのは放送・サービスの中身だと考えている。

○ BS1では、グローバルな視点で地域に光をあてる番組を充実するということで、 地域の人々に"地域に必要な番組"を議論してもらい、そのアイデアを番組化する 「ザ・ディレクソン」はとてもおもしろいと思うが、地域の人々とはどういう人たち を想定しているか。

#### (NHK側)

新潟でトライアルを行ったが、地元の参加者については、インターネットで公募し、応募してきた人たちに議論してもらった。今後も公募していこうと考えている。

○ 平成30年度の計画には「放送のインターネット同時配信」は、盛り込まれないのか。

#### (NHK側)

NHKのテレビ国内放送をインターネットで常時同時配信することは、放送法で認められていない。そのため、平成30年度にはそのサービスを想定していない。

- <「平成30年度近畿地方向け地域放送番組編集計画(案)」について>
- 2020年の東京オリンピック・パラリンピックだけではなく、ワールドマスターズ ゲームズ関西 2021 の盛り上げも視野に入れてほしい。
- 奈良放送局の編集計画では、災害対応を大前提としたうえで、この項目を第2項目としたことは、よく理解した。奈良県は、活性化が進んでおらず、「観光立県」として、各産業においてもうまく連携がとれていない状況だと思う。奈良放送局が放送でそれぞれの動きを伝えることで、県民がそれぞれの動向をよく知り、奈良県全般の活性化につながる原動力となることを期待している。
- 滋賀県はPRが苦手と言われているが、外国人観光客が訪れたら好きになるような観光資源はたくさんあると思う。大津放送局のキャンペーン「しが!!応援宣言」で滋賀県の魅力を県民に伝えているが、国際放送なども含め、国内外の方々にも滋賀県の魅力を伝えてほしい。
- スーパーハイビジョン制作の番組については、2020年に向けてさらにスケールの大きいものを期待している。京都の花街の文化を継承していくために協力してほしいという声などもよく聞く。また、京都に文化庁が全面移転することが決まったこともあり、法的な問題もあると思うが、コンテンツをインターネットで活用しやすくしてほしいと思う。日本文化をきめ細かに発信することで外国の人が訪れたときにいろいろなものを見てもらえるように、また、大学や研究者、指導者の方々にコンテンツをもっと利用できるようにしてほしい。
- 2020年の東京オリンピック・パラリンピック以降も見据えて、選手たちの取材をお願いしたい。若者はインターネットで情報を得ているので、インターネットによる番組広報が大きな課題だと思う。そういう点を強化することで、地域放送番組はもっと見やすくなり、若い人たちもNHKをもっと身近に感じられると思う。
- 大阪の重点項目では、本部のバックアップ機能の充実に努めるということだが、要 員や機器の面でどの程度の水準にあるか。

#### (NHK側)

機材の面では、一定の水準に達し、緊急報道を立ち上げるために

必要な備えは整っている。要員面では応援態勢も含めて、対応していくことを考えている。

- 諮問された「平成30年度近畿地方向け地域放送番組編集計画(案)」については、 委員から出された意見の趣旨が具体的な番組編成のうえで生かされることを前提に、 番組審議会として原案を可とする答申をしたい。
- 異議なし。

(NHK側)

答申を受け、このあと具体的な地域放送番組編成計画について 決定し、3月の審議会で編成計画についてご説明したい。

< NHKスペシャル「遺児たちのいま 阪神・淡路大震災23年」 (総合 1月17日(日)後10:25~11:15放送)について>

- 番組を見て、阪神・淡路大震災から23年たったことを実感した。冒頭の吉田綾香さんへの取材は心に重く響いた。23年前に突然両親を亡くし、「自分も死んで両親のそばに行きたい」という思いを、ふだんは封印しているのだろうと感じた。長女の日向ちゃんは、母親の心を察することができる年齢になり、非常にけなげに心配する姿が痛々しいと感じた。震災は、遺児たちを通じて、その子どもたちにも大きな影響を与えると感じた。これまでの教訓を生かして、家族を失った方々への心のケアは進んできているように思うが、まだまだ未解決の非常に大きなテーマだと思う。災害による遺児だけでなく、さまざまな事情で親と暮らすことができず、親を知らないままに育っていく子どもたちがたくさんいる。こうした子どもたちのことも知っていただきたいと思うとともに、将来幸せになってくれる子どもが少しでも増えてほしいと感じた。
- 本当にいい番組だった。番組冒頭の綾香さんの「パパとママに会いたい」という悲痛な声は衝撃的で、心に重く響いた。番組からは、目に見えるものの復興よりも心の復興に時間がかかることがよく伝わってきた。やるせない気持ちで番組を見ていたが、「1月17日はずっと嫌な日だったが、時間がたつにつれて亡くなった家族を思い出す大切な日になった。」というアンケートの回答は救いのことばとして効いていたと思う。千代田雄輔さんが双子の弟との生活のために何が必要かを問いながら一日一日を大事に過ごす様子を見て、ほかの人より数倍濃い人生のように思えて、感動を覚え

た。ただ、日向ちゃんが母親を気遣う場面や学校での場面では、心の傷が必要以上に 映像として残ってしまうのではないかと気になった。

- 綾香さんの「パパとママに会いたい」という叫びが衝撃的で、癒えることのない悲しみを抱えていることをあらためて感じた。母親になった今も生きている意味を考え続けているという震災の現実を生々しく伝えていて、見る側もしっかり受け止めなければならないと感じた。日向ちゃんが母親を気遣う様子を見て、震災は、被災した遺児の子どもたちにも影響があると感じた。富山在住の米萩拓矢さんが亡くなった家族の写真を嫌がることも同じように感じた。長期間にわたって取材してきたNHKだからこうした事実をしっかり伝える番組ができたと思うが、取材を受ける側としては撮影されたくない場面があると思うので、番組に出演した方々にも脱帽する思いだ。これからも阪神・淡路大震災のことを伝えてほしいと強く思った。「生きる力とは何だろう。自分もきちんと生きていこう。」という気持ちが芽生えた番組だった。
- 主に3人の遺児を長期間にわたって取材していたが、いろいろな角度からバランスよく描いていると感じた。鹿児島県の千代田さん一家からは兄弟の仲むつまじい様子が伝わってきてとてもよかった。震災で生まれた強烈な喪失感からは、かなり深い愛情を注がないと立ち直れないと思うので、紹介できないさまざまな事情があったと思うが、綾香さんが12歳で被災してから、どのように育ってきたかをもう少し描いてほしかった。
- 毎年1月17日が来るたびに、震災遺児はどうしているかと思い出していた。子どもたちのことが気がかりだったので、番組を見ることができてよかった。また、遺児の子どもたちにも震災の影響が影を落としていると知り、考えさせられた。番組冒頭で出産直後の綾香さんが子どものように「パパとママに会いたいよ」と泣いた場面が衝撃的で、番組にしっかり向き合わないといけないという気持ちになった。番組を通じて、思いを封印して生きていかざるをえなかった綾香さんや、0歳のときに親を亡くして葛藤を乗り越えようとしている拓矢さんや、弟たちの親代わりとなり、ようやく自分自身のことに目を向けようとしている雄輔さんと、いろいろな状況を知ることができたので、紹介されなかった多くの遺児たちの人生に思いをはせることができた。番組を制作したスタッフが誠実に取材相手に向き合った結果、心の内を話してもらえたのではないかと思う。震災を網羅的に伝えるのではなく、親子の問題を取り上げていたことで身近なこととして考えることができた。遺児へのアンケートを男性と女性のナレーションで紹介するシーンがあったが、男性の声がやや明るい感じがして、違和感を覚えた。震災の記憶が薄れていく中で、こうした番組は貴重だと思うので、今

後も制作してほしい。

- 正座をして番組を見た。阪神・淡路大震災から23年、それぞれの人生に寄り添いながら誠実に取材してうまれた番組のように感じた。日向ちゃんが母親を気遣う様子が本当にいじらしいと感じた。美容師になった孫に初めて髪を切ってもらった祖母が涙をぬぐいながらお礼を言う場面からは、3人の男の子を育てることに大変な苦労があったのだと感じた。この番組のように記録して伝えることの大切さを改めて感じた。和歌山放送局の「守るプロジェクト」が"犠牲者ゼロを目指す"という目標を掲げることは、ありがたく、とても重要なことだと感じた。
- 阪神・淡路大震災で被災した当事者としては、主観的にしか番組を見られなかった。 実際に震災を経験するのと、間接的に見聞きするのでは、状況が違う。毎年8月15 目前後になると、テレビや新聞では「戦争や平和」という特集があるように、1月1 7日が近づくと「阪神・淡路大震災」の特集がみられる。自分でさえ「またこんな特 集をしている」と思うこともあるが、この番組はよく作っていただいたと思えるよう な番組だった。23年がたった今、神戸の住人の半分以上が震災を経験していない人 たちとなっているので、伝えていくことは本当に大切だと思う。この季節になったか らまた震災の特集をしていると思われないように番組を放送していってほしいと思 う。
- 番組を見終わったときに何かが心に突き刺さった感じがして、しばらく放心状態だった。兵庫県民にとって1月17日は命の大切さを考える日となっているが、被災経験のない世代に震災を継承するには、ことばだけでなく映像で伝えていくことが大事だと感じた。番組の生の声が衝撃的で、かなり引き込まれた。拓矢さんは生後7か月で震災にあい家族の記憶がないということだが、「もし自分が明日いなくなったら子どもはどうなるのだろう」と考えた。この23年の足取りをありのままに伝えていたので、いろいろな立場からいろいろな見方ができる番組だったと思う。神戸マラソンではスタート前に、阪神・淡路大震災以降、大切に歌い継がれてきた曲「しあわせ運べるように」を2万人で熱唱するが、いろいろな形で時期は関係なく伝えていくことが大事だと思う。自分の教え子たちに家族や愛、命の意味をよく聞かれるが、この番組の中に答えがみつかったように感じたので、本当にいろいろな人に見てもらいたいと思った。日向ちゃんの「ママを困らせないようにしている」ということばがとても気になり、衝撃的で何か悲しさを感じた。
- 23年という時間の重み、映像で残すことの大切さを感じた。震災にあった人たち

はそれぞれ思いを抱えているが、遺児の思いが感じられて、涙が止まらなかった。綾香さんが両親を亡くした喪失感から、作文に「別に悔いはないので死にたかった。」と書いているのを見て、そういうふうに思うのだと知った。日向ちゃんの2分の1成人式の場面は、映像として残っていくことに違和感を覚える。こうした思いは大きくなるに従って封印していくのではないか。また、震災の映像を見て動揺する人がいると思うので、地震で揺れている映像の使い方には気を付けてほしいと感じた。綾香さんが家族で東日本大震災の遺児の支援施設を訪ねる場面で、東北では遺児たちが自分の体験を話すケアが行われていた。阪神・淡路大震災のときには精神的なケアが足りなかったので、23年前からの積み重ねのように感じた。

- NHKならではのよい番組だったと思う。神戸放送局の編集計画で「教訓を次の世代につなげていきます」とあったが、こうした番組を若い人たちに見てもらうことは大事だと思うので、どうしたらこうした番組を、さらには、NHKを見てもらえるかを検討する必要がある。現在、遺児のサポートがどうなっているか、そうした支援団体の動きを紹介することで、国民的な関心は高まっていくのではないか。資金的なサポートができる形を作っていくことも重要だと思う。
- この番組では、400 人以上の遺児の中の3人を紹介していたが、それぞれもがきながら懸命に生きてきた様子を生々しく伝えていた。「パパとママに会いたい」と泣き叫ぶ声が綾香さんの声だと知って、幼いときに両親を失った心の傷はいくら時間がたっても癒えないものだと感じて、心が痛んだ。まだ幼い日向ちゃんが母親を気遣う様子を見て、胸が熱くなった。遺児の子どもたちの心のケアも今後必要になるように感じた。拓矢さんのように、自分だけ生き残ったことへの罪悪感で苦しむ人たちに、心のケアを施して少しでも心の負担を軽くできないかと感じた。島に残り、弟たちが一人前になるまでしっかりと見届けた雄輔さんは、兄として本当にすばらしいと感じた。美容師になった孫に髪を切ってもらっている祖母の笑顔からは、孫が立派に育ってほっとした様子が伝わってきた。震災遺児へのアンケートでは、「時間の経過とともに、震災に対する思いも変わってきた」という声が多く寄せられていたが、今でも多くの遺児や遺児の子どもたちがいろいろと悩みを抱えていると思う。一方、時間の経過とともに、震災の記憶の風化は避けられないと思うが、NHKには、今後も継続してこうした震災番組を放送してほしい。

#### (NHK側)

阪神・淡路大震災があった近畿地方ということもあり、委員の皆 さんには本当に番組を深く見ていただいたと感じた。防災・減災に 取り組むとともに、この事例を風化させず、未来の教訓にしていきたい。これまで毎年1月17日にNHKスペシャルを放送してきたが、年月がたったからこそ取り上げられるテーマや企画が出てきて、新しい視点が出てきているように思う。

## (NHK側)

阪神・淡路大震災について、毎年NHKスペシャルを制作してきたが、今年は「遺児」をテーマにすると決めたところ、これまでに遺児の取材に関わってきたディレクターやカメラマンから番組制作に参加したいと連絡をもらった。番組放送後も親戚のように付き合いをしてきた番組スタッフたちの長い信頼関係のもとに完成した番組だと思う。番組の限られた時間で、どのように伝えるかについては、専門家のアドバイスをいただき、つらいことをつらい、悲しいことを悲しいというだけではない番組をどのように制作するかということが一つの指針になった。アンケートで多くの遺児たちの意見を聞き、この番組をどのような角度で伝えるか検討した。日向ちゃんの2分の1成人式の場面やインタビューについては、賛否さまざまな意見をいただいた。今後の番組作りに生かしていきたい。

#### (NHK側)

編集計画で説明した通り、神戸放送局が必ず取り組むこととして、来年度も「震災の教訓を伝える」ことを重点項目の1項目に挙げた。こういう都市型の激甚災害は、最近では阪神・淡路大震災が最初の事例ではないかと思う。この23年間は誰も経験していない、私たちが予測できなかったようなことが起きている。今後もそうしたことが起きることが想定される。私どもの役割は、時代の証言者として、そのときそのときを押さえながらきちんとニュースや番組で伝えていくことであると考えている。これからもしっかりと取り組んでいきたい。

# <放送番組一般について>

○ 2月8日(木)の「ニュース630 京いちにち」で、外食産業のフードロスの削減 についてさまざまなユニークな取り組みがコンパクトに紹介されていた。今後もこの ように身近だが忘れてしまいがちなことをニュースで時折取り上げてもらいたい。私 たち自身のライフスタイルも変わっていくのではないかと思う。

- 2月13日(火)のハートネットTV シリーズ 依存症 第1回「ギャンブル依存症 孤立する当事者と家族」を見た。ギャンブル依存症の疑いがある人は、推計320万人という数字に驚いた。これまでもこの番組では、積極的に依存症を取り上げてきたようだが、番組冒頭で弟のギャンブル依存症を治すために、兄が自宅を取り壊してさら地にしたことに衝撃を受けた。また、もう1人の20代のギャンブル依存症の男性と支援者の女性とのやりとりもすさまじかった。番組では、依存症を病気と認定して、依存症になった人たちを社会全体で更正させることが重要だという趣旨だったが、依存症となった根本の原因を解決する必要があると思う。誰もが多かれ少なかれ相互依存の中で生きているので、今後も取り上げてほしい。
- 1月1日(月)の正月時代劇「風雲児たち~蘭学革命篇(らんがくれぼりゅうしへん) ~」(総合 後7:20~8:49) は、本当におもしろかった。番組冒頭で、「これは大河ドラマではない。よって時代考証は大ざっぱである。」と断ったうえで、このドラマでは「解体新書」の著者に前野良沢の名前はないのは、杉田玄白たちがおもんぱかったためだとしていた。当時の日本語にはない「神経」や「十二指腸」ということばを作るなど、蘭学が日本に入ってきたときの苦労などがよく描かれていた。
- NHKに限らず、歌謡番組で歌の紹介をするときに、例えば「次は石川さゆりさんで『津軽海峡・冬景色』」というような言い回しをよく聞く。「石川さゆりさんの歌で」というコメントは時間がかかるため、省略しているのではないかと思うが、もう少し丁寧な表現をお願いしたい。
- 1月28日(日)の聖火のキセキ「大阪」(BS1 後7:00~7:25)で、大阪には、コースを走れなかった幻のランナーがいたことを初めて知った。大阪プールや、水泳王国復活のきっかけとなるスイミングスクールの歴史が紹介されていて大変おもしろかった。幻のランナーの皆さんが 2020 年に聖火ランナーとして走れるよう、NHKもサポートしてほしいと感じた。
- 2月2日(金)の「ニュースウオッチ9」では、冒頭10分間ほど日本相撲協会の理 事選挙で貴乃花親方が落選したことを取り上げていた。相撲は国技だと考える人も多 いが、トップニュースにすることに違和感があった。内容的にも民放のワイドショー とあまり変わらなかった。ちなみに、翌日の新聞では大手5紙のうち、一面で伝えた

のは2紙だけだった。

○ 1月29日(月)の時事公論「仮想通貨流出」は非常に分かりやすい解説でよかった。 個人的には、仮想通貨は、通貨というより投機商品だと思っていて、若い人を中心に 取り引き量のシェアが大きくなっている。いずれ大きな問題に発展すると感じている ので、折を見て仮想通貨のリスクについてわかりやすく詳しく番組で取り上げてほし いと思う。

> NHK 大阪放送局 番組審議会事務局

# 平成30年1月NHK近畿地方放送番組審議会

1月のNHK近畿地方放送番組審議会は、17日(水)、NHK大阪放送局において、 10人の委員が出席して開かれた。会議では、事前に視聴してもらった、「第17回わが 心の大阪メロディー」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、2月の番組編成の説明が行われ、 会議を終了した。

# (出席委員)

委員長	西田 賢治	(大阪商工会議所 元常務理事)
副委員長	山 﨑 弦 一	(日本労働組合総連合会大阪府連合会 会長)
委 員	浅 野 秀 剛	(あべのハルカス美術館 館長)
	市 田 恭子	(デザイナー集団 Team coccori 事業代表)
	片山九郎右衛門	(公益社団法人京都観世会 会長)
	小 林 祐 梨 子	(スポーツコメンテーター)
	田 辺 眞人	(園田学園女子大学 名誉教授)
	原さだ	(財団法人龍神村開発公社 専務理事)
	安 井 良 則	(大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼
		感染管理室室長)
	山 舗 恵子	(京都リビング新聞社 編集部長)

## (主な発言)

<「第17回わが心の大阪メロディー」

(総合 12月12日(日)後7:30~8:43放送)について>

○ 最初はお笑い芸人たちと演歌の歌手が出演してどのような番組になるのかと思っていたら、見ているうちにおもしろくなってきた。北新地と「北酒場」をかけるのはかなり強引だと思ったが、春澪さんの歌があまりにうまくて驚いた。また、大阪出身の女性歌手が多く出演していたが、男性歌手は大阪とは関係のない人ばかりだった。「大阪で生まれた女」は、大阪から東京に転勤したときにずっと心の中で口ずさんでいた歌であり、大阪に戻ってきてからも大事にしている歌なので、うれしかった。天童よしみさんの歌唱力は抜群で、"大阪の宝"だと思う。司会の葵わかなさんはいつも応援しているが、今回も頑張っていた。

- 引き込まれるように見ていたが、北新地には縁がないので、どういう意図で北新地からの中継を入れたのかをあまり理解できなかった。その中継で音声が聞こえにくいところがあったが、トラブルと演出のどちらなのかと思った。全体としては、久しぶりに楽しんで見た音楽番組だった。ベテラン歌手の歌唱力はもちろん、寸劇の川中美幸さんの演技や、最近話題の同志社香里高等学校ダンス部も頑張っていてよかった。歌番組として完成度が高かったが、番組の宣伝のように感じられるのは若干残念だった。司会の葵わかなさんは初々しくて好感を持ったが、"カンペ"が出されている方向が視線でわかってしまうので、工夫してほしかった。また、歌の合間での、内場勝則さんの盛り上げ方やテンポもとてもよかった。川中さんが歌う背景に映し出された、川中さんの母親の生前の映像は思っていた以上にきれいで効果的で、川中さんを長年支えてきた母親の話と映像が重なり、本当に感動した。
- 今回初めて見たが、予想以上に楽しかった。タイトルから演歌歌手が出演する歌番組だと思っていたら、バラエティー番組だった。「わろてんか」とのコラボや寸劇、 "大阪で生まれた女"の企画など、本当に盛りだくさんだった。べたで大阪らしい番組で、北新地からの中継ではお笑い芸人の方が出ていてかなり思い切った番組作りをしていたので、歌番組を見たい人や世代によっては、期待外れだったように思うが、あまりNHKを見ない人には楽しんで見てもらえる番組だったのではないか。同志社香里高等学校ダンス部については、日本高校ダンス部選手権で優勝したことにも触れたほうがよかったと思う。また、視聴者からリクエストを募ったということについても、番組内で強調したらよかったと思う。インターネットでも盛り上がっていたが、最後の上沼恵美子さんの登場は"サプライズ"だったのだろうか。番組タイトルに、毎回のテーマにそった副題がついていると、単なる歌番組と思っている人以外にも、見てもらえるのではないかと思う。
- 家族と紅白歌合戦を見る以外、歌番組はめったに見ないが、結構楽しんで見られた。 この番組は何度か見たことがあるが、半分以上が同じ歌で、出演する歌手は全体的に 高齢化している。今回は、出演したお笑い芸人や若い出演者が浮いていて、葵さんも 番組の宣伝のために司会に立てられているように感じた。番組冒頭で、細川たかしさ んが歌っている途中で中村美律子さんが歌い始めたのは演出だと思うが、こうした演 出は必要なのかと感じた。一方で、北新地の中継で音声が切れていたのは生放送なら ではと感じさせる場面だった。また、北新地で「北酒場」を歌うことには、違和感を 覚えた。

- 知り合いで"北新地の場面は店の中ばかりだったので、北新地らしいネオンが見たかった"という感想を言っていた人がいたが、自分もそう思った。また、中高年の人しか見ない番組だと思っていたら、SNSにたくさんの書き込みがあったので驚いた。リクエスト中心で同じ曲を同じ歌手が歌うことも多い中、亡き母親のエピソードとともに、川中さんが歌った「ちょうちんの花」は初めて聞いた曲だったが、いい曲なので繰り返し見た。この番組を見なければ、この曲を知ることもなかった。川中さんは涙ながらにこの歌を歌っていた一方で、コントも絶妙で、ギャップが感じられてよかった。また内場さんの声はよく通り、絶妙な間合いが光っていて、舞台人だと感心させられた。春澪さんの歌も上手で驚いた。大阪出身で大阪の歌を歌う男性歌手が少なくなる中、BOROさんを応援している。ハプニングもあったが、生放送の緊張感が伝わってきて、とてもよかった。
- 年末恒例の本当に楽しい番組だった。ただ、3年前も指摘したが、「河内おとこ節」の曲名を紹介する場面で、"河内"の部分が関西のアクセントと違うので、改善してほしい。前回はアナウンサーが紹介して違うアクセントだったが、今回は大阪府出身のタレントだったので、とても驚いた。以前、この番組で宝塚歌劇団が出てきたこともあるが、今回も前川清さんが「そして、神戸」を歌っており、「わが心の大阪メロディー」といいながら、神戸を舞台にした歌が出ていた。また北新地からの中継の意図がわからなかった。同じ飲食店でも大阪であれば、串カツ屋などでもよかったのではないか。「わろてんか」とのコラボレーションについては、自分自身ドラマを欠かさずに見ているし、出演者も上手だったので、とてもおもしろかった。
- タイトルが"昭和"のイメージなので、ふだんであれば演歌の番組だと思って、見ないと感じた。この中で知っている曲は数曲で、細川さんが登場したときには、こぶしたかしさんのイメージしかなかった。自分は演歌とは無縁なので、大御所の川中さんも、とても演技が上手だという印象だった。春澪さんはかなり歌唱力があり、水谷千恵子さんもとてもおもしろかったとは思うが、北新地からの中継には少し疑問を感じた。全部が演歌ではなく、コントと音楽が半々で、音楽では、よく知る「Let It Go~ありのままで~」やエンターテインメントの部分があって、おもしろいと感じた。また、初々しい葵さんを藤井隆さんがカバーしていて、とても安定感のある息の合った司会だと感じた。大トリの上沼さんはかなり迫力があり、大御所の歌手たちと一緒に歌うエンディングは大阪らしくてよかった。
- 自分よりも少し上の世代向けの番組なので、番組を見て、さびのフレーズだけを知っていた曲と曲名が一致したという感じだったが、終始おもしろかった。特に「わろ

てんか」とのコラボレーションの寸劇では、寺ギンさんの姿も久しぶりに見られて、テンポもよく、とてもおもしろかった。たまに「うたコン」を見ると、演歌歌手のあとに若いアイドルが出てきてバランスの悪さを少し感じるが、この番組は久しぶりに見やすくてターゲットがはっきりした歌番組だと感じた。May J.さんの「Let It Go~ありのままで~」はどの世代も知っている曲で、聞いていて気持ちがよかった。北新地からの中継は、水谷さんのキャラクターを生かすためかと思った。私は、水谷さんの大ファンだが、母親世代は友近さんと水谷さんの存在について混乱しているようで、おもしろおかしく感じる。番組終盤で、大御所感漂う上沼さんが羽のついた衣装で登場したときに、バックダンサーが「わろてんか」の背面踊りをしながら出てきて、本当におもしろかった。大阪らしい本当に楽しい番組だった。

- 平和勝次とダークホースの歌など、大阪と関わりのある懐かしい歌がたくさん聞けてよかった。同志社香里高等学校のダンス部の出演や"大阪で生まれた女"のインタビュー企画もよかった。視聴者にはなじみの薄い場所でもあるので、北新地からの中継は少し疑問に思う。喜劇の場面では、川中さんやお笑い芸人の芝居はうまいが、それ以外の歌手にはぎこちなさがあったので、喜劇をもう少し短くして、歌を入れたらよかったと思う。
- たまに行くことのあった北新地や宗右衛門町を懐かしく思いながら楽しく番組を見た。「月の法善寺横丁」が大ヒットしたのが 1960 年代と改めて知り、ときの流れを感じた。「雨の御堂筋」をMay J.さんが歌うときに、雨に濡れた御堂筋といちょう並木の映像を流してほしかった。天童さんの「道頓堀人情」を聞いて、東京に負けるものかと頑張っていたころを思い出した。久しぶりに聞いた歌もかなりあったが、演奏が始まると口ずさみたくなるようなメロディーや、大阪の情景や人情をとてもうまく表現した歌詞なので、今でも多くの人の心に残っているのだろうと感じた。「わろてんか」とコラボレーションをしたコメディーは、本当に芸達者な歌手たちの演技に思わず笑ってしまった。司会の葵さんは、だいぶ緊張していたように感じたが、忙しい師走にもうひと頑張りしようと元気を与えてくれる番組だった。ただ、北新地へ向かうバスの場面はないほうがよかったのではないかと感じた。
- 全体として純粋に楽しめた歌番組だった。「わろてんか」の出演者が出てくるのは 今ならではで、途中挟まれる寸劇がいかにも大阪風だったが、長い時間ではなかった のでうるさく思うこともなく楽しめた。関東だと演じるほうにも若干の恥じらいが見 られそうだが、そこは大阪、川中さんがとても上手で、水を得た魚のようだった。水 谷さんや春澪さんは大好きだが、会場だけで落ち着いて歌を楽しみたかった気もする。

もっとも北新地を見せないと"真の大阪""わが心の大阪"にはならないのだろうか。 歌のときに流れる昔の映像がとてもよくて、かなり興味をかきたてられた。特に、川 中さんの母親の映像は胸に響いた。初めて見た番組なので、最後の上沼さんに少し唐 突な印象を受けたが、17回も続く番組なので、これも恒例だろうか。1時間以上の 番組でもリラックスして楽しめた。

#### (NHK側)

「わが心の大阪メロディー」は、NHK大阪ホールのオープンをきっかけに第1回が始まり、今回で17回目になる番組だ。大阪の歌を核に据えているので、毎年同じ曲ばかりだという声が視聴者からも寄せられることは確かにある。そういう中で、どうしたら新しい曲を長時間の番組で聴いてもらえるのかと、スタッフー同、毎年知恵を絞っている。

## (NHK側)

2016年は食い倒れをテーマに、定番のミナミの道頓堀や串カツ 屋などから中継をしたので、今回は、東京の銀座に対抗する場所と して、大阪の北新地を中継場所とした生放送ということもあり、店 に「クラブ千恵子」と名前を付けてフィクションであることを匂わ せた。「北酒場」を北新地で歌うことに違和感があったということ だが、歌を紹介するときに、あえて「キタの酒場で『北酒場』」と テロップを表示して、演出したつもりだった。北新地で、水谷さん の音声が切れたのはハプニングで、中継の直前に水谷さんに付け ていたマイクのスイッチが何かの拍子に切れてしまったようだ。 「副題があったほうが見やすかった」という指摘があったが、今回 は「笑いと人情の街・大阪 ぎょうさんわろてんか!」という副題 をつけてはいた。「わろてんか」が放送中ということで、「わろて んか」のコント仕立ての場面や、川中美幸さんやBOROさんの場 面など"笑いあり涙あり"で大阪らしさを演出した。「河内おとこ 節」のイントネーションについて、中村さんご本人は必ずそのよう におっしゃっていると思うので、紹介のしかたについても改めて 検討したい。

#### <放送番組一般について>

- 12月9日(土)のブラタモリ「‡93 彦根」を見た。この番組は好きでよく見ているが、特にタモリさんの地形に関する博識さに驚かされ、よく知る土地ほどその新しい知見に感心している。彦根は昔から交通の要衝だが、徳川幕府譜代筆頭の井伊家が彦根に配された理由がよく理解できた。彦根に仏壇仏具店が多いのは、武具作りから派生したとのことで、井伊家の赤備えの軍は関ケ原の合戦などでの活躍でも有名だが、鳥羽伏見の戦いで徳川幕府に背いて新政府側へ寝返らなかったら、彦根城も仏具店も存在しなかったのではないかと思った。
- 「ブラタモリ」は、全部録画して関連書籍もそろえている友人が結構いるので、番組のサイトで動画を一覧して見られたらよいと思う。タモリさんの知識欲と番組の進め方の自然さに好感を持っている。今回の番組は、全体の構成がまとまっていて安心して見られた。内湖や足軽屋敷のことなどは初めて知ったが、なぜ家康は「彦根をイイ」と思ったかをテーマに、地形的や地理的な面から実証的に積み上げていて、自然とふに落ちた。江戸時代の初期に治水工事がどのように行われたかにも興味がわいたので、その点も含め、滋賀県をまたこの番組でとりあげてほしいと思った。
- ブラタモリ「‡93 彦根」を見て、知らなかったことがかなりたくさんあり、彦根の良さや歴史がかなり分かりやすく詰まっていたので、楽しかった。交通の要衝だったことや、近江の米が江戸時代に3本の指に入っていたこと、足軽屋敷のことなど、彦根は魅力的な町だと思った。番組の途中で、案内人の京都女子大学の教授が何の前触れもなく急にいなくなったのが気になった。番組全体としては、彦根のことがよく分かってよかったが、大河ドラマ「おんな城主 直虎」が「井伊」だからといって、「家康がなぜ彦根をいいと思ったのか」を繰り返さなくてもよいのではないかと思った。
- 「ブラタモリ」は時々見るが、すぐれた番組だと思う。彦根の回も、完成度が高いと感じた。タモリさんは事前にかなり勉強して撮影に臨む一方で、近江友里恵アナウンサーはあえて勉強せずに臨むようにしているのだろうか。タモリさんが案内人の「離合」ということばに食いついたり、金ぱくを押したときに「はくがつく」というだじゃれがあったり、町なかで「鶴瓶の家族の乾杯」のポスターをみつけて笑福亭鶴瓶さんの話をしたり、生っぽい感じでよかった。
- ブラタモリ「‡93 彦根」が放送される数日前からSNSで話題になっていた。

滋賀県内でもとても話題になっていて、よくここにスポットを当ててくれたという思いだ。足軽屋敷は最寄り駅から少し離れていて、車で迷い込むと道幅が狭くてすってしまうようなところにあるのだが、案内人が誇らしげにしていてうらやましく感じた。 彦根仏壇の関係者も仏壇を取り上げられて喜んでいた。仏壇には七種類の伝統職人の技が合わさって作られるということだが、仏壇街は"七曲がり"という地区で、足軽屋敷と同様、敵をくい止めるおもしろい場所なので、その点も掘り下げてほしかった。

- タモリさんの知識は本当にすごくて、質問にもすべて正解していくので、この番組でタモリさんのイメージが変わった。彦根には行ったことはないが、地形の話がとても分かりやすく、歴史をひもときながら話をしていて、行ってみたいと感じた。逆に知っている場所を取り上げた回も見たいと感じた。さらに年齢を重ねていろいろな場所に行きたくなったら、番組の見方も変わると思う。
- ブラタモリ「#93 彦根」は、地勢や川の付け替えも含めて、地形を利用しながら 400 年前に城下町ができていたということや、彦根城の構造などを、正面から取り上げていてとてもよかったと思う。学芸員が、彦根城を案内していていちばん興奮する場所は、天秤やぐらということだったが、大手門から行かず裏道を通るルートでは、天秤やぐらを上から見下ろす位置関係になっている。駐車場の関係かもしれないが、この番組のように天秤やぐらを下から見上げるルートに誘導したほうがよいと思う。
- 番組の冒頭でタモリさんが「彦根は彦根城以外に何があるの?」と言っていたように、自分もそう思っていたが、番組を見て、本当に訪れてみたいと感じた。彦根の人気のゆるキャラが出てきたが、他にも全国各地にいろいろと出てきているので、よいPRになったのではないかと思う。私の地元が昨年3週連続で「ブラタモリ」で紹介されたが、いまだに番組を見て訪れる観光客が多く、影響力のすごさを感じる。今回は金ぱくの場面や「離合」や鶴瓶さんの話も出てきて、とても楽しかった。
- 「ブラタモリ」は毎回録画をして必ず見ていて、彦根の回も翌週の宝塚の回もおも しろかった。これからもぜひ続けてほしい。
- 今回の「ブラタモリ」も視聴者が興味を持ちそうなポイントをうまく取り上げていて、おもしろい番組に仕上がっていた。彦根城の北側に内湖があることは知らなかったが、山とびわ湖と内湖とで三方を自然のとりでで囲まれていることに加え、彦根城の南側に足軽屋敷を配置することで、平城の彦根城が敵を防御する陣営を整えていた

ことが、よく分かり、大変興味深かった。

○ 「ブラタモリ」は歴史地理学をわかりやすく楽しめる番組で、時間があればいつも見ている。回を重ね、見る側も推理する力もついてきたので、どんな仕掛けや理由があるのかと、一緒に謎解きを楽しんでいる。毎回登場する地元の案内人からは、歴史への深い知識をベースに、個性や地元愛がしっかり伝わってくるが、今回の学芸員もとても楽しい人だった。遅い時間帯に放送していた時代とは別の番組だと思っているが、少々お膳立てされ過ぎていて、諸国漫遊を楽しむお殿様のような印象を受ける。案内人が「さすがタモリさん、すばらしい」などとよく言うが、そろそろ禁句にしてはどうか。"ワルいタモリさん""イジるタモリさん"も、もう少し楽しみたいものだ。

## (NHK側)

今回は番組についてたくさん「イイ」をいただき、本当にほっと している。「井伊」にこだわりすぎではないかという指摘もあった が、一つの筋を通すという意味で採用した。タモリさんの滞在時間 に制約がある中で、中継番組を収録するような形で番組を制作し た。

## (NHK側)

彦根城は滋賀県民にとって大変親しみのある場所で、大堀切などは説明をされなくてもわかるような場所なので、滋賀県民にも納得してもらえる番組を作ろうと考えた。内湖や足軽屋敷をタモリさんにどのように見てもらえるのかということを考えながら制作した。

- 1月2日(火)の「新春TV放談2018」(総合後10:55~3日(土)前0:13)は、2017年に見ておもしろかったので、今回も見た。民放のプロデューサーやインターネットテレビの関係者が放送局の枠を超えてテレビ業界のこれからを話し合う番組だが、本当におもしろかった。視聴率が低い番組でも、会社や友人やSNSではかなり話題になっている番組もあるので、番組の価値は視聴率だけでは測れないという話には共感した。SNSを見ながらテレビを見るというテレビの見方にも触れていたが、今後についての話はとてもおもしろかった。ぜひ来年も放送してほしい。
- 12月29日(土)のスペシャルドラマ「龍馬の遺言」(BSプレミアム後7:30~9:00)を見た。11月19日(日)のNHKスペシャル「ドラマ 龍馬 最後の30日」(総合

後 9:00~10:00) はやや暗い印象を受けたが、このドラマはNHKスペシャルの内容の前後に龍馬の死後の話が加わっていて、別の番組のようだった。なぜ同じスタッフで2種類の番組を作ったのかという疑問はあるが、おもしろい番組だった。

- 1月5日(金)のかんさい熱視線「涙の五輪切符ーフィギュア女子 激闘の舞台裏ー」 を見た。宮原知子選手を 2013 年から取材してきたということだが、日頃から厚く取 材をしているNHKのスタッフの力を感じた。
- 1月12日(金)のかんさい熱視線「"私の震災"を遺(のこ)すー阪神・淡路大震災 23年一」は、人と防災未来センターに寄贈されたものをめぐる話で、とてもおもし ろかった。最も感心したのが町に「せせらぎ」を流すことを実現した野村勝さんの話 だった。実現しただけでなく、今もご自身が定期的に行っている清掃に町の若者たち も参加していることに、非常に感銘を受けた。

## (NHK側)

一般的にフィギュアスケートの取材は非常に難しいが、担当の 取材者は、選手と人間関係を作って、かなり深い取材をしている。

- 1月14日(日)のNHKスペシャル シリーズ 人体 神秘の巨大ネットワーク 第4集「万病撃退! "腸" が免疫の鍵だった」を見た。4回目を初めて見たが、初回 から見ればよかったと思えるような番組だった。
- 連続テレビ小説「わろてんか」を本当に楽しく見ている。1月15日(月)の放送ではラジオ体操をする場面があったが、今の音楽ではなく、当時の音楽を使っていたことには、本当に感服した。1月9日(火)の放送で、関東大震災の号外が出てくるが、その発行の日付が9月1日となっていたように見えた。自分が知るかぎりでは、神奈川の警察部長が朝日新聞に送ってきた至急電信の情報をもとに、9月2日の朝日新聞に「帝都の消息が8時間音信不通になったことは前代未聞」と掲載されたと記憶している。9月1日のうちに号外が出ていたのであれば、ぜひ教えてほしい。

## (NHK側)

大阪にいる主人公・てんが号外を見る場面は、関東大震災の翌日の昼間に見たという設定で描いている。 号外に掲載してあった 9 月1日の日付は、地震が発生した日のことで発行の日付ではないが、そのように見えたかもしれない。

- 1月5日(金)の「ニュースウオッチ9」を見た。この日は東京で経済団体の賀詞交換会があった日で、株価の動向や春闘の賃上げへの対応について経営者に話を聞いていた。政府が3%の賃上げを要請していることもあって、"官製春闘"のイメージが強く打ち出されたニュースだと感じた。そのあと日本労働組合総連合会の新年交歓会の映像も出たので、労働側の見解も報道されるのかと思っていたら別の内容だった。
- 12月27日(水)の「おうみ発630 年末ハイライト2017」(総合後6:10~7:00滋賀県域)を見たが、滋賀県出身の陸上の桐生祥秀選手がホットな話題として取り上げられていてよかった。最近の放送を見ていると、にぎやかで、コーナーも出演者も多いという印象を受けるので、もう少し落ち着きがあってもいいと思う。
- 1月14日(日)の「第36回全国都道府県対抗女子駅伝」(総合 後0:15~3:12)では、2017年からライブストリーミングをしているが、とてもよい試みだと思う。1 号車から3号車までの映像をインターネットを通じてナマで見られることはすごいと思うし、迫力ある映像をテレビ以外でも見てもらえることは本当によいと思う。

# (NHK側)

ライブストリーミングは年々技術的に改良を加えており、アクセス数も 2017 年の数倍と大きく増えている。

- 12月26日(日)のルソンの壺~12月号~「社長の失敗談スペシャル~失敗から 学んだ"経営術"~」は、4人の社長の失敗談を聞き出していた。「ルソンの壺」に ついては、成功に至るまでの数々の失敗談が反面教師として役立つとたびたび指摘し てきたので、大変よかったと思う。
- 12月23日(土)の「経済フロントライン」では、2018年のトレンドを予測していたが、ジョセフ・クラフトさんのキーワード「ジェネレーションZ」に大変興味を持った。生まれた時からインターネットが当たり前のZ世代では、社会のあらゆるものにAIが使われるようになると、例えば鏡を見た女性の表情をAIが読み取って化粧品だけではなく、客ごとに最適な商品を広告して購買につなげるということが可能になるとのこと。AIに心を読まれて人が操られる不気味な世の中になるのではないかという危惧を抱いているので、今後は、AIの利便性だけでは無く、負の側面にも焦点を当てた番組をぜひ制作してほしい。

○ 1月16日(火)の「北朝鮮ミサイル発射の模様」という速報がNHKのホームページとニュース・防災アプリで誤って出た件は、「ニュース7」で知って、大変驚いた。 先日のハワイでの北朝鮮ミサイルの誤警報を無関係のように思っていた。日本でもこのようなケアレスミスがあると、重大事に発展することにもなりかねないので、ぜひ再発することがないように万全の体制をとってほしいと思う。

## (NHK側)

「北朝鮮ミサイル発射の模様」という速報の件については、NH Kのホームページとニュース・防災アプリで誤った情報が出たこ とについて、おわびしたい。

○ 12月16日(土)の開局80年奈良アーカイブス ある人生「仏像との対話」(総合後3:05~3:40 奈良県域)を見た。奈良大和路を生涯撮り続けた写真家の入江泰吉さんが、仏像を撮影する姿を追いかけた番組だ。仏像を写真に撮ることの覚悟が伝わってきたが、いちばんすごいと思ったのが、入江さんが撮影する姿を撮るNHKの撮影スタッフだ。入江さんのモノクロ撮影になぞらえたのか、時代的にもおそらくあえてのモノクロ撮影が非常に効いていて、実験的でシュールな攻めの映像だったと思う。暗闇に浮かび上がる入江さんの姿はそれだけで強烈だった。きっと入江さんも撮影には相当協力されたのだと推察するが、撮ることのプロ同士だからできた映像で、入江さんが仏像と対話するのなら、カメラマンもずっと入江さんと対話をしていたのだろうと思わせる、うなってしまうような鬼気迫る番組だった。録画して夜中に見ていたが、すっかり目がさえた。

NHK 大阪放送局 番組審議会事務局

## 平成29年12月NHK近畿地方放送番組審議会

12月のNHK近畿地方放送番組審議会は、20日(水)、NHK大阪放送局において、 10人の委員が出席して開かれた。会議では、事前に視聴してもらった、NHKスペシャル「ドラマ 龍馬 最後の30日」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、1月の番組編成の説明が行われ、 会議を終了した。

# (出席委員)

委員長	西田 賢治	(大阪商工会議所 元常務理事)
副委員長	山 﨑   弦 一	(日本労働組合総連合会大阪府連合会 会長)
委 員	浅 野 秀 剛	(あべのハルカス美術館 館長)
	市田 恭子	(デザイナー集団 Team coccori 事業代表)
	小 林 祐 梨 子	(スポーツコメンテーター)
	鈴 木 元 子	(月刊大和路ならら 編集長)
	田 辺 眞人	(園田学園女子大学 名誉教授)
	原さだ	(財団法人龍神村開発公社 専務理事)
	安 井 良 則	(大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼
		感染管理室室長)
	山舗恵子	(京都リビング新聞社 編集部長)

# (主な発言)

< NHKスペシャル「ドラマ 龍馬 最後の30日」 (総合 11月19日(日)後9:00~10:00放送)について>

○ 司馬遼太郎の小説「竜馬がゆく」を愛読したが、この本が世に出なかったら、これ ほどまでに多くの人が坂本龍馬のことを知り、語り合い、龍馬をテーマとした大河ド ラマやNHKスペシャルも制作されることはなかったのではないかと思う。私自身、 "司馬史観"の影響を受けているためか、今回のドラマで山内容堂が坂本龍馬の暗殺 をもくろみ、そのことを中岡慎太郎も知っていたというストーリーにはかなり違和感 を覚えた。また後世になって、多数の研究がされてはいるものの坂本龍馬については 実際には分かっていないことがまだまだ多いという印象を持った。龍馬暗殺について 直接手を下したのは見廻組との説が有力だが、この番組では、徳川慶喜の側近である 永井玄蕃頭が暗殺を指示したことを示唆している。いずれにせよ、坂本龍馬は大政奉 還によって政治権力の中枢に手を突っ込みつつあり、幕府側と薩摩長州の双方から恨 みを買う可能性が高かったことは間違いないと改めて感じた。ただ、坂本龍馬は歴史 に大きな影響を及ぼしたにもかかわらず、実際に権力を手中にすることがなく、若く して亡くなったことで後世の日本人にも人気があり、忘れられない存在になっている のではないかとも思った。

- 番組を見終わった後、このようなことが実際にあったかもしれないと思った。全部ドラマだけで新説を紹介するのは、かなり斬新だと思った。また、映像の色のトーンがすごく独特で、ドラマというよりは映画のような感じだ。少し薄暗いくらいの感じが、日本の夜明け前のようでもあり、龍馬の頭の中の混沌としたイメージでもあり、印象に残った。すごくハードで暗くなりがちな内容で、こわもての俳優が多い中、岡本健三郎役の伊藤淳史さんの存在がドラマを見やすくしていたように思う。岡本を通して龍馬を見ると、現代でも龍馬が身近に感じられて、気楽に見られた。実際の歴史についての謎はこれからも残っていくと思うが、おもしろかった。また、どのように謎をひもといたらあのようなドラマになったのかという裏話もあったら見たいと思う。
- 「竜馬がゆく」は、50年以上前に通読したことがあり、潜在的に龍馬ファンだが、年を経るに従い、どうして龍馬だけがあれほど評価されるのかと思うようになった。薩長同盟は大きな功績だと思うが、個人的には龍馬の手紙をもとにドラマを作り、NHKスペシャルで放送したことは、非常に大胆で評価したい。ただ、ドラマであるならば、1時間飽きさせないようにもう少し工夫してほしかった。龍馬には非常に明るいイメージがあるので、龍馬を主人公にしたドラマであればもう少し快活なテンポで進んでほしかったが、ドラマ全体は暗くて重苦しくて、あまり入り込めなかった。永井玄蕃頭が暗殺を指示したというような内容になっていたこともかなり意外だった。ドラマの最後に手紙が出てきたが、手紙は具体的にどういう内容で、それをどのように読み取ってこうしたドラマになったのかということはあまりはっきりしないので、かなり難解に思えた。龍馬があちこちで少しずつうそをついて一堂に会することを画策しているということだったが、龍馬だけが本当に開明的な考えの持ち主で先を見通す見識があったというような描き方は、龍馬ファンでも抵抗があり、違和感を覚えた。
- 今までも龍馬について数々のドキュメントやドラマを見てきたが、新井浩文さんの 演じる龍馬は無骨な感じで、しっくりきた。最初のナレーションの「大胆な仮説に基 づく」がかなり印象に残ったので、この番組は完全にドラマとして見ることができた。

坂本龍馬から出てくる数々のことばから、彼は、ベンチャー的な考え方の人に思えた。 坂本龍馬が人を欺いていく場面は、とても楽しかった。最後の場面はかなり印象的で、 福井藩家老の中根雪江が手紙を読んで、紫の絹の布を引いた桐の箱に丁寧に入れるが、 紫は一番高貴な色なので、なぜそこまで龍馬を敬っているのだろうと、史実に詳しく ない人間としては不思議に思った。

- 仮説に基づくということなので、本当に抵抗なくドラマを見始めることができた。「どいつもこいつも頭が固くて自分が得することしか考えてない。」など一つ一つのせりふも、一枚二枚上をいく龍馬の姿がとてもすてきだったし、特に岡本健三郎役の伊藤淳史さんとの掛け合いが本当におもしろくて笑いながら見ていた。コミカルな部分がたくさんあったので、見終わったときに、見てよかったと思った。また、"あと30日"とカウントダウンをすることによって、スリルを感じながら見ることができた。ひとつ気になったのが龍馬のしゃべり方だ。土佐弁には詳しくないが、かなり違和感があった。それはそれでおもしろかったので、歴史があまり得意ではない私でも、番組をおもしろく見ることができた。
- 初めからドラマとして割り切って見たが、大河ドラマも含めて歴史的なものをドラマ化すると、うつうつとするところがたくさんある。坂本龍馬の資料は非常に乏しいので、どんな人かわかっていないのに、司馬さんが書いた龍馬が本当のように思われている。ドラマと史実が混同されていることを痛感するが、今回は初めから非常に大胆な仮説でということで、ドラマを作るならこのぐらい大胆でよいと思う。福井藩主の松平春嶽についての資料はある程度残っていて、日本が春嶽を中心とした新国家になっていたらどうなったのだろうと常々思ってきた。それも含めて、非常におもしろいドラマ作りをしていたと思う。冒頭で手紙の解説があったが、ドラマを見た人は、資料にこういうことが書かれていると思うので、仮説に基づいたドラマということであれば無かったほうがよかったのではないかと思う。しばしば船中八策が取り上げられていたが、その中身の説明があったら、あの手紙に残る新しい国の姿がかなり斬新なアイデアだったことがもう少し伝わったと思う。1時間の歴史ドラマを見るのは嫌だと思っていたが、本当に楽しかった。
- 暗殺される5日前に書かれた、封印されていた直筆の手紙に、新国家ということばが初めて書かれていたということや、龍馬が新しい国づくりに情熱を傾けていたということを、大好きな加賀美幸子アナウンサーの解説で知った。大胆な仮説に基づく物語ということで、スリリングなドラマとしておもしろく見た。龍馬役の新井さんは、怪しげなうさんくさい龍馬によく合っていて、「詐欺師で何が悪い」というせりふも

合っていた。脇を固める俳優も本当によかった。ただ、新井さんの龍馬のことばのイントネーションに違和感があって、正しい土佐弁なのかと感じた。龍馬のせりふで「どいつもこいつも頭が固くて自分が得することしか、考えてない。ほんとに日本の未来を切り開こうとしているのは俺だけぜよ。」というのがあったが、本当に現代にも通じてチクリとくるようなせりふでとても好きだった。

- 全体的にとてもおもしろかった。俳優陣も本当に豪華で、龍馬役の新井さんがものすごくはまっていた。キーワードになっていた船中八策にある「○○○自ら盟主となり」というところに誰が入るのかというあたりから、そのあたりをめぐる攻防はせりふをうまくつなぎながら話が進んでいって、テンポもよくて、うまい作り方だと思った。そもそも冒頭の京都国立博物館の宮川禎一さんのインタビューをあれだけで切ったのがすごいと思った。このドラマのタイトルのデザインは、これから大胆な仮説のドラマが始まることを表している気がしてよかった。写真を最初と最後に持ってきていたが、これも非常によい手法だったと思う。冒頭は写真を撮るときに逆さに見える虚像としての龍馬から、最後は 180 度回転して話をする実像としての龍馬になったときに「詐欺師で何が悪い」と言わせるところが、激しく新説を突きつけられた気がして、かなりショッキングな終わり方だった。欲を言えば、発見された手紙と船中八策の解説がもう少し欲しかった。
- 大変おもしろかったが、番組は大胆な仮説に基づくドラマだと割り切る一方で、史実はどうなのかと疑問が残り居心地の悪さがあった。"盟主は誰か"ということと、 "犯人は誰か"という2つの謎があったと思うが、その盟主は春嶽だというのが相当早い段階で明らかになっていく。なぜ春嶽なのかという疑問があったが、最後に手紙が読まれた場面で、こういう番組を作った理由がやっとわかった。犯人は、余韻を残す形で、慶喜公の側近が犯人なのかと思いながら終わった。その中で、このドラマには2つ疑問を持った。ひとつは、船中八策が龍馬の死の7日前に京都の薩摩・長州藩邸に届けられ、それに対して死の前日に薩摩の西郷と長州の木戸から同意がとられたということになっていたと思うが、6日間で往復できたのか疑問だ。もうひとつは、最後に「詐欺師で何が悪い」という発言があるが、国のためを考えて詐欺師でなぜ悪いのかということで、一面では賛同できるが、言い方を変えると"ホワイトライ"はついてもいいのかという話にならないのかという気がしたことだ。
- 大胆な仮説に基づいたフィクションとはいえ、暗殺5日前の坂本龍馬直筆の手紙を ふまえていて、十分あり得ると思わせるおもしろいドラマになっていたと思う。ドラ マの最後に「詐欺師で何が悪い」と言うが、1人で対立する薩長の同盟を仲介し、多

くの利害関係者を説得して大政奉還を成し遂げるためには舌先三寸で人を丸め込むようなギリギリの駆け引きをせざるを得なかったのではないかと感じた。また、松平春嶽が「私も暗殺者の1人」と言っていたが、暗殺犯については、見廻組をはじめ諸説があって、この仮説も十分ありうると感じた。また土佐藩士の岡本健三郎から「横井小楠や勝先生の受け売りじゃないですか」と指摘されるが、有能な人たちの発想を受け入れて一つにまとめる柔軟性と行動力、有力者との広範な人脈が、龍馬の活躍の原動力になっていたと感じた。龍馬が書簡から新国家の樹立を目指していたことがわかるが、その新国家がどのようなものか、盟主は誰にするつもりだったのか、龍馬が誰に殺されたのかということは謎のままで、今回のドラマの仮説が、新たな調査研究で検証されるのを楽しみにしている。一つ疑問だったのは、龍馬が脇差しを差したまま、松平春嶽に謁見していたが、前藩主とはいえ、ずいぶん不用心に思えて、本当はどうだったのかと感じた。

○ 楽しんで見ることができた。特に前半がよかった。今の世の中に一番足りない、どうしてこんなにわざと複雑であらねばならないのかという思いが簡潔にことばに表れ、正直すっとした。「それぞれの分野で有能な人間たちから新しい発想を寄せ集め、一つにまとめ上げて指針を指し示すことがデモクラシー。そして自分の新しい国家像だ。」と言い切り、人の才覚を見出す広い視野を持った盟主が必要という龍馬。龍馬こそそういう人物だったのだろうが、春嶽を選んだのもそこに無私の奉仕の心があったからだろう。今一番必要な心だと番組を見て思った。ただし、よい話だけにどこまでが事実で、どこからがフィクションなのかは、ぜひ知りたいと思った。後半に進み、コミカルになるに従い、少しストーリーも雑になっていったかと思う。最近の暗殺の推論と司馬さんの「竜馬がゆく」の折衷でできたストーリーのように思う。

## (NHK側)

大胆な仮説に基づき、ドラマで一つの説を描き切るという制作者サイドのねらいを、真正面からしっかり受けとめていただいたようで、とてもうれしく思った。世代によってかなり龍馬のイメージは違うと思うが、人によってそれぞれの龍馬像があるということを本日は実感した。ことしは没後150年、大政奉還150年という年だったが、こういう番組を契機として龍馬のことをいろいろと知っていただき、新しい事実がわかってきたら、さらに番組にすることができたらと思う。

#### (NHK側)

大胆な仮説でNHKスペシャルを制作することは、これまでに あまり無かったので、どういう反響があるかと思いながら番組を 作った。委員の方々からどこまでが史実なのかというご指摘があ ったが、かなり綿密に調べても、新発見の手紙から読み解けること は限られる中で、そこからどれだけ構築するかということに苦心 をした。具体的には、あの手紙が長い間封印されていたのはなぜか というときに、その手紙に、永井と会うことが書いてあるというこ とから、永井の名前と福井藩との関係を隠そうとしたということ で、永井が主犯ではないかという一つの仮説が浮かび上がった。さ らに、春嶽のことを非常に慕っていて、彼が京都に上洛することを 知って"千万の援軍を得たり"と書いてあった。そこから翻って考 えるときに、誰もが"○○○"はこれまで慶喜と思っていたが、実 は、春嶽が入るのではないかと読み解ける。その中で、幕府と倒幕 派という2つの対立以外に、お互いが対立する中で、理想を追い求 めて話し合うようなことがあったかもしれないということを、今 伝えることは意味があるのではないかと思った。あとは、できるだ けいつ誰がどこで会っているかと、細かく史実を拾いながら番組 を作った。わかりにくいという指摘もある一方で、引き込まれたと 考える方もいて、非常に参考になった。うまくバランスをとってい ける方法は何か、ナレーションをどのように使うかなど、制作の現 場としていろいろなことを今後も具体的に考えていきたい。

#### (NHK側)

「NHK特集」の時代から、ドラマ手法の歴史番組は数多く制作されてきた。歴史分野は、公共放送として、教育的見地からもっと多くとりあげるべきだという声も多くあり、BBCをはじめとするヨーロッパでは、歴史をドラマで表現するという傾向が強い。NHKとしてもさまざまな手法に挑戦していきたいと考えている。

#### <放送番組一般について>

○ 11月17日(金)のかんさい熱視線「古都の紅葉物語」を見た。京都と奈良の紅葉についての番組で、様々な紅葉が紹介されていた。東京に住んでいた頃、紅葉の季節に新大阪止まりの新幹線に乗ると、車内は女性客で混み合っていて、大半の方々は京都駅に着くと降りていき、車内が閑散としたことがたびたびあったことを思い出し

た。特に京都は関東の人たちにとっても特別な場所のようで、その紅葉や桜を苦労せずに見に行ける地域に住んでいることは幸せなことだと番組を見て思った。番組の中で、"もみじ"と呼んでいたと思ったらカエデ園の場面ではずっと"かえで"と紹介されていたが、これはどのように使い分けていたのか。もみじの天ぷらは、箕面の山の名物だと思っていたので、京都の高雄にもあると知って、少し驚いた。今年はかなわなかったが、来年は紅葉時期にぜひ東寺に行って真言密教の世界に浸りたいと思った。

- 一つ一つのエピソードはとてもよかったが、番組全体を通して何を伝えたかったのか。古都の紅葉の美しさなのか、人との思い出を伝えたいのか、よく分からなかった。 鉄道会社の観光キャンペーンのキャッチコピーを書く太田恵美さんの話は、京都にしかない話だと思うが、夫婦の清水寺についての思い出話や奈良のいちょう並木は京都や奈良に限らないような話のように思う。清水寺でデートしたという夫妻のインタビューは、清水寺で聞いたほうがよかったのではないか。また、番組では、場面が奈良に行ったり京都に行ったりするので、若干分かりにくかった。もう少しすっきりとまとめてもらって、ぜひ来年も紅葉を取り上げてもらいたいと思う。
- しっかりと取材された内容で、「かんさい熱視線」にしては意外性もあって、最後まで楽しく見ることができた。ただ、もみじの紅葉の話をしているのか、いちょうの紅葉の話をしているのか、紅葉全般の話をしているのか、わからなくなった。「古都の紅葉物語」というタイトルだったので、京都から始まり、そのまま京都の話で通すと思ったら、3番目に奈良市の天理のいちょう並木が出てきて、最後のほうで宇陀市や円成寺の話も出てきたので、京都と奈良を"古都"としているのだと思った。ただ、天理市や宇陀市は"古都"といえるのだろうかと感じた。観光キャンペーンのキャッチコピーの話はよかった。また、最後の円成寺の場面では、木には一本一本個性があって、葉っぱも一枚一枚違うという話があったが、最近は庭を見ていて、松やかえでも細部を見ると形や個性を持っているということに気づいたので、この番組の終わり方は、心に迫るものがあった。
- 番組の制作意図がつかめなかった。アンケートをする必要があるのかと感じた。最後の「紅葉をめでる。それは大切な人を思うことなのかもしれません。」というナレーションは無理があると感じた。視聴者の思い出をもとに作られている番組では「にっぽん縦断 こころ旅」があるが、この番組は、火野正平さんが一見不真面目だが温かい心で視聴者の思い出の土地を訪ねるところがおもしろいと思う。一方、この番組のように、思い出話の本人が登場する場合、ある程度自分と似たような境遇や体験を

していないと、心になかなか届きにくいと思う。番組の中では、コピーライターの太田さんの話は印象深く感じた。「奈良カエデの郷ひらら」の矢野正善さんはとても精力的な人だが、亡くなった奥さんとの思い出とともに紅葉について語っていると、紅葉というより落葉のイメージに感じられて残念だった。

- 番組を見終わってから「かんさい熱視線」だと気づいた。日本人にとって桜と紅葉は特別なもので、はかなさに心引かれてきたのかと思う。番組の最初に「大切な人に少し思いをはせてみませんか」というナレーションがあって、それぞれのドラマを紹介していたが、私自身、京都の紅葉が見たいと言っていた母親が他界した今、連れていってあげればよかったと後悔しながら番組を見た。美しい映像に、サザンオールスターズの音楽をBGMにしていたことは珍しいと感じた。年によって紅葉の時期はずれるので、取材するタイミングには苦労したと思う。太田さんは同じ観光キャンペーンのキャッチコピーを書き続けていて、時代の雰囲気を反映させていることを知り、勉強になった。京都の私鉄会社の沿線にある紅葉は計算してきれいに手入れをされていたことを知り、私の地元は自然のままの紅葉を観光客に見せているので、もう少し努力が必要だと感じた。
- タイトルを見て、京都や奈良のきれいな紅葉を紹介するだけの番組だと思って見る気がしなかったが、見てみたらとてもおもしろい番組だった。観光案内的な番組だと思っていたが、すごいドラマがあって、30分で8つのエピソードを上手にまとめていた。電車の線路に合わせて木の手入れをしていることには感心した。最後の円成寺の庭師の木村光治さんが、息子さんに「木にも寿命があるから、その寿命が来たら変わればいい。」と伝えていたが、かなり共感して印象に残った。ほかの委員から"もみじ"と"かえで"の使い分けについて意見が出たが、番組では厳密に表現していたと思う。ただ、最初の井上茂機さん、久美子さん夫婦のインタビューは明石城で撮影されていたと思うが、場所を紹介してもよかったのではないか。
- とても親近感のわく映像ばかりだった。箕面のもみじの天ぷらをつい最近食べたので、京都にもあるのかと驚いた。庭師の木村さん親子の場面では、親から子どもに木の一本一本が受け継がれていく様子やことばに、とても共感した。子どもが生まれて日光に一緒にもみじを見に行ったので、メッセージが心にとても響いた。
- 番組を見ていて、少し混乱した部分もあった。「かんさい熱視線」は、最近では"あおり運転"や"高校の頭髪指導"の話題をとりあげていて、問題提起をするような番組かと思っていたので、「クローズアップ現代+」とはどう違うのか、知りたいと思

った。また、今回の「古都の紅葉物語」は温かみのある、とてもドラマチックな番組だと思った。番組では、サザンオールスターズの曲がかかっていて、自分やもう少し上の世代ならこうした曲がしっくりくると思うが、70代以上の世代にとっては違和感があるのではないかと思った。

- 紅葉の時期になると、毎日朝のニュースで紅葉の名所を紹介していて、大変季節感があってよいと思う。この番組でも紅葉を堪能できたのではないかと思う。最後に「色づいた葉っぱの一枚一枚が異なるように、それぞれにドラマがありました。」というナレーションがあったが、30分という時間の中で、本当に多くのエピソードが詰め込まれていると感じた。
- 「かんさい熱視線」は、社会問題を扱うことが多いと思っていたが、伊藤雄彦アナウンサーがキャスターになってから取り上げるテーマが多彩になったように思う。当初は、視聴者にアンケートをして番組を制作するというのは安易すぎるのではないかと思っていたが、美しい紅葉の映像にさまざまな人たちの思い出を重ね合わせた物語は、いつもとは違う「かんさい熱視線」になっていたと思う。一人の思い出話を長々と聞けばうんざりするが、京都と奈良の8つの思い出にはそれぞれのドラマがあって、退屈することはなかった。特に京都出身のコピーライターの太田さんのキャッチコピーと当時のキャンペーン映像を見て非常に懐かしくなった。紹介された思い出のうち、京都が8つ中5つということで、取材の重点が京都に置かれていたような印象を受けた。
- 番組を見ながらやはり秋の紅葉は人の心の汗を絞るのだなあ。だから、心も燃えた つのだと一人感慨に浸っていた。番組内の紅葉の映像は、もろもろ今年の秋ではない のではないかと思う。今年はかなり色が美しく紅葉したと思う。ぜひ映像を残してほ しい。最晩年の大人が見たい、紅葉がもっとあると思う。例えば北時雨に洗われた紅 葉や霜や雪に凍えて耐える紅葉などに短い珠玉の言葉を添えてみてはどうか。

#### (NHK側)

「クローズアップ現代+」と「かんさい熱視線」の違いについて ご指摘があったが、テーマの取り上げ方については、「クローズア ップ現代+」で日本人の桜への思いなどを中継で放送する回もあ るように、「かんさい熱視線」も社会問題だけでなく、今の近畿地 方の世相や情感を少しいれる場合もある。今後もより多彩に見応 えがあるものにしていきたいと思う。

#### (NHK側)

「かんさい熱視線」は旬の話題や事件事故の背景を深く知りた いという思いに応える番組で、テーマの取り上げ方は、地域の問題 を第一に採択するようにしている。また、あおり運転など、全国的 に話題のテーマについても、関西ではどうなのかというような問 題意識から作るようにしている。今回なぜ紅葉を取り上げたか、ま た、なぜ視聴者にエピソードをいただいて番組を作ったかという ことについては、ふだんご覧になっていただけていないような方 にも番組を知っていただき、多くの人に見ていただこうと間口を 広げるねらいがあった。"もみじ"と"かえで"の使い分けについ ては、宇陀市の矢野さんは、海外にも知られる「かえで」の専門家 で、宇陀市の場面は「かえで」とコメントすることにした。アンケ ートについては、放送の 1 か月ぐらい前から番組でエピソードを 募集したところ、夫婦の思い出が一番多く、もう一つは亡くなった 方と見た思い出で、大体全体の8割を占めた。結果としては、そう したエピソードに加えて、全国的な名所のもみじを支えている人 の話やキャンペーンを張ってきた裏話など、バリエーションをつ けたほうが、古都の紅葉を魅力的に伝えることができるのではな いかと判断をした。

- 例年「ニュースほっと関西」では、ノロウイルス感染症やインフルエンザの流行情報を伝えているが、ことしはインフルエンザについて、11月17日(金)に紹介していた。その際、毎年、幼児がワクチン接種を受ける映像が紹介されるが、ワクチン不足が懸念される中、優先すべきは高齢者だということを情報だけでなく、映像でも示してほしいと思った。
- 京都国立博物館の国宝展に行ったあとに、11月17日(金)の歴史秘話ヒストリア 「国宝 美と日本人の物語」を見た。番組では、国宝の持つ意味や、先人たちの思い や芸術品としてのすばらしさがとてもよく分かった。歴史秘話ヒストリアに取り上げ るべき内容で、展覧会の宣伝のように感じられなかったのもよかった。
- 11月18日(土)のスーパープレミアム「探検!ツタンカーメン王墓」(BSプレ シアム後9:00~10:59)と、11月25日(土)のスーパープレミアム「古代エジプト 3人の女王のミステリー」(BSプレシアム後9:00~10:59)を見た。「古代エジプト 3

人の女王のミステリー」はよくある紀行型の謎解き番組だと思ったが、「探検!ツタンカーメン王墓」は、とにかくCGのクオリティーの高さに驚いた。本物を見る機会があったが、本物と見まがうぐらいの出来だった。俳優の安田顕さんの芝居もとてもよく、リアルに発掘体験が感じられて、五感に訴えるような番組だった。2016年は日本で組織的にエジプト学が始まって50年だったが、そうした節目の時期あたりでこうした番組が作られたのはうれしかった。

- 12月17日(日)の「おんな城主 直虎『石を継ぐ者』」では、直虎が急に亡くなったのであっけなく感じられたが、直政の元服の場面がとてもよかった。この場面は録画で繰り返し見たし、周囲の人の評判もよく、多くの人が感動して泣いたと思う。8月20日(日)の「嫌われ政次の一生」の回も何度も見たが、1年通して見ると、とてもよいドラマだったと思う。
- 「おんな城主 直虎」を1年見てきたが、毎回のタイトルでいろいろな映画や文学作品のタイトルをもじっていることが気になっていた。大河ドラマは"NHKの顔"という思いがあるので、大切な各回のタイトルを特にオマージュというわけではなく、安易にもじっていることにさみしさを感じた。ネットの世界では元ネタについて盛り上がっていたが、各回がおもしろかっただけにドラマを軽くしているように思えてもったいないと感じた。
- 「おんな城主 直虎」ファンの友人が、大河ドラマは1年間ずっとおもしろいということはあまりないが、今回は最終回まで本当に楽しく見ることができたと話していた。
- 連続ドラマで見ているのは、「わろてんか」と「おんな城主 直虎」だけで、特に「わろてんか」はとても楽しく見ている。出演者の内場勝則さんや矢野・兵動の兵動大樹さんは、関西人にとってはかなりなじみのあるタレントだが、東京在住の友人に、内場さんの話題を振ったところ、よく知らないがよい俳優だというリアクションが返ってきた。物語としては停滞気味の週もあるが、落語の場面はよかった。また、東京出張の際にテレビを見ていたら、NHKニュース「おはよう日本」の最後に「わろてんか」の話題を数秒程度していたのを見て、うれしくなった。
- ことし初めて「おんな城主 直虎」も、連続テレビ小説「わろてんか」も全部見た。 両方ともおもしろく、リアルタイムで見られないときには録画して欠かさず見ている。 ただ、「わろてんか」で気になる点が2か所あった。11月30日(木)の回で、寺ギン

がお坊さんをやめて太夫元になった理由を話す場面で「笑いのほうが現世で迷うてるやつらの救いになるわ」というせりふがあったが、昔お坊さんだった人は厳密な表現をすると思うので、"げんせい"ではなく、"げんぜ"ということばがでてくるのではないかと思った。また、11月25日(土)の回では藤吉の母親・啄子がアメリカに行くという展開は突拍子もないように思えた。一方、「おんな城主 直虎」の最後はもう少し思い切って創作してもよかったのではないかと思う。井伊直虎は詳しい記録が全然残っていないので、好きにドラマを作れると思う。直虎は本能寺の変があった年に死んだことになっているが、その年に歴史の記録上消息を絶ったからなので、直虎は龍雲丸とどこかに行ったということでもよかったと思う。

#### (NHK側)

連続テレビ小説「わろてんか」の藤吉の母がなぜアメリカに行く のかについては、実は伏線はあったが、見逃しやすいと思う。

- 11月18日(土)の連続テレビ小説「わろてんか」では、笹野高史さんが演じる伝統派の大御所・文鳥師匠の落語「時うどん」が見応えがあってよかった。笹野さんの落語をしっかりと長い時間見せており、ネット上でもかなり話題になっていたが、私自身もすごいと感じた。「時うどん」の解説などもあり、当時の笑いの文化をよく知ることができてよかったので、これからも期待している。
- 「ニュースウオッチ9」のセットや、2人のキャスターの距離感についてだが、N HKのニュースといえば、子どものころからものすごく重くて真面目で、それがNH Kの信頼感を育てていたように思う。ニュースは「あさイチ」のように楽しく伝えた り、スタジオを家の中のようにカジュアルにしたりする必要はない。逆にニュースに ついて落ち着いて考える時間を奪われているように思える。若者の視聴者を増やした いというねらいもあるかもしれないが、昔からの姿勢を貫いてほしい。
- 12月16日(土)のえぇトコ「下町の宝 若いモンには負けへんで! 〜東大阪〜」 を見た。東大阪市は、ものづくりや中小企業の町として有名で、高齢の職人がそれぞ れとても元気に頑張っている姿に感心した。ただ、次世代の継承という観点からは、 若い人にも出演してもらったらよかったのではないかと思う。こうした地元密着の番組は作り続けていただきたいと思う。
- 11月25日(土)の奇跡のレッスン「すべての瞬間が 上達のチャンス ラグビー」は、ラグビーのエディー・ジョーンズさんを取り上げていたが、マネジメントの

視点から見ても非常に参考になるものだったので、いろいろな人に見るよう、勧めている。

- 「NHKスペシャル」は、全般的に今年も大変おもしろい番組が多かったと思う。 来年もいろいろなことに挑戦してほしいと思う。
- 滋賀県は日常的に車を運転する人が多く、ラジオはとても身近な存在だが、12月 15日(金)に「おうみi」(FM後6:00~6:50 滋賀県域)を聞いた。滋賀県を拠点 に活動するアーティストの Lefa をゲストにたっぷりと取り上げていて、とてもワクワクするような番組作りをしていた。こうした地方制作の番組は掛けがえのないものだと強く感じた。
- 12月15日(金)のアスリートの魂「16歳 "真のアスリート"へ フィギュアスケート・本田真凜」を2つの視点で見た。一般視聴者の目で見ると、8か月間取材した番組が深夜0時からの放送というのはもったいないと感じた。本田選手は、とてもかわいらしくてファンになった。演技をすぐに修正できなかったり、注意力や集中力が足りなかったりと、16歳らしい裏側を引き出すことができていて、とてもよかった。「自信はありますか」と聞かれて大体のアスリートは「自信はある」と答えるが、本田選手は「全然ない」と本心が引き出せているのはやはり8か月追いかけたから出てくることばだと感心した。一方、実力的には上の選手がたくさんいる中で、かわいくてアイドル性があるから取り上げたのかという目で見てしまった。いずれにしても直前に迫るピョンチャンオリンピックに向けて盛り上がりはすごく欠けていると感じるので、開幕までこうした番組を放送してほしい。

## (NHK側)

「アスリートの魂」について、なぜ本田選手を長期取材したかというと、彼女は昨シーズンの世界ジュニアのチャンピオンで、"ポスト浅田真央"ということと、オリンピックの代表枠が2つしかない中、最有力候補が宮原知子選手で、その2番手が誰になるかと考えたときに、ここまで本田選手を取材してきた映像で、「アスリートの魂」を制作した。

○ 11月26日(日)のルソンの壺~11月号~「冬の味覚に"秘策"あり~中小企業のブルーオーシャン戦略~」は、レッドオーシャンといわれる既存市場でのしれつな価格競争で倒産の危機に瀕して大きく方針転換し、新たな市場いわゆる"ブルーオ

ーシャン"を創出して成功した食品企業3社が紹介されていて、中小企業の生き残り策として、非常に興味深く見た。まだ誰も手をつけてない市場を切り開いて業績を伸ばしているが、市場が拡大すると、競合企業が参入すると思う。すき間産業だけにとどまるのか、そこから脱皮して、ビジネス拡大を目指すのか、今後、難しい選択を迫られるのではないかと思った。

○ 11月20日(月)のプロフェッショナル 仕事の流儀「過労死と闘い、命を守る 〜弁護士・川人博〜」は、亡くなった人の代わりに過労死と闘う労働弁護士・川人さ んの姿勢に感動した。一方で、過労死の労災認定の難しさを知った。先日も部下の残 業を減らすため、代わりに残業した管理職が過労死するケースがあった。政府は働き 方改革で副業や兼業を進めているが、労働時間の管理や過労死などの問題などは進ん でいない。重要な今後の社会問題として働き方改革と過労死の問題をぜひ番組で取り 上げてほしい。

## (NHK側)

9月22日(金)の「かんさい熱視線」で「先生たちの働き方改革」を放送した。今後も働き方改革を取り上げていきたい。

NHK 大阪放送局 番組審議会事務局

#### 平成29年11月NHK近畿地方放送番組審議会

11月のNHK近畿地方放送番組審議会は、15日(水)、NHK大阪放送局において、 10人の委員が出席して開かれた。会議では、事前に視聴してもらった、かんさい元気 印「食の底力スペシャル」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、12月の番組編成の説明が行われ、 会議を終了した。

## (出席委員)

委員長	西田 賢治	(大阪商工会議所 参与)
副委員長	山 﨑 弦 一	(日本労働組合総連合会大阪府連合会 会長)
委 員	浅 野 秀 剛	(あべのハルカス美術館 館長)
	市 田 恭子	(デザイナー集団 Team coccori 事業代表)
	小 林 祐 梨 子	(スポーツコメンテーター)
	鈴 木 元 子	(月刊大和路ならら 編集長)
	田 辺 眞人	(園田学園女子大学 名誉教授)
	原さだ	(財団法人龍神村開発公社 専務理事)
	安 井 良 則	(大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼
		感染管理室室長)
	山 舗 恵子	(京都リビング新聞社 編集部長)

## (主な発言)

<かんさい元気印「食の底力スペシャル」

(総合 10月20日(金)後7:30~8:43放送 近畿ブロック)について>

○ 「食の底力スペシャル」というタイトルにまず興味を引かれた。関西各地域の誇る食材や料理を紹介すると思っていたが、滋賀県の近江牛を除くと新しい発想に基づいた農業や食材の開発にスポットがあたっていた。特に和歌山の新しい農業のビジネスについては、農業のプロではなく子育て中の地域の人たちがパートで勤務しながら農業を学べるというシステムに大変驚いた。ぜひこの試みが成功し広がっていってほしい。京野菜の伝統を守ることが困難となっている中で高等学校の生徒たちに守られているという事実にも驚いた。以前、大阪の日本橋に勤務していたが、その近くに"ウラなんば"というスポットができているということを番組で初めて知った。また、サ

ンセバスチャンのバスク料理が有名であることは知っていたが、この地域が関西地方と似ているのか、あるいは食の分野で目指していくべき地域であるのかなど、紹介された理由がよくわからなかった。近江牛の料理で生肉の料理が紹介されていたが、かって堺市で腸管出血性大腸菌感染症の集団発生事例が起こったことを思うと、あまり見たくはない場面だった。

- 近畿の各放送局から記者やアナウンサーが出演していて、なじみやすくてよかったと思う。地元のパートを応援したり、隣の県と比較して見たりと興味の湧く作り方となっていて、時間の長さも感じられない、楽しい番組だった。京都では伝統野菜に取り組む高校生は有名だが、新しい動きも紹介していてよかった。さまざまな取り組みが取り上げられた中で、"ウラなんば"の食を通した触れ合いが印象に残った。客が町おこしをして街を発展させていくという動きが新しい広がりだと感じた。"ウラなんば"は本当に楽しくてにぎやかで、店が狭い分、自然と客どうしの会話が生まれて、街の元気さはこういうところから生まれてくると感じた。滋賀は近江牛、京都は祗園や伝統野菜と、まさにそのエリアで進化のわかりやすいトピックが紹介されていたが、もう少し新しさがあるとよかった。また、スタジオが中途半端な広さなのか、照明の加減なのか、スタジオが地味に感じたので、もう少し元気な雰囲気がでているとよかった。NHKはうるさくないから聞きやすいし見やすいという意見には納得するが、こういう番組では音や映像で元気な演出があってもよいと思う。
- 食べ物の番組は好きなので、おもしろかった。大阪の"ウラなんば"のリポートは、少し別の角度から取り上げられていたので新鮮だった。以前、近くを通ったときに飲食店が増えていることに驚いたが、その実態を知ることができておもしろかった。"ウラなんば文化祭"のように、客が企画することは珍しいことだと思うので、その点でもすごいと思った。最近は人間関係が希薄な店が普通だと思っていたが、"ウラなんば"のように濃い人間関係を求める面もあると実感して非常におもしろかった。また、全国にたくさんのブランド牛があるが、ブランド牛のほとんどは黒毛和牛で、育成地以外に差別化する要因はほとんどないと思うので、食べたときに近江牛にはどんな特徴があるのかを知りたいと思った。神戸のリポートでは「農家になりました」というナレーションがあったが、違和感のある表現だった。また、和歌山の紀の川市の農業法人については"素人の集団"を強調していたのに対し、京都の女子高生は膨大なマニュアルを積み上げながらよりよい野菜を作るために作り方をきちんと後輩たちに伝えており、この2つのリポートが非常に矛盾しているようで、違和感があった。また、なぜ京野菜を作る人が少なくなったのかということは非常に重要な問題だと思うので、あらためて番組で紹介してほしい。

- 1時間を超える番組だが、冒頭から勢いがあったので長さを全く感じなかった。司会とゲストのチームワークも非常によかった。地域ごとにテーマを設けていて、動画サイトのコンテンツを選んでいくような演出もよかった。番組の全体構成がよかった。まず、滋賀の肉で視聴者の胃袋をつかんで、神戸で農業を営む女性の意外な形での成功を紹介したあと、"意外なもの"つながりで柿の葉を食材にした奈良の平井宗助さんの話を取り上げる。当人をこのスタジオに登場させてワンクッション置き、全く違う大阪の"ウラなんば"の話で町全体を盛り上げようとする取り組みに関連させながら、今度はバスクの話へ。最終章はシステムを構築することで、未経験者やパートワーカーでも農業生産に従事できる可能性がある和歌山の事例を提示して"未来の農業の形"をイメージさせ、その上で未来の象徴として京都の女子高生を出す。そこで"種を残すことの大切さ"ということばを彼女たちから引き出していて、とてもよかった。滋賀とスペインのそれぞれのパートの担当者は少し元気がないのが残念だった。"食"と"農"と"経済"をうまく結びつけながら、成功事例を紹介しており、わかりやすく理解できる番組だった。
- 見ていて元気がもらえる番組だった。いろいろな問題提起があって、構成もしっかりしていたと思う。和歌山がいちばん地味な印象を受けたが、和歌山局の藤澤義貴アナウンサーが、和歌山の柿の出荷量は38年連続日本一ということや、傷みやすい柿を海外輸出できる技術も伝えていて、しっかりと勉強していると感じた。スペインのサンセバスチャンは食に携わる人なら必ず知っている場所だが、なぜスペインを取材するのかと感じた。20年近く地域おこしに携わっていて、ストーリーがないものは売れないことは常々実感している。昔と比べて、直接のやりとりが大切にされるようになり、大手のデパートのバイヤーが私の地元に訪ねてきて、少量多品種でも商品として扱ってもらえるようになった。最後の京都の女子高生には本当に頼もしさを感じた。私の地元では、在来種の保存に携わっているのは自分と同世代なので、とても羨ましいと感じた。こういう番組で、若い人にも食の大切さや地域の魅力を知ってもらって、農業などに携わりたいと思ってもらえるとうれしい。今後もこうした番組を放送してほしい。
- "マーケットを広げてから生産を増やす"、"都市近郊では、少量多品種の野菜で農業が成り立つ"、"コミュニケーションの上に料理が乗っている"といったそれぞれフレーズはかなり興味深いと感じた。こうした個々のトピックは非常におもしろかったが、番組全体を通じて何を伝えたかったのかが分からなかった。関西圏全体で各府県それぞれを取り上げる前提だったからかと思うが、"ものづくり"なのか"ビジネス"

なのか"食品開発"なのか、共通点が見られなかった。「JK」「スペイン」「素人」などさまざまな7つのキーワードが提示されていたが、最後は共通のキーワードになるべきだと思う。しかも関西といいながら「スペイン」が出てきたのは唐突に感じた。「JK」については、番組によると伝統野菜作りに携わっている学生の半分以上が女子高生ということで、残りは男子がいるはずだが、なぜここで「JK」としたのかと感じた。個々のトピックをそれぞれ10分程度の番組にして、シリーズで放送したらおもしろいと思う。

- 近畿の2府4県でそれぞれのアナウンサーと記者がリポートするということだったが、最初の滋賀の近江牛がオーソドックスすぎると感じた。番組もスタートダッシュがとても大事だと思うが、その後は、バラエティー豊かな内容がそれぞれの県で出てくるので、ほかでもありそうな番組だと思われてしまうのではないかともったいないと感じた。滋賀、兵庫とスペインはアナウンサーではなく記者だったので、緊張感が見ている側にも伝わってきた。スタジオで聞かれたことに対してもVTRで紹介したことをそのまま話していた。柿の葉を使った新商品開発に取り組む平井さんのスタジオでの話は、分かりやすくスムーズに聞けた。スペインを取材した記者の食べた後のコメントは料理の感想だけで終わっていたので、せっかくスペインまで行ったのにもっとおもしろいことをいってもらいたかった。料理長の髙橋拓児さんが出演していたが、老舗料亭の料理長といえば、硬くて"頑固おやじ"のイメージがあるが、髙橋さんは「かんさい元気印」にすごくピッタリでファンになった。全体としてはバラエティー豊かな内容で、おもしろかったと思う。
- とても力強いタイトルで楽しみながら見た。冒頭の近江牛の生産者は知り合いだったので、応援しながら見ていた。ただ、近江牛は滋賀で生産しているのに、その料理については、近江牛で有名な京都のかっぽうで紹介されていたことに悔しさを感じた。サンセバスチャンは行ってみたい場所なので出てきたときはうれしかったが、VTRは短くてあまりおもしろみがなかった。例えば、日本では最近フュージョン料理がはやっているが、そのフュージョン料理はサンセバスチャンのラボから始まったことが紹介されていたらよかったと思う。最後に桂高校の女子高生が「伝統野菜を守ることは、地域資源や観光資源を守ることにもつながる」というような発言をしていて、意識の高さを感じた。食では伝統野菜の作り手が少なくなっていると聞くが、伝統工芸の担い手も少なくなっている。おもしろいデザイナーとコラボをしていたり、近畿には若い作家や、職人を目指す人が移住してきたりしているので、こうしたノリのよい番組で近畿の伝統工芸も取り上げたらおもしろいと思う。

- 食の分野が関西の成長産業のひとつであることや、関西を元気にするポテンシャルを秘めているということで、2府4県のそれぞれの事例が紹介されていて、とてもおもしろい番組だった。特に若い人たちがさまざまな挑戦をしている姿を見ると、元気が出てよいと思った。"ウラなんば"も確かに活気のある街で、ほかに天神橋にも規模は小さくなるが、同様にいろいろな成功事例があるので、ぜひ積極的に紹介をしてほしいと思う。2府4県のアナウンサーや記者がリポートをしていたが、アナウンサーのしゃべりが上手だと改めて認識した。
- 最初にいきなりステーキの焼く音が聞こえてきて、次々とおいしそうな食材も出てきたので、思わず番組に見入ってしまった。最も印象に残ったのは、柿を使った意外な新ビジネスだ。すしを包む柿の葉が新たに食材になるというひらめきもすごいが、柿の葉を食材までもっていったチャレンジ精神がすごいと思った。一方、大阪には、"粉もん"以外に全国的に知られている食がないので、どんな魅力的な食材が紹介されるのかと思ったら、"ウラなんば"の人間関係だったので少し期待外れだった。サンセバスチャンのVTRは非常にコンパクトでよかったが、大阪の観光客をさらに伸ばしていくためには、このように、官民をあげて美食での町おこしに取り組む必要があると強く感じた。桂高校の農業科の高校生の京野菜を守る取り組みはおもしろいが、ビジネスとして成立させるには若い人たちが農業で生活できる仕組み作りをする必要がある。この番組はおもしろかったが、関西を元気にするだけの経済効果がどれぐらいあるのかと感じた。ただ、NHK各局の若手の記者たちが競いあって地域のすばらしいものを紹介する企画はおもしろいと思うので、他のテーマでも取り組んでほしい。
- バラエティーに富んだ分野からの出演者が、それぞれの立場で各地域の取材を見ているのがおもしろい。食とひと言でいっても、生産物、生産者、流通、飲食店や調理技術など、食をとりまく要素は多岐にわたるので番組にまとめるのは大変だったのではないか。一方、全体的に農業寄りの内容だったが、海産物に関しては取材しなかったのか。また、どの地域の取材も最終的には外食産業にたどり着いているのが気になった。また、この番組の趣旨からは少し遠ざかるかもしれないが、「食」を取り上げる番組では、日本がワーストである食品廃棄率など周辺の要素もこれからは積極的に扱ってほしい。京都での「食」を取材すれば、和食やおばんざいなどのステレオタイプな内容に陥る危険性が十分あるにもかかわらず、新鮮な切り口だった。しかもキーマンは高校生で、高校の取り組みでここまでやっていることをほとんどの人は知らないと思う。授業以外でも野菜のことが気になり、自主的に世話をしているという高校生のコメントがほほえましい。伝統野菜が廃れた理由を示してくれるとよかったと思

## (NHK側)

報道部中心で番組制作にあたった。近畿地方の各放送局に提案 募集をして、出てきた企画からバランスを考えながら最終的に番 組に仕上げた。この番組では使わなかった企画も、それぞれの局で ニュースの企画として放送したということで、地域の若手職員に とって勉強になったと思う。

#### (NHK側)

スペインのサンセバスチャンは"世界イチの美食の街"と呼ばれ ることも多く、関西にとって参考になる先進事例として取材した。 ただ、関西の特集番組で、スペインの町が出てくる必然性をもう少 し持たせられればよかったと感じた。テーマが絞り切れていない という点はご指摘のとおりで、今後は提案募集のあり方を検討し たい。神戸のリポートの「農家になりました」という表現について は、"農業を営む人イコール農家"ということでこの表現になった かと思う。個々の取材者のプレゼンテーションについてのご指摘 だが、今回は、関西2府4県のそれぞれの地域が、いかに今、頑張 っているのか、元気のポテンシャルがあるかというところを伝え たかったので、それぞれの府や県の取材者のことばで語ってもら うということを大切にした。また、視聴者に"地元の局の記者だ。" と応援しながら見てもらいたいということで、出演させた。本日い ただいたご意見も十分に参考にさせていただきながら、今後も"関 西が元気になる"という大テーマで、NHKもできる限り応援した いと思う。

#### <放送番組一般について>

○ 11月5日(日)の日曜美術館「よみがえる天平の美〜第69回 正倉院展〜」を 見て、正倉院展が69回も開催されていることを知った。1,300年前の天平文化から 伝わる膨大な宝物の中から毎年少しずつ展示する企画展で、関連する貴重な情報が紹 介されていたと思う。意外だったのは、シルクロードの終着点と言われている正倉院 に収納されているものは、唐やその西方諸国由来の物品だけではなく、日本国内で製 作されたものも少なくないということだ。しかも染色や螺鈿などの国内の技術レベル は、その当時でも大変高かったということに驚いた。正倉院は、当時の東大寺の倉で、 仏教を厚く信仰して大仏を建立した聖武天皇ゆかりの品々が大量に収納されている ことはよく知られている。この時代の仏教は最新の文化や科学技術が反映されている と思うが、この非常に華やかな時代の宝物が、その後 1,300 年もの間厳重に管理され て守られてきたことに感動し、後世に伝えていかなければいけないと思った。

- これから正倉院展に行こうと思う人にはとてもよい情報を得られる番組で、すでに行った人には改めて知ることがある番組だ。また、遠方でなかなか行けない人にとっては、テレビを通していろいろな美術品が見られる番組だ。緑瑠璃十二曲長杯の美しさに感動したが、実物も本当に美しいのだろうと思った。槃龍背八角鏡は、現地では細かいところまでゆっくり見られないと思うが、画面を通してアップで見ることができて、立体感も出ていてよかった。箜篌(くご)を実際に復元して弾くという演出は、当時の文化に触れた気分になれてとてもよかった。羊木臈纈屛風の染色の復元をした染色家の吉岡幸雄さんが復元の難しさを語っていて、当時の技術の高さを裏付けていると感じた。美術の素人が見ても分かりやすく、当時の文化も分かるよう工夫されている番組だった。ただ、それぞれの美術品の名前が長くて分かりにくいので、画面で見て理解しやすくなる工夫があればさらによかったと思う。
- 正倉院の宝物に限らず、工芸品の名前は長くてわかりにくいと常々思っている。ただ、この番組では、ストレートに名前の意味を説明せずに、どういうものであるかを柔らかくわかりやすく説明していてよかった。正倉院展の名品を一点一点説明すると山や谷のない番組になってしまうが、箜篌の復元、吉岡さんのろうけつ染めの復元、天理大学の雅楽部の伎楽(ぎがく)を挟むなど、飽きないよう工夫されていてよかった。箜篌の復元に携わっていた木戸文右衛門さんが、正倉院の職員の協力で倉庫から箜篌の部品をみつけて復元することができたことはよかったと思う。ろうけつ染めの復元の場面で、6曲のびょうぶが一瞬映っていたが、復元したびょうぶと何か関係があるのかと気になった。
- 今回出展された宝物から取捨選択をして、メリハリある形でまとめられていたと思う。正倉院展の作品の名称が変えられない点なども含めて、いろいろと番組制作には苦労があったと思う。それぞれの作品の復元の過程は、もう少し詳しく知りたかった。ただ、羊木臈纈屏風について、「天平勝寶三年」と書かれているから日本製というように説明されていたのは、説明不足ではないかと気になった。また、スタジオゲストの女性が「納期やコストを考えていたらできない世界ですね。」という発言をしていた。当時は効率も重視していたという専門家の話を聞いたこともあり、気になった。

- 美しい映像で、当時の技術水準の高さが深く伝えられていた。箜篌を復元するまでの木戸さんの熱意が伝わってきて、正倉院の職員が箜篌の部品をみつけたことも含めて、興味深く、非常におもしろかった。正倉院まで足を運べない方々にとっては家にいながら宝物をみることができて、工芸品の保存管理のすばらしさも伝えられていて、美術に詳しくない人にもわかりやすく、よい番組だったと思う。次回は正倉院展に行きたいと思わせる番組だった。
- 緑瑠璃十二曲長杯や伎楽のパートでは天平文化の国際的な性格を、箜篌や羊木臈纈 屛風のパートでは再現や復元に努力を重ねて成果が出たということを、日本製の金銀 の箱と螺鈿については当時の日本製の物もすごく高い技術を持っていたということ を、まとめていたと思う。個々のコーナーはとてもおもしろくて知らないことも教え てもらったと思うが、今回の番組の大きなテーマは何なのかと感じた。また、聖武天 皇像が二度ほど出てきたが、1,300年前のものにしては最近の絵のように思えたので、 どこに所蔵されているものを使用したのかと気になった。また、緑瑠璃十二曲長杯の パートでペルシャの遺跡のような風景が出てきたが、ペルセポリスの写真だろうかと 感じた。もしそうであると、時代的には同じペルシャでもササン朝でなくアケネメス 朝の都なので、違和感があった。
- 1,300 年もの歴史で長い間謎とされてきたことが解き明かされていて、スタジオの 奈良国立博物館の松本博之館長のこまやかな説明が素人の私には本当に分かりやすく、美術館の中を巡りながら一対一で説明してもらっているように感じられて、とて も楽しい番組だった。たくさんのものが紹介された中でも、箜篌とびょうぶの場面が おもしろかった。特に箜篌については、楽器の一部の支柱がみつかるという奇跡に驚き、音色が思いのほかきれいだったことにも感動した。びょうぶに関しても、イネ科 の刈安から鮮やかな黄色が出るのかと驚いたが、染色家の吉岡さんの「当時が染め物 の頂点だった」ということばにも驚いた。単純にたくさんの作品を紹介するのではなく、その背景や人間模様も描かれていて、とても勉強になる番組だった。
- 「日曜美術館」は長寿番組だが、日曜の朝にぼんやり見ているとものすごくきれいな作品にはっとさせられたり、見たことがある作品だと思いながら見たりするような、美術の素人にはありがたい番組だ。正倉院展には行けたり行けなかったりだが、説明があってこそ分かりやすいと思う部分がたくさんあった。昔の宝物自体もすてきだが、現代にもそれを復元しようとする吉岡さんや木戸さんがいて、昔もこうした方々がたくさんいたのではないかと気付かされた。吉岡さんが刈安で美しい色に染めていたが、

文献などを調べたうえでのことと知り、感動した。

- NHKらしい番組でよかった。正倉院展に行く機会のない人や行列に並ぶことが苦手な人にとって、きれいな映像で作品の詳細まで見られる貴重な番組だと思う。吉岡さんの染色の技術の高さをあらためて感じた。復元したびょうぶの実物を見てみたいと感じた。
- 「日曜美術館」は見どころのわかりやすい説明に加え、ゲストから興味深いエピソードを聞くことができる、NHKならではの美術鑑賞番組だ。特に、今回はびょうぶや箜篌の復元の様子を紹介していたので、正倉院宝物のすばらしさをよりよく理解できたと思う。びょうぶの復元に挑戦した吉岡さんへの取材を通じて、天平文化の染色技術の高さに驚くとともに、1,300年も前の職人が大陸の技術を習得していったことに感心した。また、木戸さんの話からは、箜篌の部品が見つかったことで復元できたときのうれしさが本当に伝わってきた。また、作曲家の佐々木冬彦さんによる箜篌の演奏で"天平の音色"も聞くことができてよかった。美術館や博物館に行っても作品の細かいところは見られないが、この番組では、クローズアップして非常に鮮やかな映像で見られる。正倉院展は69回目だが、今回も10点が初めて展示されたということで、奈良にはこの長寿番組でも紹介されていない文化財がまだあると思う。奈良放送局ではぜひともそういったものを探り出して放送していただきたい。
- 主な宝物の紹介はもちろん、箜篌の復元、びょうぶの染色の復元、現代によみがえる伎楽などの試みはおもしろかった。これまで多くの宝物について、何に使うものか、どのように作られたものか、どこから来たものかなどを特定するため、常に地道な研究がなされてきたことがうかがえる内容だった。そして箜篌の支柱が見つかったことに対する、松本館長の「歴代の方が、何に使ったかわからない、どんな小さな残欠も捨てずに保存をしてきたからこその奇跡である」というコメントはとても深い。また、支柱が見つかった日に、木戸さんがうれしくて歌を歌いながら帰ったというエピソードにも感動した。ただ、伎楽が現代の芸能にどのように影響し、つながっているかを紹介してほしかった。日曜美術館の番組構成は非常に完成されていて安心して視聴でき、しかも楽しめる番組だ。NHKらしさが最も感じられる番組の1つだと思う。今回もあっという間に感じられたが、コメンテーターのコメントが少なく、どちらか1人でよかったのかもしれない。松本館長のコメントをもっと引き出してほしかったと思う。

(NHK側)

美術番組は、制作者側が取捨選択してストーリー性を出す場合もあれば、展覧会の趣旨に沿う場合もある。今回は、学芸員と相談しながら、展覧会のハイライトシーンを一定程度紹介していくという構造をとっているので、それぞれの作品にそれぞれのテーマが存在し、それを大きなテーマでまとめるのは、通常の番組に比べて少し難しいという事情はある。

### (NHK側)

ディレクターによると、今回58点の展示の中から、箜篌、びょうぶ、伎楽を大きな三つの柱に立て、当時の時代背景と雰囲気がより伝わるように、再現と実演を入れて補った。一番苦労したのは箜篌の復元の部分で、今回はドラマ仕立てにして制作した。箜篌の支柱が見つかった場面を再現するにあたっては、正倉院事務所の元職員などからもよく話を伺い、当時の様子を伝わりやすく工夫したということだ。また吉岡さんのびょうぶ絵の復元については、ご自身の時間を割いていただいて、番組にご協力いただいた。ご指摘のペルシャ遺跡の写真のことや、ほかのびょうぶ絵のこと、聖武天皇の肖像画については確認しておきたい。

- 10月26日(木)の「ニュース630 京いちにち」の「"京都の和婚"人気の秘密」 という企画では、海外からカップルが2人きりで来て、寺社を貸し切り、和装で挙式 をするという新しい動きが紹介されていた。現在の京都の和婚の状況を詳しく知るこ とができてよかったが、企画のタイトルが"人気の秘密"であるならば、海外の人が なぜこうした式をあげたいのかという部分をもう少し掘り下げてほしかった。
- 10月29日(日)のルソンの壺~10月号~「もう会社には頼らない~熟年起業で"大逆転"~」は、起業して成功するのはほんの一握りだと言われる中で、「長年勤めた会社を退職して起業し、苦労の末に成功したシニア起業家3人の成功は"揺るぎない信念と柔軟性"にある」と真山仁さんがコメントしていた。私はこれに加え、15年間の間に退職金を使い果たして、借金までしているにもかかわらず、不平不満を言わずに、夫を支え続けてきた妻の支えが欠かせないのではないかと思った。この番組を見て大企業のシステムエンジニアであった先輩が、独立すべきか迷っていたときに、妻の一言に背中をおされて、起業して大成功を収めた話を思い出した。起業家を支えた妻たちを取材してみてもおもしろいのではないかと思う。

- 11月3日(金)のにっぽん紀行「いごっそう鍛冶屋とひよっこ弟子~高知 四万十 町~」(総合 後 7:30~8:00)は、ベテランの鍛冶屋職人さんのもとに、脱サラしてやってきた若者の厳しい修行の日々を追った番組で、大変興味深い番組だった。全国各地に地域おこし協力隊があるが、3年の任期の後、地域に残ってくれる人が少ない。受け入れ側の人間模様もよく出ていて、大自然、田舎暮らし、人情、生きる厳しさなどが、本当ににじみ出ていて、とてもよい番組だった。移住希望者の方や、受け入れ側の方々にぜひ見てもらいたい番組だと思う。
- 今年度は奈良放送局が開局して80年にあたることから、「開局80年 奈良アーカイブス」として、奈良の歴史や文化、昔の生活などをいろいろ感じられる貴重な映像がたくさん放送されている。長いものやモノクロの短いものもあり、見ていて楽しい。11月4日(土)の開局80年 奈良アーカイブス「NHK特集 幻の『天平』再現〜東大寺大仏殿落慶法要〜」(総合 後3:05〜3:59 奈良県域)は、番組の内容だけでなく、映像表現の歴史という意味でも非常におもしろかった。1960 年代から1970 年代を思わせる、少し荒削りだが力強い映像表現で、音の入れ方やスローモーションの使い方などが時代がかっていると感じた。当時は普通に見ていたはずだが、人間の感性が40年前とこれほど違うものかと感じた。映像制作文化の変遷を知るうえでも、アーカイブス事業の可能性を強く感じた。今後の事業の継続と展開に期待したい。
- 11月14日(火)のクローズアップ現代+「"全員、正社員にします"脱・非正規のチャンス!?」は時宜を得た番組だった。番組の最後では、来年4月から労働契約法が改正される、いわゆる無期転換ルールの導入も紹介されていた。現時点では、認知度が非常に低いので、引き続きNHKでも取り上げてほしい。好景気や人手不足という背景もあるが、こういう法改正も正社員化の動きにつながっている側面もあることを指摘しておきたい。一方で、法の網をかいくぐって、不正行為をしようとする企業も紹介されていた。武田真一キャスターが「この動きが好景気や人手不足による一時的な動きで終わるのか、それともこれを機会に、働く人を大切にして働き方の選択肢も広がることになるのか、今後も目を凝らしていきたい」というコメントで締めくくっていたが、NHKには、今後の動向を注視してほしい。
- 連続テレビ小説「わろてんか」を毎日見ている。10月27日(金)の回の母親役 の鈴木保奈美さん、鈴木京香さんの2人が京ことばと大阪のことばでやり合う場面は、 最初は本当に怖いぐらいの迫力だったが、最後は母親どうし目と目で悟って打ち解け た様子になって、すばらしい演技だと感じた。11月11日(土)の回では、遠藤憲

一さんが演じる父親の娘への思いが、表情からにじみ出ていて、見ていて涙が出てきそうになった。「わろてんか」にはすばらしい役者がそろっていると感じた。また、ホームページもいつも見ていて、かわいいデザインで楽しい。SNSもたくさんの写真が掲載されていて、番組を見るきっかけになっているので、今どきのツールとして重要だと思う。番組のあとの「あさイチ」の有働由美子アナウンサーと井ノ原快彦さんの"朝ドラ受け"も含めて楽しんでいる。

NHK 大阪放送局 番組審議会事務局

## 平成29年10月NHK近畿地方放送番組審議会

10月のNHK近畿地方放送番組審議会は、18日(水)、NHK大阪放送局において、 11人の委員が出席して開かれた。会議では、事前に視聴してもらった、連続テレビ小 説「わろてんか」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、11月の番組編成の説明が行われ、 会議を終了した。

# (出席委員)

委員長	西田 賢治	(大阪商工会議所 参与)
副委員長	山 﨑   弦 一	(日本労働組合総連合会大阪府連合会 会長)
委 員	浅 野 秀 剛	(あべのハルカス美術館 館長)
	市田恭子	(デザイナー集団 Team coccori 事業代表)
	片山九郎右衛門	(公益社団法人京都観世会 会長)
	小 林 祐 梨 子	(スポーツコメンテーター)
	鈴 木 元 子	(月刊大和路ならら 編集長)
	田 辺 眞人	(園田学園女子大学 名誉教授)
	原さだ	(財団法人龍神村開発公社 専務理事)
	安 井 良 則	(大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼
		感染管理室室長)
	山 舗 恵子	(京都リビング新聞社 編集部長)

## (主な発言)

<連続テレビ小説「わろてんか」 $(1) \sim (6)$ 

(総合  $10月2日(月) \sim 10月8日(土) 前8:00~8:15 放送) について>$ 

○ これからの半年間、ドラマを楽しみたいと思う。かなり厳しい状況でも笑いで乗り切っていこうという大阪の神髄を描くドラマだと想像している。大阪などの関西地方を舞台にしていると、登場人物がしっかりとした関西弁を話しているかがいつも気になる。役者が変な関西弁を話しているといらだちを覚えて、ドラマの内容が入ってこなくなる。竹下景子さんを除くと、主な登場人物は東日本出身の方々ばかりなので、薄味の関西弁といった印象だった。強いて言えば、てんの父・藤岡儀兵衛役の遠藤憲一さんのことばは関西弁でもない標準語でもないような少し不思議なことばという

印象だった。大阪放送局制作の連続テレビ小説について調べたところ、関西出身のヒ ロインは平成23年度の「カーネーション」の尾野真千子さんが最後だった。一方で、 東京で制作されたものについては、平成24年度以降の6年間ではのんさん、高畑充 希さん、有村架純さんと半数が関西出身者で、ここ数年東京で制作されたものでは関 西出身のヒロインが、そして大阪で制作されたものでは関東出身のヒロインが選ばれ る傾向にあった。いずれまた大阪放送局制作の連続テレビ小説で、ヒロインのネイテ ィブな関西弁を聞いてみたいと思う。ヒロイン・てんの幼少期を演じる新井美羽さん は大変かわいらしくて、すばらしい演技をしていたので、1週間で終わりなのは少し さみしく感じた。てんの兄役の千葉雄大さんは美青年で優しくて色が白くて、役にぴ ったりだった。ただ、気管支ぜんそくを持病にもち、最終的には生命を落としてしま うほどの重症患者ということだが、そのようには見えなかった。気管支ぜんそくの発 作が出ると、呼吸とともにヒューヒューという音が聞こえるし、ゆっくりと話をする ことなどとてもできない。あまり史実に基づいていない部分だと思うので、明治時代 に若い人たちの生命をもっとも奪った疾患で、千葉さんの色の白さからもむしろ肺結 核を患っているという設定のほうがよかったと思う。症状も基本的にせきをするだけ なので再現するのも容易だったと思う。

- 期待以上におもしろかったので、つい引き込まれた。繰り返し出てきた "笑いに色がある"というせりふには、とても共感できた。ただ、 "笑いの色は茶色"という答えが簡単に出てきすぎたように思えたが、答えが出るまでのやりとりがとてもおもしろかった。アニメを使った表現や、母親がその答えをずっと考えている心温まる場面で、民放のアニメのトンチの時間に流れるような効果音がほほえましくも違和感があった。また、わかっているけどやめられないというような芸人の本質的な部分を端的に捉えられていてよかった。実在の女性興行主をモチーフにしたドラマということで構えて見始めたが、素直に楽しめた。儀兵衛のキャラクターは強烈だが、いちずさが自宅の酒を捨てる場面によく表れていてとてもよかった。全体的な印象としては昔のお芝居を見ているようで、ドラマの序盤からてんの兄が死ぬ予感を濃厚に漂わせていた。また、夕方の場面で効果音として物売りの声が聞こえたが、このドラマは諸芸を扱うドラマなので、もっとこうしたBGMがあってもいいかと思う。子どもの頃は豆腐屋やさおだけ屋の歌など、いろいろな声が響いていたので懐かしく感じた反面、身近に聞く機会が少なくなっているので、これからは知らない人が増えてくると感じた。実際に声を出せる人がいる間に、アーカイブスとして残しておいてほしい。
- 毎朝楽しく見ている。特に、子役の新井さんと鈴木福さんの2人がおもしろくて魅力的だった。その他の配役では、竹下景子さんが演じる主人公の祖母も味があって、

よかった。ただ、連続テレビ小説「あさが来た」の序盤と似た印象を受けた。「わろたらアカン」と言われているてんが、あさの幼少期と重なって見えた。また、儀兵衛がくしゃみをしたら町じゅうの人がこける場面や、ドイツ人の客の頭に2匹もちょうがとまる場面に見られる新喜劇のような笑いは、関西人にはなじみがあるが、それ以外の地域の人にはどう見えるかと感じた。このような演出は何度か出てくるが、そのあたりは意識しているのか。内容がしっかりしていれば必ずしも必要ではないと感じる。また、リリコが登場する場面で「のちに永遠のライバルにして、親友となるのですが」というナレーションもあったが、先の展開を少し語りすぎているように感じられた。昨年、このドラマ同様に吉本せいさんをモチーフにした芝居を見たので、その芝居との違いも含めて、これからの展開を楽しみにしている。

- おもしろいドラマだった。配役については、てんの兄役の千葉さんも適役で、心温まる存在だった。てんの幼少期の新井さんはよかったが、初めて見た瞬間に直虎の幼少期を演じた子役だと思った。大河ドラマ「おんな城主 直虎」と連続して出演しているので、直虎のイメージが強烈なだけに違和感があった。寄席の舞台で主人公が追いかけっこをする場面や、屋根の上でてんと北村藤吉が話をする場面はわざとらしく感じたし、ドイツ人の頭に2匹もちょうがとまってテーブルをひっくり返す場面はありえないと感じた。儀兵衛が酒を捨てる場面はよかった。
- 関西地方の出身ではないので、大阪局制作のドラマというと少し身構えてしまう。 関西とのことばの壁や文化の違い、新喜劇などは少し苦手で、リアルになればなるほ ど引き気味になってしまう。関西弁が薄めという発言もあったが、今回のドラマには すっと入れた。ドイツ人の頭にちょうがとまる場面は本当に笑った。間のうまさはメ ルヘンチックでよかったし、さすが関西だと感じた。平成にはない懐かしい笑い、大 阪らしさを少し匂わせていて、関東に限らず日本中の視聴者が楽しい朝を迎えられる ドラマではないかと思う。オープニングタイトルのイラストとアニメーションがかわ いらしく、色鮮やかで、いつも楽しみにしている。1週間分をまとめて見ているが、 毎回1つ絵柄を決めて、イラストがどう展開していくのかを見ている。第1話は白い 文鳥が飛んでいくところから始まったが、アニメーションでもけん引役になっていて、 2人の主人公の象徴的なものだと感じた。また、カメラワークも大胆なアングルがあ り、若々しくて弾んでいるように感じた。場面ごとにどういう絵を作りたいのか、ね らいが明確に伝わってきた。ただ、連続テレビ小説と大河ドラマに出演する俳優が重 なったり、連続して出演したりしていることが気になった。
- 「わろてんか」というタイトルがよい。全体的な印象としては、ベタな作りだと感

じた。てんと風太の幼少期を演じる2人はとてもいい味を出していた。2人は子役が演じていたのに対し、藤吉は大人が演じていて、8年たっても印象が変わらないことが気になった。やはり、てんと藤吉の年齢差を感じて、屋根の上の場面では、恋に落ちる感じに共感できなかった。兄の新一は気管支ぜんそくよりも結核のほうがしっくりくるようにも感じたが、"新一ロス"の人が多いことも納得がいく。新一の休む部屋の暗さなど、照明のリアルさがとても気に入っている。これからの半年間、期待をしている。

- 家族がドラマを録画していて、毎晩夕飯のときに楽しんで見ている。ただ、ドイツ人の頭にちょうがとまったのがおかしくてテーブルクロスをひっくり返すという場面についてはありえないと感じた。てんや風太などを子役が演じているのに対して、藤吉ひとりだけ大人の俳優が演じているのが気になる。大きくなった風太を演じる濱田岳さんの演技が上手だと感じた。関西弁は地域によって微妙に違うので、ドラマで関西弁が使われていると気になるが、今回は私の地元のことばではなく、大阪と京都のことばなので、気楽に楽しんでいる。ただ、神社の鳥居が何度か出てくるが、かかっている額に神社の名前が書かれていないことが気になったので、額はなくてもよいと感じた。兄・新一が死ぬのが早すぎると感じた。
- 関西になじみのある出演者がところどころ出ていて、とてもよかった。"義士"と "猪子"を間違える場面やてんの笑い方はオーバーに感じた。ちょうがドイツ人の頭にとまる場面も、現実ではなくて止まったと想像して大笑いするのであれば納得できるが、「んなあほな!」と突っ込みたくなるような場面がかなりあった。しかし、第 2 週以降も儀兵衛が首つりをしようとしていると誤解される場面が出てきて、こういうテイストだと思ったら、それ以降はすんなりと見られるようになった。てんと藤吉の出会いの場面で、てんは子どもなのに、藤吉は大人の松坂桃季さんが演じているので、見た目の年齢差がありすぎて、藤吉は何歳の設定なのかと気になった。総じて、いい味を出している俳優がそろっているので、楽しく見ることができた。
- 本当に楽しみにしている。友人たちからもとても楽しく見ていると聞いた。頭にちょうがとまる場面は本当に大笑いした。朝、ドラマを見ているときに、こちらもほほえんでしまうような番組だと思う。第2週以降、ほかの登場人物は大きくなっているのに、松坂さんが演じる藤吉が年をとっていないし、着物も一緒なので、どうしても気になってしまう。また、恋愛物として展開を楽しみに見ているので、ナレーションであまり説明しないでほしい。ナレーションでてんと藤吉の2人の行く末を説明しているので、伊能栞が登場してもてんとはくっつかないものとして冷静に見てしまう。

くすり祭りの場面は滋賀県の油日神社で撮影しているようで、地元の人たちもとても 喜んでいるようだ。

- 家族が熱心にこの番組を見ているので、番組の話題で会話が弾む。初々しいヒロインを、芸達者な子役から、人気の若手俳優、ベテラン俳優が脇を囲んでおり、笑いあり涙あり恋ありのスタートでとても力が入っていて、おもしろくないはずがないと思った。儀兵衛が家にある酒をすべて捨てて、てんを抱きしめながら「笑ってよし」という場面は、親子の情愛が感じられて非常によかった。新喜劇のような笑いの演出については、自分自身はよいと思ったが、全国的にこうした笑いが受けるのだろうかと感じた。最近は新喜劇を見なくなったが、小学校のころは、学校から帰ってテレビで見るのがとても楽しみだった。NHKとは非常に遠い存在と思っていたので、NHKのドラマでこうした笑いの演出が出てくるのを見ると、改めて時代は変わったと感じている。
- 吉本せいがヒロインのモチーフなので大いに期待していたが、期待通りのおもしろいドラマになっていると感じた。てんの実家は京都の薬種問屋だが、なぜ大阪の薬の町・道修町の設定にしなかったのか。残念に思う。確かに京都にも神農さんがあって二条に薬種問屋が集まっているが、大阪の道修町にもあるので、大阪を舞台にしたほうがいいのではないか。「わろてんか」の第1週のタイトルが「わろたらアカン」というのは、インパクトがあってよいと思う。毎回笑える場面があって明るい気分になり、知人からも毎朝見てから出かけると聞いた。てんの幼少時代を演じる新井さんの笑顔はとてもかわいらしいのに対し、儀兵衛を演じる遠藤さんはこわもてで仏頂面なのが好対照で、2人を見ているだけで笑ってしまいそうになる。また儀兵衛は非常に厳しい人物として描かれている一方で、非常に家族を愛していることが十分に推察できるような描き方だったと思う。鈴木保奈美さんは良家のおっとりした奥様のイメージにぴったりだった。風太を演じる鈴木福さんは愛きょうある演技でドラマをおもしろくしていると感じた。幼少期は、もう少し長く描いてもよかったと思う。

#### (NHK側)

神社の鳥居の件だが、一般的に、ロケ現場については、ドラマを 実際の場所で撮影しても、時代考証をつきつめると事実とのそご が出てくる可能性もあるので、微妙に名前を変えたり、名前をあえ て隠したりすることが多い。また、関西弁がしっかり話せる俳優を キャスティングしているかが気になるということだが、特に意識 はしていない。東京で制作された連続テレビ小説で関西出身者が

ヒロインを演じることが多く、大阪で制作されたもので関東出身 者が多いということもあったようだが、ヒロインのイメージに合 う人を探していた結果で、偶然だ。特に、関西の視聴者にとって方 言がかなり気になるということはよく聞くが、方言指導の先生に、 期間中、リハーサルから同席していただいて、加わってもらってい る。「あさが来た」に展開が似ているという指摘については、女性 の時代物で一代記なので、結果的にイメージするようなことがあ るかもしれない。ただ、これからの展開のしかたもテーマも違うの で、ドラマのオリジナリティーを楽しんでもらいたいと思う。新喜 劇のような笑いを意識しているのかというご指摘もあったが、近 づけようとしているというわけではない。大きなテーマとして、笑 いやほほえみでさまざまな困難を乗り越えていくといった、笑い の力を描いていきたいと思う。世界観としては、楽しくて笑えて、 笑うと元気になれるというドラマをかなり意識している。笑いの ツボも人それぞれ違うと思うので、いろいろと演出を試しながら 視聴者の反応も見て、どのように楽しんでもらえるか常に考えて いきたいと思う。てんの兄・新一の病気の描写については、専門の 先生にも加わっていただいて、バランスをとりながら表現してい る。

#### <放送番組一般について>

- 8月26日(土)の「紀の国スペシャル NENKIN QUEST 森の宝石といのちの輪」(総合後3:05~3:45和歌山県域)はシュールでおもしろい番組だった。番組の最初で子どもが「ねんきん?お父さんやお母さんが払っているやつ?」というやりとりもあったが、その場面で"年金"ではなく"粘菌"についての番組だとわかった。平成の初めを思わせるテレビゲーム機の世界に入るという演出で、背景が8ビットのサイケデリックな感じの絵でおもしろかった。イグノーベル賞を受賞した中垣俊之教授や、スーパー粘菌少年の場面がおもしろかった。ミミズのことを粘菌の"同居人"と表現するなど、ことばづかいに工夫が感じられた。今城和久アナウンサーがネンキングの声を担当していたが、思い切って演じていてとてもおもしろかった。
- 番組名で"NENKIN QUEST"という表記を見たときに、以前和歌山放送 局制作の番組でも防災を"BOSAI"と表現していたので、今回もローマ字表記な のかと感じた。また、"年金"の話だと思っていたので、森とどういう関係があるの

かと最初思った。ゲームの構成やクイズの内容はよいと感じたが、子ども向けとはいえこの内容とテレビゲーム機の世界に入るという演出は相性がよくないと感じた。粘菌の餌がなぜオートミールなのかということはとても気になった。粘菌のかわいらしさや神秘的なところ、頭脳があることなど興味深いところばかりで、いろいろな角度から紹介しており、実際に粘菌を生で見てみたいと思った。見ていて温かい気持ちにさせられる番組だった。

- もともと粘菌や南方熊楠に関心があって、南方熊楠記念館にも何回も訪ねたことがある。これまでの説明では粘菌自体についてよく分からなかったが、この番組でよく分かるようになった。変形体のときには単細胞なのに、1メートルぐらいの大きさになったり、1時間に1センチほど動いたりすることができる。状況が変わると子実体になって森の宝石と言われるような、さまざまな美しい造形美を作るということが、本当によく分かった。一方で、粘菌が最短で動く図が紹介されたが、見てもその意味が少し分かりにくかった。関西の人にとっては関東の主要な鉄道よりも大阪の環状線で説明してくれたほうが分かりやすかったと思う。部屋の中で子どもたちがやりとりをする場面では、背景のカーテンがずれたようになっていた。もう少し整えたほうがよかったと思う。
- 田辺市の三偉人のひとり、南方熊楠の生誕 150 年にあたることし、東京や和歌山県内でシンポジウムなどさまざまな催しが開かれている。ポスターなどを見た人から「南方熊楠とはどんな人か」「粘菌とはどんなものか」と問い合わせを受けることが多いが、これまでこうした質問にうまく答えられないでいた。番組を見て、粘菌の役割や、粘菌が森の保水や森を維持することに貢献していることもよく分かった。アオウツボホコリが本当に美しい粘菌で、それだけを探している人がいること、熊楠が神社の森を守ろうとして戦っていなかったら熊野の森は世界遺産には登録されてなかっただろうということも知った。田辺市の小学4年生の子どもたちは社会科見学で南方熊楠顕彰館を必ず訪れるが、この番組を子どもたちにも見せたいと思った。"NENKIN QUEST"という番組名が有名なテレビゲームを模倣しているように思ったが大丈夫だろうかと少し思った。出演者の金子貴俊さんとネンキングの声を担当している今城アナウンサーがいい味を出していた。
- 非常におもしろい番組だった。この番組はゲーム仕立ての演出だったが、さらに粘 菌の生態そのものを詳しく知りたいと思った。ライフサイクルや地球の中での役割、 あるいは知能の芽生えを見られるといったことにも驚いたが、ひいては、地球上のい のちの輪を誰がこんなにうまく形づくったんだろうというような深えんな世界も感

じられて、深い感動もあった。最初はゲームに吸われるところから始まり、粘菌について勉強したあとは、今度は粘菌を探しに行こうという場面で終わるが、ゲームを始めるのではなく、最後はゲームを捨てて外に出て行くというところがよかった。粘菌は本当に自分たちの身近にあって、生活にも直接自然がつながっているということを示唆するような、終わり方でとてもよかった。ミミズを粘菌の"同居人"と説明していたが、近い環境にいるだけでいつも一緒に暮らしているのでなければ、"ご近所さん"ぐらいでよかったのではないか。迷路の中に粘菌を敷き詰めて、そこから最短距離を探すというところが分かりにくかった。単細胞生物が並んで置かれてくっついたときは、それがどうなるのかと感じた。単細胞生物そのものについてもう少し説明がほしかったと思った。変形体から子実体になるところは映像でよくわかったが、逆に、胞子が飛んで、胞子からまた変形体ができるところの映像もほしかった。次回作があれば、そのあたりを期待したい。

- 番組名だけを見ると"年金"を思い浮かべてしまうが、ねらっているのか。これまで粘菌についての知識はほとんどなかったが、植物的な特徴を持つ子実体と動物的な特徴を持つ変形体という2つの形体をもつということをはじめてこの番組で知ることができた。さらには変形体が大きくなってもただ一つの細胞であるということに驚いた。ただ、迷路の研究については、なぜ、迷路状のシートの上だけしか粘菌が広がらないのか。また、粘菌を迷路の上にいっぱいに敷き詰めると表現していたが、一つの細胞の変形体ではなくて多数の異なった変形体を敷き詰めていったのか。なぜ餌のオートミールとオートミールの間の迷路上の最短距離で連携してつながっているように見えるのかが理由はよくわからなかった。自分でも調べてみたが、番組での説明とは少し違っていた。番組を通じて粘菌についての知識を得ることはできたものの、さらに興味を持って調べてみたいとまでは思わなかった。熊野の森が守られて現在に至っているのはよかったと思う。
- 番組が大変わかりやすくて、目からうろこが落ちた。ただ、粘菌の種類はもっとたくさんあると思っていたが 400 種類程度ということで少し意外に感じた。その成長の速度などいろいろなことを見て、驚きの連続だった。
- 非常にわかりやすくて楽しい番組だった。生物などの分野は苦手なほうなので、真 正面から展開された番組であれば、最後まで見られなかったと思う。子ども向けにゲ ーム仕立ての演出や途中でニュースが入ってくる演出など目先を変えながら、イグノ ーベル賞を受賞した大学教授などさまざまな要素を紹介していたので、番組を通じて、 粘菌について人に説明できるようになったと思う。最後に森の維持についても紹介さ

れていて、ためになる番組だと感じた。

○ 地図上で粘菌を東京の位置に置き、餌を関東の主要都市に配置すると、その道筋が 首都圏の主要鉄道とほぼ重なるという実例や、迷路の端と端に粘菌を置くと、粘菌は 最短距離を教えてくれるという実例を紹介していたが、迷路は自分でも解けると感じ たし、主要な駅を単純につないでもできるように思えた。粘菌の研究の意義は、人工 知能の開発につながるものなのかと疑問に感じた。粘菌の能力を誇張して紹介してい るようにも感じてしまった。また、番組で粘菌はいのちの輪の重要な一端を担ってい ると説明していたが、2時間かけてようやく粘菌を探し当てている状況だったので、 普通の生物や植物がいるところに大量にいないとその役割を果たせないのではない かと疑問に感じた。また、カビやバクテリアを食べて分解を遅らせるという具体的な イメージがわかない。変形体や子実体は分かったが、カビやバクテリアとはどこが違 うのかも分からなかった。

この番組の前に、関連番組の9月29日(金)のかんさい熱視線「愛(いと)しの粘菌ー身近にある生命の神秘ー」を見た。やはり、こちらでも粘菌研究で日本は世界をリードしているということが紹介されていて、粘菌のことをほとんど知らない状態でも最後まで興味を持って見た。

- タイトルに"NENKIN"と入っているので"年金"のイメージで大人は見そうではあるが、子どもの興味を引くために、もう少し工夫があってもよかったのではと感じた。粘菌を実社会に応用できれば、ノーベル賞をもらえるのではと思う。スーパー粘菌少年には感心した。将来は粘菌の研究者になりたいということで、大事に育てあげてほしいと感じた。
- 子どもの興味を引くために、苦心していると感じた。粘菌の知性を探る迷路実験や 粘菌が十菌十色の性格を持つことを調べる研究は面白く、大人も楽しめる内容だった。 今城アナウンサーの語りは大変よかったと思う。最後に南方熊楠生誕 150 周年とい うことで紹介された部分は、それまでの非常にカラフルな子ども向けの番組とは全く 別番組を見ているような印象を受けたので、できれば、熊楠の活動についてもアニメ で紹介すれば、子どもも違和感なく見られたのではないかと思う。

### (NHK側)

子どもや若者のテレビ離れが課題となる中、放送が夏休みだったので、子ども向けにこの番組を制作することにした。先日、親子 100人ほどを集めて、専門家の先生と一緒に、実際に粘菌を探すと いうイベントを行った。この様子も収録をしており、番組にする予定だ。ことしは南方熊楠生誕 150 周年なので、10月22日(日)に南方熊楠のシンポジウムも地元の田辺で行う予定だ。これも収録して、12月にEテレで放送する予定だ。ことしは和歌山放送局は、全局体制で南方熊楠に注力していく方針だ。

## (NHK側)

ことしは南方熊楠生誕 150 周年ということで、南方熊楠が研究 した粘菌に照準をあわせて、どのように広い世代の人に番組を見 てもらうかと考えて、県という枠を越えて取材を進めた。なぜオー トミールを食べるのか、なぜ餌を認知するのかなど、全然分からな いことばかりで、子どものころに感じたような「どうしてなんだろ う?」という気持ちで最後まで番組を持っていけるように心がけ た。背景の絵は和歌山で活躍されているアーティストに書いてい ただき、粘菌の研究に携わる方など、さまざまな人たちの協力を得 ながら番組を作ったので、番組について高い評価をいただけてよ かったと思う。最後はゲームを捨てて外に飛び出すというところ はとても大事にしている。今の子どもはゲームなどをよくしてい るが、テレビのその先の身近な自然に飛び出していくところまで つながるような番組にできたと思う。迷路の話については、迷路の 通路全体に粘菌を敷き詰め、餌となるオートミールを迷路の入り 口と出口両側に置く。通路に敷き詰められた粘菌は、なるべく早く、 効率的に食事を取ろうと餌と餌の間をつなぐ最短経路の通路に集 合する。その体の形がまるで迷路を解いたように見えるというも のだ。粘菌を使わなくても自分でも迷路は解けるのではないかと いう意見もあったが、すべての前置きに粘菌で単細胞と言われて いるのに迷路を解ける、単細胞なのにこんな力があるといった部 分を強調すればよかったと感じている。

- 最近のブラタモリは、9月9日(土)の「#82 高野山」、9月16日(土)の「#83 高野山と空海」、9月23日(土)の「#84 高野山の町」、10月7日(土)の「#86 黒部ダム」はいずれも大変おもしろかった。高野山、黒部ダムとも何度か行ったことがあるが、もう1度行ってみたくなるぐらいとてもよい番組だったと思う。
- 歴史秘話ヒストリアで、9月15日(金)の「世界が驚いた3つのグレートウエーブ

葛飾北斎・パワフル創作人」、9月22日(金)の「おんなは赤で輝く 北斎の娘・お栄と名画のミステリー」が印象に残った。北斎を取り上げた映画を見てから娘のお栄のことは記憶に残っていたが、葛飾応為という画号で描いていたことを知った。そのほか、画家のレンブラントとの比較なども含めて、ふだんの歴史秘話ヒストリアより新鮮に感じた。ヨーロッパの東洋美術を扱う博物館に行くと、中国美術の扱いが大きく、日本美術があまり扱ってもらえていないと聞く。例えば、NHKが大英博物館とタイアップしてイギリスで番組を放送してほしい。特に、来年は日仏友好 160 周年にあたり、長期間にわたってさまざまな文化交流が行われる。NHKも番組を通じて、日本文化をアピールしてほしい。

- 9月21日(土)の「ニュース630 京いちにち」で清水寺の公式インスタグラムの取り組みが紹介されていた。清水寺の若い僧の大西英玄さんによると、清水寺に多くの観光客が来ても舞台の写真を撮っただけで帰ってしまうということだ。清水寺は昔から地元の人たちと関わりの深い寺で、外部の人には見せていないような千日詣(まい)りなどさまざまな写真や動画をアップすることで、観光客にもふだんの営みを知ってもらおうとしている。観光客に京都の本質的な部分を体験してもらったり、見てもらったりすることは大切な課題だと思うので、とてもよいニュースだと感じた。何を伝えたいかという軸さえぶれなければ、SNSなど新しい手段を使うことは可能性を広げるという大西さんの話には自分も共感した。
- 9月30日(土)のNHKスペシャル シリーズ 人体 プロローグ「神秘の巨大ネットワーク」は長い番組だったが、楽しく見ることができた。このようなわかりやすく楽しく、いろいろな大切な知識が得られるような番組をこれからもNHKに制作してほしい。 タモリさんの人体モデルはおもしろかったので、番組で使うだけでなく、地方のイベントなどでも展示してもらいたい。子どもだけでなく、大人もわかりやすい番組で、日常的に子どもに質問される親にとってもよい番組だと思う。
- かんさい熱視線は毎回興味を持って見ているが、10月13日(金)の「定年後 輝くために」の回は疑問に思う点があった。定年前よりも定年後の時間のほうが長いということだが、定年前は1年の総労働時間×40年と計算しているのに対し、定年後は11時間×365日×25年という計算をしていて、定年前と定年後の計算方法が一見すると違うように思えて、違和感があった。
- 10月13日(金)の歴史秘話ヒストリア「聖徳太子の棺 伝説のその先へ」は意外 な内容だった。20年ほど前には、聖徳太子像は次の世代が作り上げた虚像だという

意見や、聖徳太子の実在そのものを疑うような意見もあった。この番組では、安福寺で発見された聖徳太子の棺の板や、法隆寺の釈迦三尊像の銘文を読み解き、聖徳太子を肯定的に捉えられた内容で驚いた。今回の番組で、聖徳太子の多才さや功績がいろいろと描かれていたが、当時の日本人としてこれほどのことができたのかという疑問にあらためて取り組んでほしい。

## (NHK側)

ジャポニズム関連などの番組を海外向けにもっと放送したほうがいいということについてはご指摘のとおりで、大英博物館と8 Kカメラで共同制作も行っている。北斎関連でいうと、「日本ーイギリス 北斎を探せ!」(総合 9月 18日(月)前 9:05~9:50)は9月に国際放送のワールドプレミアムでも放送した。フランスについてもジャポニスム関連で機会があるごとに国際放送で放送しているが、放送量をもっと増やしていかなければと思う。NHKスペシャル「シリーズ 人体」については、来年以降、特別展「人体一神秘への挑戦」を国立科学博物館などで展開をする予定になっているので、こちらもご注目いただきたい。

NHK 大阪放送局 番組審議会事務局

## 平成29年9月NHK近畿地方放送番組審議会

9月のNHK近畿地方放送番組審議会は、20日(水)、NHK大阪放送局において、 11人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、「平成29年度後半期の国内放送番組の編成」および「平成29年度後半期の近畿地方向け番組編成」についてそれぞれ説明があり、「平成30年度の番組改定」とあわせて意見交換を行った。会議では、事前に視聴してもらった、ココズレ2「ココがズレてる健常者2~障害者100人がモノ申す~」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、10月の番組編成の説明が行われ、 会議を終了した。

## (出席委員)

委員長	西田 賢治	(大阪商工会議所 参与)
副委員長	山 﨑   弦 一	(日本労働組合総連合会大阪府連合会 会長)
委 員	浅野 秀剛	(あべのハルカス美術館 館長)
	市田恭子	(デザイナー集団 Team coccori 事業代表)
	片山九郎右衛門	(公益社団法人京都観世会 会長)
	小 林 祐 梨 子	(スポーツコメンテーター)
	鈴 木 元 子	(月刊大和路ならら 編集長)
	田 辺 眞 人	(園田学園女子大学 名誉教授)
	原さだ	(財団法人龍神村開発公社 専務理事)
	安 井 良 則	(大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼
		感染管理室室長)
	山 舗 恵子	(京都リビング新聞社 編集部長)

## (主な発言)

<「平成29年度後半期の国内放送番組の編成」および

「平成30年度の番組改定」について>

○ 国内編成を後半期に編成するにあたり、外部の意見なども事前にいろいろ聞いているのか。

## (NHK側)

中央番組審議会や各地域の審議会から、NHKにどういうものが今必要なのか意見をいただいている。一方で、NHKが弱いと言われている若年層や30代から50代にどう見ていただけるのかということもあわせて議論しながら、平成29年度の後期の改定を考えている。来年度の改定についても、NHKを見てもらえていない層に対してどうすればいいのかも、今議論しているところである。

○ 視聴者意向を見ても、若者世代の反響は少ない。放送と通信の融合を具体的にどう 進めていくのかが今後の課題かと思う。

## (NHK側)

現在、平成30年度改定の検討を始めているが、この先テレビに20代や30代が戻ってきてくれるのだろうかという危機感も持っているので、インターネットをどう活用していくのかということも非常に重要な課題と考えている。20代から40代の人たちに接触してもらうために、NHKがどういう立場で、どこまで充実していくか、私どもも常々議論しているので、インターネットをこのように活用できるのではないかというご意見があれば伺いたい。

- SNSから番組情報を知ることが多い。
- NHKには、これまでの蓄積があると思うので、過去の番組だけでなく、放送されなかった映像もデータとして、見られるようにしてほしい。

また、放送と通信の融合という点では、3月22日(水)の放送記念日特集「今 テレビはどう見られているか」(総合 後 10:00~10:50)で、海外の事例でインターネットを活用した番組として、ドラマ「SKAM」が紹介されていたが、現実と非現実の境があいまいになるような作り方をしていた。コンテンツの質を視聴者に委ねる手法には、疑問に感じる。

<ココズレ2「ココがズレてる健常者2~障害者100人がモノ申す~」 (総合 8月18日(金)後10:00~10:49放送)について>

- 障害者と身近に接しており、前回の「ココがズレてる健常者~障害者100人がモ ノ申す~」(総合 平成 28 年 12 月 21 日(金) 後 10:30~11:15) を視聴番組として見 たときに、あまりよい印象を受けなかった。少し嫌悪感のある場面もあったので、ま たこの番組かと見るのにちゅうちょした。菊地亜美さんや千秋さんは、率直にコメン トするところが好きなので、楽しみながら見ることができた。「ココズレ2」は、前 回よりすごく風通しがよく、見やすくなったと感じる。筋ジストロフィーの方が美術 館で並んだときに「自分は呼吸器をしているから時間が持たないので、美術館に早く 通してもらえるのはうれしい」と話していたが、まさにこれは"配慮"だと思った。 玉木幸則さんが「対面で1つ1つ確認していかないとこれは正解というのはない」と 話していて、"配慮"ということばがすごくいいと思った。親子でものまねをして下 さいというときに、障害者の顔まねを子どもがしたのを見て、親は「子どもへの教育 が足りなかった」と話していたが、自分自身もそのような教育を受けてきたので、そ のまま紹介していたのはよかった。冒頭のVTRで、FUJIWARAの藤本敏史さ んが玉木さんのものまねをすると、スタジオが少しざわついていたように編集してい たが、番組の中では、藤本さんが玉木さんのまねをしたところは、素直にバラエティ ーとして楽しめた。一番笑ったのは、視覚障害のある方が声で"はげ"がわかるとい うところだった。自分自身も視覚障害の友人に「最近太った?」と指摘されることが あるので、自分の経験と照らし合わせてもおもしろかった。前回に比べると、今回は 本当に見やすくなったと思う。
- 前回の番組で、障害者 1 人の発言がすべての障害者に当てはまらないことをふまえていたので、見やすいと感じた。また、出演者が変わるとここまで違う番組になるのかと感じた。特に、土田晃之さんや藤本さんのおかげで、和やかな雰囲気になったと思う。かなり斬新な番組ではあるが、障害者をより身近に感じられた。そういう意味で 2020 年の東京パラリンピックの開催を控える今、硬すぎず深く突っ込むような、そしてリアルで、収録の空気感が伝わってくるような番組を見られてよかった。ハライチの岩井勇気さんの質問にかなり非難が出ており、私は質問の内容自体はそれほど気にならなかったが、かなり表情に冷たさを感じた。ものまねは2種類あって、愛のあるものまねであればいいということについては、愛のあるものまねをする機会はなかなかないので、本当に難しいところに踏み込んでいると感じた。休憩時間にたばこを吸われていたり、視覚障害者に一目ぼれがあったり、全く知らないところがたくさんあった。海外ではどうなっているのか、昔とはどう違うのかなど、さらに興味がわいた。この番組を見た後に、障害者の方と接する機会があったが、たぶん見ていなかったら接し方も違っていたと思う。番組を見てからは、障害者の方を身近に感じることができて、より理解したいという気持ちになれたので、こういう番組を硬すぎずに

フランクな感じで放送することは、これからも必要かと思う。

- ユーモアを交えていたので、あっという間に時間が過ぎていった。障害がある人でも、それが不便なだけで不幸ではないと言う人もいる一方で、健常者になれるならなれたらよかったと言う人もいて、いろいろ考えが違っており、型にはめては見られないということを痛感した。行列ができていた場合に障害者を優先するかという問題では、背後にある事情によっていろいろ違うから「これが正解というのはない。声をかけて聞いてみよう。」というまとめは、非常によかった。また、教育や文化による影響が大きいと感じた。障害者の顔まねを子どもは、ちゅうちょなくしたが、固定観念がなければ素直にまねできるので、これまでの教育は正しかったのかと感じた。まねをしたら失礼だ、かわいそうだというようなことを、間接的に教えている面があると強く感じた。私自身には、特に障害がないので、障害のある人のことを十分には理解できないと思うが、理解しようとする努力や姿勢が大切だと痛感した。ただ、最後に"MZK 最もズレてる健常者"を決める必要はあるのかと感じた。それはそれぞれ個々で考えてみればよい問題だと感じた。
- 今回も玉木さんが「障害者への対応に正解はない」といったり、「1発ギャグをする から藤本さんにまねをしてほしい」とむちゃぶりをしたり、ところどころで玉木さん んがいい味を出していた。藤本さんは、1発ギャグをまねをするのにちゅうちょし、 「まねをした部分だけが動画サイトにアップされたらつらい」といっていたが、本音 だと感じた。重い話ばかりだけではなく、笑えるところもあるので、よかったと思う。 視覚障害者の方が、はげているのかイケメンなのか声でわかるということに驚き、少 し笑ってしまった。統合失調症の人が叫んでいる場合の対応については、勉強になっ た。人工呼吸器が必要な方の待ち時間の話など、当事者でないとわからないことも多 かった。栗原類さんの「ものまねには、愛のあるものまねといじめの道具としてのも のまねと2種類がある」という発言には重みを感じた。収録の合間の休憩時間の場面 で「たばこを吸っていたら面と向かって"税金泥棒"と言われたことがある」という 話には、ひどいことを言う人もいるものだと驚いた。番組全般では、有働由美子アナ ウンサーのさりげない配慮が光っていた。エンディングでは、話がかみ合わず、少し ザワザワしていたところも見られたが、収録も大変だったんだろうと感じた。前回、 トイレや移動などいろいろ大変だったと聞いたが、障害者は、本当に 100 人も必要 だろうかと感じた。たぶん皆さん話したい方ばかりなので、収録には随分な時間がか かったと思うし、意見の吸い上げ方が難しいのではないかと思った。こういう番組は、 続けてほしいと思う。

- 自分からは進んで見ない番組だったので、正直なところ借りてきた猫みたいに固ま ったような感じで番組を見始めた。ただ、番組冒頭は民放の番組のまねをしているの かと少し思わせるサブカルチャー的なつかみで、こちらの意思に関係なく引き込まれ る力強さも感じた。その勢いのままバラエティーとして楽しめた。一方で、"MZK" を決める必要は本当にあるのだろうか。また、バラエティーだからしかたないのかも しれないが、結局はお笑い芸人やタレントがいないと私たちは入っていけないのかと 疑問を感じた。「障害者に声をかけてみよう」「明るい温かい目で見守ろう」などいく つかまとめがあったが、そこまでいろいろなレベルの話があったにもかかわらず、少 し表面的に終わってしまったと感じた。「カミングアウトしたら笑えなくなる世間の ズレた反応を見ていこう」というまとめもあったが、その前に障害者の方から"障害 とプロ意識"ということについていい話があったので、これはどういうまとめなのか と少し疑問も感じた。最後は、バラエティーとして大団円できれいにまとまるのかと 思ったところでアクシデントが起こり、一瞬冷水を浴びせかけられたように感じた。 あのシーンは入れなくてもよかったと思うが、あえて入れた制作者の意図をお聞きし たい。ただ、全体を通して見て、自分の中にそういう波立つ感じを与えてもらったこ とは、素直によかったと思っている。ゲストからもあたたかさや配慮を感じられて、 見ていて嫌な気持ちには一切ならない番組だった。また次の機会には進んで見てみた いと思う。
- 全体の構成がまとまっていて安心して見ることができた。見る側も少し慣れたのか もしれないが、前回より見やすかった。ハライチの岩井さんの質問は、的が外れてい て少し驚いた。こういう質問が飛び出すということ自体、多くの健常者が実は障害者 に対して今までの接し方が興味本位だったのかと、自分も含めて反省させられた。障 害者の方が「何をもって健常者っていうのか、障害者っていうのか」と言ったときの 張り詰めた空気にぞっとしたが、本音のぶつかり合いは必要だったと思う。土田さん の「健常者・障害者の差は何だみたいな話になったらもうしゃべれない、質問できな い」というコメントはナイスフォローだと感じた。改めて、障害者・健常者関係なく、 人とのつきあいにマニュアルのようなものはあまりないのだと実感した一方で、ある 程度マニュアル化された部分も必要だとも感じた。例えば、統合失調症の人の叫びに ついて、当事者が「妄想や幻覚に対してのものだと経験してわかった。愛を持って温 かく、かかわらないで欲しい」と話していたことで、自分の持っている罪悪感が少し 和らいだので、そういう生の意見を聞けてよかった。こうした番組を続けていくこと で、障害のある方がどこまでをハンディと感じているのかということを、接する人間 が感じ取って自然にフォローしていけるという関係性が、社会全体として進むかと思 う。また、教育の場を通じて、障害者のまねをしてはいけない、気の毒と一番に感じ

てしまうということをどこまでどう考えていけばいいのかは、生の声を聞きながら探っていかないといけないと感じた。栗原さんが障害をカミングアウトされたということで登場したが、障害者の側なのかタレントゲストの側なのか、立ち位置があいまいだと感じたし、前後のつながりもよくわからなかった。

- こういう番組は初めて見たので、非常に斬新ですばらしい番組だと感じた。関西な らではの笑いに昇華していて、東京では制作されないような番組だと感じた。司会の 鈴木おさむさんや有働アナウンサー、玉木さん、藤本さんがいたから番組が成立した ように思う。これまで障害のある人たちが 100 人もスタジオに来て明るく話してい る番組はなかっただろうし、想像もつかなかったが、障害とは何だろうと感じる。障 害者の定義というのは、障害者手帳を持っているかどうかという見方があるかもしれ ないが、それぞれ全然違っており、HIVの方や人工透析をされている方など、誰も 障害者と思わないような人も障害者手帳を持っている。いろいろな障害のある方々が 一緒に生活しているので、こういう番組は、これからどんどん制作していただきたい。 一番感心したのは、藤本さんは障害者と全く目線が一緒で、障害者かどうか関係なく 話をしているというのがよく伝わってきたが、こういう人たちはまだまだ少ない。た くさんの方々が理解していただければと思う。人それぞれ事情があって、健常者から 障害者への質問の時に「自分が健常者になりたいと願ったら、自分の33年間の人生 は何だったんだ。」「自分は障害があっても全然不幸だと思ってない。」という発言が あったが、障害者の方の真意だと思う。皆それぞれ自分の人生があって、一人ひとり 懸命に生きているんだということを、番組を見て私自身も再認識させられた。これか らも番組をさらに発展させて、たくさんの人に見ていただきたいと思う。
- 前回は、障害者の主張がとても強かったという印象があるが、今回はずれているということへの議論がきちんとできていたのではないかと感じた。途中、静まりかえる場面や、最後に少しザワザワする場面があったが、リアルな感じで作り込んでおらずよかった。バラエティーなのできれいに終わるのがいいかもしれないが、リアルなところはよかったと思う。親子の実験では、大人と子どもの意識の違いを改めて考えさせられた。障害者のまねをすると失礼にあたるという気持ちは自分にもあるが、この場合はしないほうがかえって失礼にあたるのではと思ったりもする。まねをするかどうかは、難しい。しかし、このようなみんなが難しいと思うことを投げかけるということが大切で、バラエティーの中でいろいろ考えさせられることがたくさんあったので、よかったと思う。また、障害者から障害者への質問というのも新しい取り組みでよかったと思う。視覚障害者の一目ぼれの話は、普通のバラエティーのようで、親近感を持てておもしろかった。休憩時間の場面では、たばこを吸っている障害者の話な

ど、素で話しているところもあり、よかった。今回も心に残ることばがいくつかあった。「障害者は不便なだけで不幸ではない」や「何をもって健常者なのか」などが出てきたが、確かに何をもって心身ともに健常者なのかというのは、深いと思った。発達障害の話で、「ステージの上で障害は武器になるので、ステージの上で言うことではない」とあそどっぐさんが話していたが、この人は芸人なんだと改めて思い、非常に心に残った。全体的に、前回より充実していてよかったと思ったが、身体の障害とそれ以外の障害の方を障害者としてひとくくりにしていいのかとも思った。

- 前回より明るくパワーアップして見ていて楽しめたし、意外性もあっておもしろかった。「声がはげている」という発言に結構驚いたが、逆に全く耳の聞こえない人に「魅力的な声、魅力的でない声というのはわかるのか」という質問があってもいいのではないかと思った。もう一つは、障害者と健常者の違いについて、番組では「それを議論し始めたら、先へ進まない」ということで番組を進行したが、なかなか重要な問題だと思う。統合失調症、アスペルガー症候群、解離性同一性障害など、見た目で分からない障害やいろいろなレベルの障害があるので、極端なことをいうと本当の健常者はいないのではないかという議論にもなってくると思う。そういう人にどのように対応するかについては、例えば、大人が小さい子どもにどう対応をするか、それから日本人が外国人にどう対応するか、男性は女性にどう対応したらいいのかというようなことにも通じると思う。ハラスメントを考えるとそういう問題が普遍的にあるのではないかと思う。その一方で、障害者の優遇などについても考えなければいけないとも思った。仕事のうえでは、呼吸器が必要な障害の人の話が一番勉強になった。
- この企画は2回目で、日曜放送の「バリバラ」も含めて、粘り強く続けていることは評価したい。特に、障害者の皆さんが、むしろ私たち健常者よりもみずからのアイデンティティーを非常にしっかりと持っていると改めて感じ、非常に感銘を受けた。9月は障害者雇用促進月間ということで、番組は8月の放送ではあったがタイムリーな企画だと思った。今、障害者雇用率というのはどんどん増えてきている一方で、職場における差別も実は増えてきている。ぜひその側面からも企画していただけたら大変ありがたいと思う。視覚障害の人でも一目ぼれするという話は、私も大変ほっとする話題だった。
- センシティブな問題について、本音をぶつけ合うことができたのはバラエティー番組だったからこそだろうと思う。1回目よりも私も見やすいと感じた。「健常者に生まれたかった?」という質問に対する聴覚障害の廣川麻子さんの「健常者には生まれたくない」という回答は予想外で驚いた。障害者だからかわいそうというのは、健常

者の勝手な思い込みだということに改めて気づかされた。一方、大勢の人が並んでいるときの対応については、意見が分かれており、それぞれの症状によって対応は違うということだが、対応は難しいとも感じた。そんな中で、電車内で大声を出している統合失調症の方の対応についてのアドバイスは、大変参考になった。また社会実験で、障害者のまねを親は失礼でできないのに対し、子どもは何の偏見もなくまねをしていたが、私たちは子どもや孫にどのように障害者への接し方を教えていけばいいのかと感じた。また、学校で本当にどのように指導しているのかというのも気にかかった。この番組を見て、健常者と障害者とのズレは依然としてあるものの、あまり気兼ねせずに、それぞれトークを繰り返すことで、少しずつズレは狭まるように思う。この問題にゴールはないと思うので、できれば引き続きこのような問題に焦点を当てていただければと思う。

# (NHK側)

「前回よりも見やすかった」「またこの企画を続けてもらいたい」など、本当に多様で深いご意見をいただき、ありがとうございました。制作を担当したチーフプロデューサーも同席しているので、ご質問いただいた点を中心にコメントをさせていただきたい。

#### (NHK側)

「"MZK"は必要か」については、バラエティー番組としての落ちつきどころとしてあったほうがいいのではないかと考えた。演出的な面では、タレントの皆さんが緊張感をもって発言するようになることと、フランクにどこまで話せるのかということを試すという意味もあった。「障害者は 100 人必要だったのか」については、100 人それぞれが多様で、障害が同じでも意見や対応は個々に違うということを感じてもらえたらいいと思ったが、改善の余地はあると思う。ラストについては、実際に収録自体があの形で終わったので、きれいにまとめず採用したというのもある。もう一つは、数時間の収録ですべてがわかるものではないので、あえてそれを出した。岩井さんの質問も事前にアンケートをとり、回答されたことをそのまま質問として載せた。大人と子どもで障害者のまねをするかという実験は、フランスで数年前に同じような社会実験が行われており、今回は"配慮"と"差別"がテーマで、倫理感とは何かという正解がない話だったので、同じことを

日本でもやってみた。

## (NHK側)

100人の障害者を目の前にするのは、私も初めての経験だった。 4時間ほど同じ空間で過ごしていると、この世界が非常にカラフルに見えてきて、皆さんのいろんな個性が一同に集うということはこの社会の多様性をしっかりと見せていると感じた。本当にあの場から発信できることがまだまだたくさんあると感じた。本日も多くの委員から、続編を期待される声があったので、いろいろ形を変えながらも、放送することによって、垣根をなくしていくことに徹していきたいと思う。

# <放送番組一般について>

- 7月23日(土)の「地獄を描いた僧侶~源信 極楽往生のすすめ~」(総合 前7:45  $\bigcirc$ ~8:24 近畿ブロック)について。番組は、全体的におもむきのある映像に興味をひか れたが、もう少し掘り下げたものを制作してほしいと感じた。恵心僧都源信が多くの ものから影響を受けたということだが、どういうものを見て、あそこまで具体的な地 獄観を作り上げ、ビジュアル化していったかを知りたかった。おそらく、源信に詳し い人でも、その教えが比叡山から全国の浄土系の宗派にどう流れていったのかも見た いと思う。源信のブレインの人たちの存在は番組でも触れていたが、年表的に見るこ とができれば、もう少し具体的にイメージできたのではないかと思う。最初に源信の 生まれ故郷の二上山、當麻寺の話があって、練供養の場面で中将姫の話を出すのであ れば、もう少し中将姫について詳しく紹介したほうがよいと思った。源信は"観想" を重視したとしているが、それをイメージできる映像を編集したらよかったと思う。 平等院鳳凰堂の映像は過去の撮影映像だったと思うが、"観想"をイメージできる時 間帯の映像のほうがよかったと思う。また、二上山を山越えする阿弥陀絵と落日、平 等院の映像が別々に出てきたのが残念だった。技術的なことかもしれないが、源信の 誕生院の場面で光源がちらちら見えていたのが気になったので、自然な光のあてかた をしてほしかった。
- 比較的丁寧に制作されていると感じた。個人的にはほとんど知っていることなので 新鮮みはなかったが、源信が25人のグループで"終活"を実践していたことは深く は知らなかったので新鮮に感じた。高齢化社会になったので、"終活"の実践という 意味なのかもしれないが、なぜ今このタイミングで源信展を開催したのかということ

も少しあったほうが流れとしてわかりやすいのではないかと思った。また、源信は地獄六道だけではなく極楽往生のことも長々と書いているが、美術上の表現としては、圧倒的に地獄や六道絵の表現がおもしろくて、極楽往生の絵は魅力的な造形として発達してこなかったのか、そのことに、少しでも触れてくれればより勉強になったと思う。

- 歴史上の人物としては知っていたが、地獄絵図が衝撃的で、実際夢見が悪くなるくらい怖かった。ずっとこれが続くなら嫌だと思って見ていたが、そう思い始めた頃にうまく極楽の話が出てきたので、往生要集や番組に興味を持って見ることができた。地獄の説明がかなり怖かったので、それと同じぐらい極楽浄土のすばらしさがわかるような演出もあったらよかったと思う。改めて仏教や死を自分のこととして興味を持った。ホスピスやみとり、いろいろな今のことばにあわせて表現されていると思った。その中で「正しく死ぬ」ということばが出てきたが、極楽浄土に行くにはどういう努力をしたらいいのかとか思いながら見ていた。最期をどのように迎えるか、そういう年齢の人にとってはさし迫ったことだと思うし、そういう親を抱えている私たち世代もいろいろ考えないといけないと思う。改めてこうしたテーマを取り上げてほしいと感じた。細かいことだが、奈良国立博物館の学芸員が美術の解説をしていたが、若干展覧会の宣伝のように感じられた。
- 4月8日放送のブラタモリ「#69 京都・清水寺」で、この世とあの世の境目という話が出ていたが、あの世とこの世というのをきちんと体系づけたのが源信であったというのを初めてこの番組で知った。番組は、いかに死ぬかということについて"終活"ということばが使われているが、最近言いだしたようなことばなので、あまり安易に使ってほしくないと感じた。ただ、どこまで延命処置をするかという問題もあり、いかに生きるかいかに死ぬかということはすごく大切なことだと思う。地獄に行くか極楽に行くかは昔から大きなテーマで、天台宗から浄土真宗へと発展していたと思うので、源信についてもう少し掘り下げてほしいと感じた。また、歴史が好きなのでいろいろな側面から歴史を扱った番組を制作してほしい。
- 奈良国立博物館の展覧会での関連番組ということだが、源信を知る入門編としてわかりやすくてとてもいい番組だと思う。適度に深いところもあり、これから展覧会に行ってもっと詳しく知ろうというような人にはちょうどいい番組だったと思う。ナレーションや音楽など、どこの部分をとっても上品にまとめられていた。タイトル映像は、あえてベースラインを崩して縦を意識したような字体が後ろのはすの映像とよく合っていて、最初で一気にひきつけられた。ただ、早来迎の図の紹介のところで、仏

たちが日本の風景に溶け込んでいるのがすばらしいということなので、早来をする仏たちを中心にゆっくり引いて見せてくれれば、よりわかりやすかったかと思う。また、奈良国立博物館所蔵と東京国立博物館所蔵の2種類の地獄草紙が紹介されていたが、奈良国立博物館、東京国立博物館のあと、奈良国立博物館に戻ったところはキャプションが付けられていなかったので、誤解を生じてしまうのではないかと思った。また、源信が行った二十五三昧会のところで使用されたイラストについては、番組の上品な雰囲気と、絵のタッチが違うような気がして若干浮いているような気がした。"観想"が大変な修業であると何回か出てきたが、実際に何をするのか、どういうことをして何が大変なのかというのが分かるとよかったと思う。ラストは"観想"を促すように、山並みと山越阿弥陀図がオーバーラップし、最後は正面向きの来迎図で終わったところが、「もう一度よく死ぬとは何かを考えなさい」というような源信の強いメッセージを感じた。また、宗教学者の山折哲雄さんと国立奈良女子大の加須屋誠教授の話のそれぞれが、そのシーンで、うまく融合したような気がしてよかったと思う。

- 極楽に行くにはどうすればいいか、源信が説いた心構えや、仏の姿、その世界を具体的に念じることに厳しい修行が伴うということや、山折さんのお話が興味深かった。 江戸時代に作られたびょうぶを、昭和中期までは村の人が危篤になると枕元に立てて、極楽往生を願ったことと、そのびょうぶが現在もしっかりと保存されていたこともすごいと思った。人は死にどこにいくかという疑問は、昔から現代まで絶えることがない中、源信が1,000年も前にこれほど真摯(しんし)に向き合っていたことを知ることができてよかった。「ひたむきに生きよ」という源信からのメッセージを感じた。今回は間に合わなかったが、次回展示の際には「阿弥陀来迎図」を見に足を運びたいと思った。
- 39分という番組時間では、カットせざるを得ないことがたくさんあったと思うが、ある程度わかっている人には、ものすごくわかりやすく上手にまとめられたと思う。それほど源信を知らない人にはわかりにくいところもあったかもしれないが、時間の制約で仕方がなかったと思う。ただ、宗教学者の山折さんのコメントで、文明の爛熟期に生から死への思想に転換があったという部分はそう言えるかと思うが、二十五三昧会などを24時間体制の介護の問題と、"観想"をF1レースと関連づけていたのは、少し現代とこじつけているように思う。源信は、極楽にいくのは、いい生き方の結果だと説明をしたかったと思うが、少し性急過ぎたという気がした。冒頭に練供養についての説明がなかなかないと思っていたが、最後に詳しく説明を出したのはうまいと思った。続編もぜひ検討してほしい。

- 「人は死んでどこへ向かうか」は人類普遍のテーマだが、まだ自分自身は"終活"を考えたこともないので、何十年後かに番組を見るとまた印象も違うと思う。歴史にあまり詳しくないが、初めて知る中で、六道絵など興味深いものはあった。源信の「極楽とは地獄とは」という強いメッセージもしっかり具体的に描かれていたので、1,000年以上前の考えに共感できたと思う。"観想"と似ているスポーツがF1ということだったが、スポーツは全部同じに思えて、番組が見終わるまでずっと気になってしまった。
- いきなり F 1 ドライバーのアイルトン・セナの話が出てきたのは少し残念だった。 地獄絵図は興味があって見に行ったので、もう少し突き詰めた内容にしてほしかった。
- 大変興味深かった。中世の人も近代の人も同じ地獄を共有しているというような話があり、歴史に残るすごい仕事をした人だと改めて思った。ただ、幼少時代は地獄絵図を見ると非常に怖かったが、今見ても全然怖くないのでそれだけ年をとったのかと思った。一方で、あまり"死"を考えたことが無かったが、この番組を機にもう少しいかに生き、いかに死ぬべきかということを真剣に考えなければいけないと改めて気づかされた。
- せめて無限地獄だけには落ちたくないという思いで見た。地獄絵図の六道絵や阿弥陀来迎図と、丁寧なナレーションがあったので、源信が描いた地獄や極楽が非常にわかりやすく説明されていた。源信は大変な才能の持ち主だが、究極の"終活"のカウンセラーと感じた。前田亜季さんのゆったりしたテンポと声のトーンの語りは非常によかった。

# (NHK側)

源信という僧侶が説いた世界を紹介する入門編としては評価していただけたと思う。さらに奥深くとなると今回の番組尺では足りず、取材・制作したディレクターももっと表現したい部分があり葛藤したと聞いた。特に、山折先生にインタビューをして聞いた二十五三昧会の話は、その仕組みや広がりなど別番組ができるほどの内容だったということだ。二十五三昧会のイラストに違和感があったという指摘もあったが、どう描けばいいか、本当に悩んだ結果とのこと。なぜ今源信かについては、ことしが没後1,000年にあたり、奈良局主催の展覧会も開催したことが主な理由だ。人間の生き方死に方を、もう一度見つめ直すことはいつの時代に

も通じる普遍的な考えだと思う。

## (NHK側)

9月10日(日)のこころの時代「死を見つめて今を生きよ~往生要集が語るもの~」で鶴林寺の真光院の住職・吉田実盛さんに話を伺ったが、往生要集で地獄について詳しく書かれているのはほんの一部で、どうすれば死んだら極楽に行けるかということをひたすら書いてあり、その分量のほうが実際は多いとおっしゃっていた。

- 7月から8月にかけてあの世などを扱った番組が多かったと思う。8月4日(金)の歴史秘話ヒストリア「ようこそ!平安京ダークサイド 陰陽師・安倍晴明のヒミツ」や「スーパープレミアム 京都異界中継」(BSプレシアム 8月9日(金)後7:00~11:00)などだが、「スーパープレミアム 京都異界中継」は、一番怖かった。知っている場所がたくさん出てきて、気持ち悪くて怖いと思いながら見たが、本当におもしろい番組だった。そのほか、稲川淳二さんが出演していた「真夏の夜の異界への旅」(BSプレシアム 8月5日(土)後7:00~10:00)もあり、おどろおどろしい月間というふうに思って見ていた。
- 8月5日(土)の「第49回 思い出のメロディー」(総合後7:30~8:50、9:00~10:00) について。「思い出のメロディー」は父や母の世代の番組だとずっと思っていたが、たまたま見たら昔の青春時代のノスタルジアに浸れるいい番組だと感じた。一緒に見ていた家族とも話が合い、やはりこういう番組は大事だと改めて思った。ぜひ続けてほしいと思う。
- 8月20日(日)の大河ドラマ「おんな城主 直虎」について。「嫌われ政次の一生」 を見たが、政次ロスどころか立ち直れないところまできている。恋愛ドラマとして見 ている人は多いのではないかと思う。少しもの足りなさを感じるし、阿部サダヲさん がもっとでてきてほしい、などいろいろと要望はあるが、恋愛ドラマというねらいは いいと思う。10月から始まる連続テレビ小説「わろてんか」も恋愛が中心になると いうことなので、期待している。
- 7月の番組審議会で大河ドラマ「おんな城主 直虎」を"普通の大河ドラマとは少し異なる"とコメントしたが、8月20日(日)の「嫌われ政次の一生」の回は、そんなことはどうでもよかったと感じるぐらいよかった。会社の20代・30代の若手に

も好評で、「父親が歴代大河を見ている中で何本かの指に入るいい回だった」とも話していた。

- 8月27日(日)のルソンの壺8月号「"悩みの種"で大もうけ!?~再生ビジネス 新潮流~」について。捨てられていたサメやエイをペットフードに加工しているとい う話があった。世界では8億人ぐらいが飢餓状態にある一方で、日本では年間 600 万トンを超える食べられる食品が捨てられている。こういった食品ロスの活用につい て積極的に取り組んでいる企業があればぜひ紹介をしてほしい。
- 8月28日(月)のNHKニュース「おはよう日本」で取り上げられていた魂のバイオリニスト・若林暢さんについて。作曲家への思いを追求し、昨年亡くなるまで真摯に演奏に向かった若林さんが、今、女性を中心に非常に注目を集めている。若林さんはご両親の介護もしながら、自分の演奏もして生活、仕事、芸術と100%生きてきたせいか、バイオリンの調べから生き方が見いだせるということで、ぜひもっと長い時間で特集として取り上げてほしい。
- 9月1日(金)、4日(月)、5日(火)の「ならナビ」の中で紀伊半島豪雨災害の特集について。奈良と和歌山で85名が亡くなった大変な災害だったが、ことし6年が経過し、奈良でも北部や中部にいるとどうしても風化している部分がある。6年という区切りを少し外したところで特集を組んだのは非常によかった。いろいろな取り組みが紹介されていたが、大阪工業大学工学部の日置和昭准教授は、深層崩壊土砂崩れにおける深層崩壊を計算式で予測しようと取り組んでいて、現在、試験的に導入されているということだった。日本各地に土砂崩れの災害があるので、ぜひ長期的に取材し広く伝えてほしい。
- 9月8日(金)の歴史秘話ヒストリア「謎の秘宝で日本を変えよ!~不屈の天皇 ミステリアス紀行~」について。後醍醐天皇が鎌倉幕府を打倒しようというときに真言密教の呪法を活用しようとしたという内容で、すごくおもしろい視点だと思った。ただ、番組だけ見た人は、それが唯一の手段だったのかと思うかもしれないので、山岳の修行の寺院が軍事戦略的にも難攻不落の土地が多いことと、幕府にコントロールされていない武士である僧兵勢力を使おうとしたことなど、もう一つの現実面もしっかりと伝えたらよかったと思う。
- 9月11日(月)の「ニュース630 京いちにち」の桐生祥秀選手が9秒台を出したニュースについて。桐生選手は、京都の洛南高校時代に10秒台を出しているので、

京都でかなり注目されている。桐生選手の洛南高校時代の先生や今のライバルや朝原 宣治さんのコメントが出てきたが、全国ニュースとは違う、地元の京都放送局だから こそのニュースが盛り込まれていたらもっとよかった。例えば、高校時代に通ってい た近所の食堂の女性店員の声など、そういう身近な人たちの声がもう少しあると地元 感が出ていいと思う。京都には本田真凛選手もいるので、そういう報道を期待したい。

- 9月16日(土)のブラタモリ「#83 高野山と空海」について。最近、高野山は、欧米からの旅行者ばかりなので、この番組で取り上げていただくと日本人ももう1度訪れたいと思ってもらえるのではないかと思った。空海の24歳の時の直筆の書「国宝 聾瞽指帰」は、めったに全部公開することはないので、NHKはすごいと思う。地元の人たちも非常に驚いている。また、タモリさんは博識で、いつもすごいと思うが、地元の人たちも高く評価していた。
- 連続テレビ小説「ひよっこ」について。あと 1 週間で終わってしまうのが本当に さみしい。個性的なキャラクターと、特に増田明美さんのナレーションが光っていて、 「おはようございます」の声が毎朝本当に心地よくて最終日に何を語るのだろうと楽 しみだ。若者向けで、心地のよい朝ドラだと思う。

NHK 大阪放送局 番組審議会事務局

# 平成29年7月NHK近畿地方放送番組審議会

7月のNHK近畿地方放送番組審議会は、19日(水)、NHK大阪放送局において、 9人の委員が出席して開かれた。会議では、事前に視聴してもらった、ノーナレ「ミア タリ」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、8月の番組編成の説明が行われ、 会議を終了した。

# (出席委員)

委員長 西田 賢治 (大阪商工会議所 参与) 副委員長 小島多恵子 (公益財団法人サントリー文化財団 上席研究員) 委 員 浅野 (あべのハルカス美術館 館長) 秀剛 市田 恭子 (デザイナー集団 Team coccori 事業代表) 片山九郎右衛門 (公益社団法人京都観世会 会長) 鈴木 元 子 (月刊大和路ならら 編集長) (園田学園女子大学名誉教授) 田辺 眞 人 原 さだ (財団法人龍神村開発公社 専務理事) (京都リビング新聞社 編集部長) 山舗 恵子

#### (主な発言)

<ノーナレ「ミアタリ」(6月23日(金)総合後10:50~11:15)について>

○ "ミアタリ"捜査員については、民放の番組でも取り上げられていたのを見たことがあるが、これほど深く取り上げている番組を見たのは初めて。顔認識などを行うAI(人工知能)の研究者が、"ミアタリ"の方々の能力に敬服しきっている姿が印象的だった。捜査員の森本等警部が、いろいろな話を正直にしていたのが印象的であり、仕事内容についてもよく分かった。犯罪から市民を守るという使命感や、仕事に対する職人的なこだわりがよく伝わってきた。森本さんが、「ほかの"ミアタリ"捜査班が犯人を見つけた時は、喜ばしいが本当は自分が見つけたかったので悔しい」と、本音を話しているのを見て、そういう競争があってこそ能力や技術が磨かれていくのだなと納得した。森本さんが退職する際に、これまで家族のことを顧みないで仕事をしてきたことに対して申し訳なさをにじませていたこと、森本さんのその仕事ぶりをこれまで支えてきたご家族が、退職までの残りの期間引き続き仕事を頑張ってと話して

いた姿が胸に響いた。

- とてもおもしろかった。「ノーナレ」シリーズは初めて見た。最初「ノーナレ」も「ミアタリ」も番組名だけでは全く意味が分からなかった。しかし、番組を見て、ノーナレーションのドキュメンタリーとは、斬新だと思った。ナレーションによる説明がないことで、ドラマを見ているような感じで見ることができて、おもしろい。指名手配犯の写真と対じしながら顔を記憶していく"呼び込み"のシーンは、鬼気迫るものがあり、本当によく取材できたなと感心した。骨太な番組でとてもよかった。また、捜査員と一緒に街を歩いて、人々を見ているような映像や、鳥観図のような映像など、映像表現が工夫されていて、とても引き込まれた。森本さんが本音でいろいろ話していたのが、何よりこの番組をドラマチックにしている要素だとも思った。番組のなかで、3か月間逃亡していた犯人を、"ミアタリ"捜査員が1日で見つけたと言っていたが、どういう意味なのか分からなかった。全体として非常におもしろい番組だったので、これまで放送された「ノーナレ」も見てみたいし、次もまた見たいと思う。
  - "ミアタリ"捜査員の存在を知らなかったので、非常に新鮮で、引き込まれながら見た。迫力あるドキュメンタリーだった。森本さんが、人は年齢を重ねても目元は変わらない、目元から全体をイメージすると話されていたのが印象的だった。その話を聞いて、森本さんがこれまで300人以上を検挙できた理由が分かった気がした。「ノーナレ」は、前にも「諦めない男 棋士 加藤一二三」(3月27日(月)総合後10:00~10:25)を見た。それなりにおもしろかったが、ノーナレーションである必要がそこまで感じられなかった。今回も、テロップやコメントが説明的に感じる部分があり、それならばシンプルにナレーションがあってもよかったのではと思った。ただ、これまでにない演出や構成だったので、新鮮だった。
  - 最初は、タイトルの意味が分からなかったが、番組を見て納得した。映像が非常にスタイリッシュできれいだった。漫画を原作にしたドラマや、漫画そのもののカット割りのような印象を受けた。番組の中で、街行く人々をスローモーションで映し出す映像が何度かあった。恐らく森本さんが街なかで指名手配犯を探す時の目の動きを表現しているのだと思うが、少し違和感を覚えた。森本さんが顔を覚え込んでいる指名手配犯を見つける時は、あの映像のように人混みの中から探し出すというよりは、目に飛び込んでくるという感じなのではないかと思った。その感じがもっと映像で表現できたらよかったと思う。また、番組の中で、音楽をとても大事にされているのがよく分かった。番組を目と耳で視聴していくなかで、映像と音がぴ

ったりで、とても気持ちよく話が進んでいった。一方で、とても気持ちよく感覚的 に最後まで見られただけに、森本さんのアナログ的なすごみが十分に伝わりきらな いまま、番組を見終わってしまったような気もした。

- "ミアタリ"捜査員という刑事がいることを初めて知った。森本さんの、「頼れるのは自分の目と記憶と足だけ」「世の中にたった1人しかおらんやつを見つけるんや」という迫力のあることばに、大阪府警がこれまで見当たり捜査で4,000人以上もの指名手配犯を検挙できている理由が分かった気がした。犯人に遭遇すると顔を認識するより前に体に衝撃が走り、時間が止まった世界が目の前に広がるという"ミアタリ"捜査員の話に、顔認識システムやAIに負けない、科学では解明できない人間の力というものを非常に感じた。1日に20キロ以上を捜査のために歩くという"ミアタリ"捜査員への取材は、同行しているスタッフも大変だったのではと思う。また、逮捕の瞬間に犯人が暴れたりして危険な目にあう可能性もあったと思うが、そのようなことがなくてよかった。ナレーションがなく、捜査現場での捜査員の声など、登場する人たちのことばで、番組が進行していることにより、人間臭さが強く出ていてよかった。また、その中で、捜査員の世代交代の切なさや、家族愛も描かれていて、それもよく伝わってきた。街なかを歩く人々がスローになる映像に、私はとても引き込まれた。とても勉強になるとともに、下手なドラマよりもずっとおもしろい番組だった。
- 大阪府警は、見当たり捜査で全国一の 4,000 件という検挙数を誇るということを知り、驚くとともに感心した。不祥事を起こす一握りの人たちのために、組織全体が悪く見られてしまうこともあるが、今回の番組のように、プラスの面をしっかりと番組にして伝えていくのは大切だと思う。ノーナレーションという挑戦的な演出や、特徴的な映像など、とても感覚的な表現がたくさん出て来る一方で、確率や実績などの数字もたくさん利用して番組を作られていることにとても感心した。捜査員が指名手配犯の目元を見るだけで、誰だか分かることを検証するシーンで、手配犯の写真の中に番組スタッフの写真を混ぜていたところは、思わず笑ってしまったが、その引っかけにだまされなかった捜査員の能力のすごさを思い知った。番組の中で、見当たり捜査を行う能力は、訓練によって身につく超能力という話があった。訓練をすることで超能力的な力が身につくということや、森本さんにとっての訓練である"呼び込み"の迫力に感銘を受けた。紹介されていた数字についてはやや分かりにくいところもあったが、全体的には番組の中身も構成や演出も、本当によくできていて感服した。
- リアルタイムで番組を見たとき、最初はノーナレの意味が分からなかったが、3分くらいたったところで意味が分かり、なるほどと思った。森本さんがとてもかっこよ

かった。冒頭で、「わっぱかける」「パクる」「マル」など警察の業界用語がたくさん 出てきて、それが番組に緊張感を与えていてよかった。全体的に映像の加工が好みだった。レトロ感があるように思った。自主制作映画の雰囲気に似ている感じがした。 完全なCGではなく、実際に撮影した映像を加工しているシーンがおもしろいと思った。現在は、顔認証やAIが発達してきているが、そんな中で"ミアタリ"捜査員が 職人的な能力で捜査を続けていることがすばらしかった。街頭で不特定多数の一般の 方々を撮影するにあたって、顔にモザイクをかけないでよかったのか気になった。

- 番組タイトルも、冒頭の映像も、非常に斬新で、映画やサスペンスドラマのようで、 非常におもしろかった。正統派ドキュメンタリーの定石を少し外したようなカットや、 街のけん騒などの音響、スローモーションの映像など、ドキュメンタリーらしくない 構成や演出になっていたが、スタッフの方々が新しい手法に楽しみながら挑戦してい るのが伝わってきた。森本さんのキャラクターがとても魅力的で、番組がおもしろか った最大の要因だと思う。ナレーションの代わりになる彼の大阪弁の語りは、とても 説得力があった。見当たり捜査における経験や知識、知見、思い、すべてを自分のこ とばで的確にお話しされていた。"呼び込み"の際に手配犯の写真に語りかける姿か ら伝わる執念や、どことなく愛すべき人柄のような部分まで、彼のキャラクターに最 後まで引き込まれながら見た。
- ナレーションによるよけいな説明がない中で、息づかいまで聞こえてきそうな森本さんの生の声と、現場の映像から、見当たり捜査の実態と森本さんの生きざまが、いきいきと伝わってきた。指名手配犯の姿形がどんなに変わっても、たった1枚の顔写真から犯人を割り出す神業のような顔認識能力を持った捜査員が大阪府警にいることを知って大変驚いた。「人は年齢を重ねても目は変わらない」と、顔写真1枚1枚を拡大鏡で丁寧に見て頭に叩き込み、手配犯を見つけると勝手に体が反応するというエピソードに、"ミアタリ"捜査員の方々の強烈な信念を感じた。森本さんが大阪府警を退職された後で、どのように後継者が育っていくのか大変気がかりだ。また、AIなどの顔認識システムが進化しているなかで、極めてアナログな手法である見当たり捜査がいつまで続くのか気になった。今回の番組により、森本さんの顔が知れ渡ったことで、彼が検挙した犯人から危害を受けるおそれはないのか気になった。ノーナレの場合、キャッチーなタイトルにするなどの工夫が必要とも感じた。
- 指名手配犯を探す見当たり専門の刑事の苦労がよく描かれていた。「ノーナレ」は 初めて見たが、おもしろい手法だと思った。番組の中で専門家が見当たり捜査につい て、「品質のよい疑似画像が頭の中に形成されている」と解説していたが、そこに至

るまでの努力は並大抵のことではなく、まさにプロフェッショナルの仕事だと敬意を表したい。また治安を守っていただいていることに感謝したい。森本さんは、残念ながら定年とのことだが、ぜひ雇用延長していただき、引き続き、力を発揮していただきたいと思ったのは、私だけではないはずだ。

○ 視聴する前は、どんな番組なのか、ノーナレとは何なのか分からなかったが、ノーナレーションのことだったとは。映像の迫力に冒頭から引き込まれた。最初から最後までカメラワークが見事で、ナレーションがないからこそ伝わる迫力があった。森本さんの信念というものがストレートに伝わってくるとともに、"ミアタリ"という表に決して出ることのないものを描く中で、知らないことがたくさんあり、久しぶりにドキドキしながら視聴した。特に、整形していても目だけは変わらないという話は驚きだった。次回の放送があるならば、ぜひまた見たいと思うくらい完成度が高かった。

## (NHK側)

欧米などでは、ドキュメンタリーは、ナレーションなしで制作されることが多い。NHKのドキュメンタリーは、国際コンクールで高く評価されてきたが、近年は説明的だと指摘されることが多い。こうしたこともあり、ノーナレーションでの番組制作にも取り組んでいる。

#### (NHK側)

今回の番組は、ナレーションを一切使わないトライアルということもあり、視聴者に没入感を持って夢中になって見てもらう番組をどのように作れるのか、制作に関わったすべてのスタッフが、自分の専門分野でない部分も含めて、一から一緒に議論を重ねながら制作した。街なかの人々をスローモーションで撮影した映像については、ロケ中、NHKが撮影していることに道行く方々が気がつけるよう、あからさまに目立つように撮影を行った。3か月間逃亡していた犯人を"ミアタリ"捜査員が1日で見つけたという説明については、"ミアタリ"捜査員は指名手配犯を専門に追う刑事で、指名手配がかかった初日に犯人を検挙したということだ。AIが発達した現代において人間のやれることは何なのか、ということを思いながら今回の取材を行っていた。専門家によると、一人一人の人間の顔を識別する能力は、人間がもうコンピューターにかなわないが、群衆のなかから変装などした人物を探し

出す能力は、まだ人間のほうが優れているそうだ。それは、人間の想像力と関係していて、例えば森本さんは"呼び込み"をすることで、いろいろな犯人の姿を想像しており、その想像力をもとに犯人を見つけているのではということだ。

## (NHK側)

日本では、ゴールデンタイムで放送されるドキュメンタリーは、 ながら視聴の視聴者にもわかりやすいように表現を進化させてき た。しかし、海外のコンクールではそれが説明的との指摘を受け ている。そんな中で「ノーナレ」は、国際コンクールで評価して いただける表現への挑戦であると同時に、22時台で放送して比 較的多くの方々に見ていただけたのでありがたいことだ。

# <放送番組一般について>

- 7月1日(土)の「ビワイチ! びわ湖1周 自転車の旅」(総合 前10:50~11:49 滋賀県域)について。「おうみ発630」の村上文香キャスターと、安田大サーカスの団長安田さんが出演していたが、安田さんが自転車好きということを初めて知り、驚いた。びわ湖を自転車で一周するビワイチを、滋賀県は観光資源としてすごく売り出そうとしている。びわ湖の周りには、自転車用の標識がたくさんある。そんな状況のなかで、交通マナーのことをたくさん紹介していたことはよかった。びわ湖周辺で車の運転をしているとき、ビワイチをしている自転車が危ないと感じることがある。その点についてきちんと注意喚起をしていただいたのはありがたいと思った。また、びわ湖の美しい風景が映っていてよかった。3日目に高島市で食べていたかしわ(鶏肉)の味付けは、どうしてとんちゃん焼きと言わなかったのか気になった。
- 自転車に乗る楽しみは描かれていたが、その場所にある楽しみは描かれていなかったのではないか。自転車はあくまでも手段であり、目的はびわ湖の周辺で何かをすることであると私は思う。もちろん、近年、サイクリング自体が目的化してきていることは分かっているが、自転車に乗ってびわ湖周辺で何かをしたい人に対する情報が少なかった気がする。例えば、10か所レンタルセンターがあるとか、予備のチューブをどこにつけたらよいかなどの情報は、かなり丁寧に紹介されていたが、1時間びわ湖の周辺を回って近江八幡市に行っても、八幡山城も安土城も出てこないのはいかがなものかと思った。少なくとも近江八景くらいは詳しく紹介してもらいたかった。そのような情報を入れた方が、歴女や仏像ガール、墓マイラーなど県外の人が滋賀県に

来るきっかけになると思う。

- ビワイチは他県にとって、サイクリングロードの整備や、イベント開催のお手本のようなものなので、どのような番組になるのか楽しみにしていた。村上キャスターについては、この番組で初めて本格的なサイクリングに挑戦されると言っていたが、3日間も本当に大変だったと思う。私はとても楽しく番組を見た。この番組がビワイチの入門編となって、自転車で回ってみたいと思う人がたくさんいたのではと思った。私は体力的に自転車で一周するのは難しいが、車で回ってみたいと思った。
- 自転車をまず楽しもうといざなうにはとてもよい番組だと思った。村上キャスターのキャラクターが、本当にかわいらしかった。彼女が次にどんなコメントをするのかわくわくして、引き付けられながら見た。3日間、自分も一緒に旅をしているような感覚になった。びわ湖の風景を楽しみながら、さりげなく自転車の乗り方も教えてもらえたので、よい意味で自転車の入門ビデオを見ているようだった。そのような作りを目指した番組だったのなら、せっかくなのでもう少し自転車の知識を教えて欲しかった。出演者と地元の方が一緒に写ったフォトフレームのようなカットなども随所に入れられており、出演者たちに親しみを持って番組を楽しむことができた。
- びわ湖全体の魅力を伝える番組なのか、サイクリングをすることの魅力を伝える番組なのか、どっちつかずという感じがした。びわ湖周辺の観光スポットやグルメを紹介するのであれば、1時間では短いと思うし、サイクリングの楽しさだけを伝えるのであれば、1時間は長いと思った。草津メロンを買いに行って、まだ販売されていなかったのは残念だった。パンを食べた安田さんのリアクションはおいしそうに見えず、なくてもよかったのではと感じたし、フリーフォール滑り台を礼服で滑る意味も分からなかった。村上キャスターについては、楽しそうでよいと思った一方で、一緒に見ていた家族はもう少し落ち着いてリポートした方がよいと思ったようだ。
- ビワイチというのは、自転車でびわ湖をただ一周することを言うのか、観光しながら一周することを言うのか、どこからスタートしてもよいものか。そういった簡単な細かいことも含めて、ビワイチの定義のようなものを教えていただきたかった。もし滋賀県の方々は知っていることだったとしても、県外でこの番組を放送することがあれば、そのような情報を少しでも入れてもらえたらと思う。番組の中で、自転車がパンクした人に出会った時にどうすればよいかなどのアドバイスがあり、そのようなサイクリングのマナーや情報が、もう少し出てきたらよかった。140か所あるというサイクルスポットや、写真スポットのカメラ台の話など、どんどん環境作りがなされて

いるのが分かった。ロケでは撮影できなかった晴れた日の美しい風景が紹介されていたのもよかった。番組の最後でいろいろな写真が一気に出てきたが、もっとゆっくり見たい風景というのがいくつかあった。1時間の放送でなく、1日目、2日目、3日目をそれぞれ30分くらいで3回に分けて放送したほうが、もっと魅力的な番組になったのではと思った。

- 滋賀県内の方々に向けた番組なので、県外のわれわれが注文をつけるのがふさわしいのか分からないが、個人的には紹介されるだろうなと予想していた観光スポットが紹介されていなかった。びわ湖には夕方に景色がきれいな場所がたくさんあるのに、それらが紹介されなかったので残念だった。また、近江には、随分昔から工芸品を作っているところがいくつかあるので、そのあたりも掘り起こして紹介してほしかった。滋賀県には高島扇骨や江州だるま糸など今では伝統を支える貴重な資産がたくさんあるので、それらのうちひとつでも紹介してもらえるとよかった。私がサイクリングしたときはびわ湖をシティサイクルで行った。慣れている方はよいが、ロードバイクは、下り坂や雨の時などにブレーキが効きにくく危ないように感じるので、番組内でも注意喚起してもらえるとよかった。また、自転車からの小型カメラによる映像をずっと見ていると、微妙に映像が揺れているので酔いそうになったし、やや映像表現として散漫に見えた気がした。
- 安田さんの自転車愛や知識、気さくな人柄に好感を持った。村上キャスターもよく 頑張っていたと思うが、体力的にもギリギリのうえに、ぶっつけ本番だったから適切 なコメントする余裕がないように感じた。筋書きのない旅という話だったが、だから こそのよさがうまく表現されていないように感じた。また、筋書きがないと言いなが ら、道順などは事前に調べているようで、その点でもやや不自然に感じた。旅をした 後、あるいは体を動かした後には、おいしいものを食べることが楽しみであり、大切 だと思うが、せっかく滋賀県にはおいしいものがたくさんあるのに、それがしっかり と紹介されていなかったように思う。近江牛を食べるのだったら、牛めしではなく、 すき焼きを食べてほしかった。せっかく頑張って登った琵琶(びわ)湖大橋からの眺 めが、曇っていたのは残念だった。
- サイクリングでびわ湖の絶景を楽しめる場所の紹介が非常に限られていると感じた。自転車に乗って撮影しているせいか、ピントがずれて映像がぼけているような時があった。自転車のすぐそばを車が通り抜けていく様子を見て、子ども連れでゆっくりサイクリングを楽しむことは危なくて難しいのではと感じた。

○ 身近な所で行ってみたいなと思うような場所が紹介されていてよかった。自転車旅の環境が整っていることや、そのおもしろさは伝わってきたが、食レポが多かった気がした。もう少し歴史的な視点などを入れてもよかったと思う。

# (NHK側)

ビワイチの定義というのはない。サイクリングに特化して1泊2日で1周するグループもいれば、今回のように2泊、3泊して観光スポットを楽しみながら1周するグループもいる。今回は、初めてサイクリングに挑戦した村上キャスターが悪戦苦闘しながら、いろいろなスポットをじっくりと安田さんと回ったのだが、そのボリュームのある情報を1時間の番組に詰め込んだので、番組のなかで伝えきれなかったことは確かにあったと思う。村上キャスターについては、「おうみ発630」に出演しており、県民の方にはあのキャラクターが親しみをもって受け入れられていると考えている。

# (NHK側)

滋賀県は、近年のサイクリングブームの高まりを受けて、ビワイチを観光の起爆剤にしようと、さまざまな取り組みに力を入れている。それを伝えたいと企画したのが、今回の番組だ。筋書きなしというコンセプトについては、一般の方がビワイチに挑戦する際に、実際に楽しめる場所や、気をつけたほうがよいことを紹介するという企画だったので、あまり事前のアポイントメントを取ることはしなかった。今回は、滋賀県域向けの番組なので、彦根城や安土城など、県内の人が1度は行ったことがあるであろう場所を紹介するのはあえて避け、県内の知られざる魅力を重点的に描いたのだが、有名な観光スポットの紹介が少なかったのではというご指摘については、今後の番組作りに生かしていきたい。

# (NHK側)

民放も含めて近畿ブロック向けの番組を放送することが多い関 西において、今回のような、県域向けのより地域の方々に寄り沿 った番組を放送していくことは重要だと考えている。

- 大河ドラマ 「おんな城主 直虎」を毎週とても楽しみにしながら見ているが、恋愛ドラマのような感じがして、普通の大河ドラマとは少し異なるように感じていた。しかし、6月25日(日)放送の「材木を抱いて飛べ」の回で、"やっと大河ドラマらしくなった"と感じた。20代の若い世代の後輩たちも同じような思いを持ったと聞いて、"大河らしい"とは何かを考えるようになった。
- 土曜時代ドラマ「みをつくし料理帖」について。ドラマの中で、見立番付が売られている場面が登場し、主人公のお店とライバルのお店のどちらの番付が上かを争い、その上下によって世間的な評判も決まってしまうというエピソードがあった。しかし、当時、見立番付にそこまでの影響力があったかは疑問に感じた。
- 6月9日(金)の歴史秘話ヒストリア「舞う 逃げる 謝る 信長のピンチ脱出術」 について。織田信長が出陣前に"敦盛"を舞った話が紹介されていたが、あれは現在 の能ではない。また、あれを舞ったから戦いに勝利できたというのは少し強引なよう に感じた。
- 7月1日(土)のNHKスペシャル「謎の"日本人テロリスト"を追え~ダッカ・テロ事件から1年~」について。親日的なバングラデシュで国の発展に貢献する日本人専門家が、なぜテロのターゲットになったか大変疑問だったが、番組を見て事件の背景が少し分かった。イスラム教徒は何人死んでも話題にならないが、日本人や外国人が死ねば大きな問題になり、外国から政府に圧力がかかるので外国人を狙ったという発言があった。このような考え方がまん延すれば世界のあらゆる人がターゲットになりうるということで大変恐ろしい世の中になったのだなと感じた。日本人の妻子をもち、日本の大学で教職に就いていたサイフラ・オザキが、ISに活動資金を流してバングラデシュの若者をシリアに送り込んでいたという事実は非常に衝撃的だった。日本でもISによるテロが起きても不思議ではないと感じた。テロ事件の真相によく迫っていた番組だった。それでもなお、なぜサイフラ・オザキがISに傾倒していったのかなど、いまだ私にはわからないこともあるので、いずれまた真相が解明される日が来ることを期待している。
- 「ぱぴぷぺZoo!~とことん楽しむ動物園&水族館~」(7月17日(月)総合後7:30~8:43)について。全国の動物園と水族館の魅力を紹介する番組だったが、飼育員や獣医の方々のご苦労や経験など珍しい話が知れたとともに、生き物たちへの愛情あふれる姿が描かれていて、とても感動した。関西も動物園や水族館が多いので、ぜひこのような番組を制作して欲しい。

- 7月10日(月)のプロフェッショナル 仕事の流儀「家族に未来を、取り戻す~ 移植外科医 笠原群生~」について。移植外科医の笠原群生さんが、「やるのではない、やりきる」という信念のもと、生体肝移植のプロフェッショナルとして活躍されている姿に感動した。「ミアタリ」も含め、その道の専門家として自らの道を徹底して究めていく姿は大変勉強になった。
- 6月25日(日)のルソンの壺~6月号~「地場産業の底力 ~地域を元気にする挑戦者たち~」について。4月からコメンテーターを務める真山仁さんのコメントが、非常に的確でおもしろい。靴底と上部をファスナーでつなぐ着せ替え靴を製造している神戸の会社が紹介されていたが、独創的なアイデアだと感心した。大阪のてぬぐい業者や、兵庫県豊岡のかばん業者も紹介されていた。そういった事例を通じて、真山さんが、地場産業が競争の激しい環境を生き抜いていくには、単に伝統を守るだけではなく、互いに知恵を出し合って町ぐるみで総合力を鍛えていく必要があるのだとコメントしていた。まさにその通りだと思った。これからも真山さんのコメントを楽しみにしたい。
- 7月14日(金)のかんさい熱視線「我は湖(うみ)の子 びわ湖 ボート1周に 挑む-」について。とても感動した。2人の方をクローズアップしていたが、もっと いろいろな人間ドラマがあったと思うので、そのあたりもさらに知りたくなった。
- 7月6日(木)の「ニュース630 京いちにち」について。祗園祭の鷹山という山 車の復活に向けた話が紹介されていた。禁門の変で鉦(かね)が焼失してしまった山 車なのだが、鉦や楽譜を町の人々が復活させて練習しているという話だった。いろい ろな番組で鉦の復活は取り上げられていたが、何よりこのニュースがよかったのは、 お囃子に使う鉦を担当する子どもたちを紹介していたところだ。子どもたちの新品の 鉦を見た時の生き生きとした表情や、八坂神社にお囃子を奉納する時の真剣な表情な ど、未来を担う子どもたちが一生懸命に祭りに取り組んでいる姿を伝えているのがよ かった。

NHK 大阪放送局 番組審議会事務局

## 平成29年6月NHK近畿地方放送番組審議会

6月のNHK近畿地方放送番組審議会は、21日(水)、NHK大阪放送局において、9人の委員が出席して開かれた。会議では、事前に視聴してもらった、目撃!にっぽん「"住民タクシー"でどこへでも~京都・京丹後~」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、7月の番組編成の説明が行われ、 会議を終了した。

# (出席委員)

委員長	西田 賢治	(大阪商工会議所 参与)
副委員長	小島多恵子	(公益財団法人サントリー文化財団 上席研究員)
委 員	浅 野 秀 剛	(あべのハルカス美術館 館長)
	市 田 恭子	(デザイナー集団 Team coccori 事業代表)
	鈴 木 元 子	(月刊大和路ならら 編集長)
	田 辺 真人	(園田学園女子大学名誉教授)
	原さだ	(財団法人龍神村開発公社 専務理事)
	山 﨑   弦 一	(日本労働組合総連合会大阪府連合会 会長)
	山 舗 恵 子	(京都リビング新聞社 編集部長)

#### (主な発言)

<目撃!にっぽん「"住民タクシー"でどこへでも~京都・京丹後~」 (5月21日(日) 総合 前 $6:15\sim6:49$ )について>

○ 「住民タクシー」がどのように利用されていて、利用者からどのような反響があるのか、この番組を通じて非常によく分かり、「住民タクシー」が単なる移動の手段だけでなく大きな意味を持つことが分かった。大下里子さんのような高齢のご夫妻は、京丹後市に限らず全国にたくさんいらっしゃるので、こういった事例を広く紹介することはとてもいいことだし、この番組を通じて「住民タクシー」を検討する自治体も出てくるのではないか。「あれ(住民タクシー)があると目の先が開けたような感じがします。自由でなんか羽が生えたような気分がしますよ。」という利用者のお年寄りのことばがすべてを物語っていて、番組は見ていて希望を持てる作りとなっていて、この取り組みを住民たちが盛り上げて取り組んでいる姿がよく表れていた。ただ、「住

民タクシー」のシステムが少し分かりにくいのが残念だった。料金は、通常のタクシーの半額ほどという説明はあったが、初乗りがいくらなのかなど、利用する立場の人たちが知りたい情報がもっとあるとよかった。また、運営していくうえで、どのような話合いがなされてどのような仕組みで行われているのかなどの要素もあると、この番組を見て自分の住む地域でも取り入れようと考える人も出てくるのではないか。利用する側、運営する側の両面に触れられているとよりよかった。最後のほうで、大下さんが卓球は最近していないがまたしたいと話していたシーンが、希望が持てるシーンでとてもよかった。

- 高齢化が進んでいる過疎の町で、「住民タクシー」が高齢の住民を元気にすることにつながり、地域の高齢者の見守りという観点からも非常にうまく機能していることがよくわかった。特区における「住民タクシー」の一つの成功事例だと思う。「住民タクシー」で活用されている「アメリカで開発されたライドシェア」のシステムは、世界的にも広がってきており、日本でも規制緩和の一環として、こうした仕組みを全国で導入すべきという声もある。一方で、このビジネスモデルが世界中でさまざまな問題を起こしていることも事実である。今回は、過疎の町での成功事例が扱われているが、このビジネスモデルによって起きている課題についてもぜひ掘り下げた番組を制作してほしい。もう一つ、お茶会を企画し参加者を送迎していたが、その料金が気になった。
- 事故が起きたときの対応など、「住民タクシー」の問題点はいろいろあるかと思うが、いい点を前向きに紹介しているのがよかった。1人暮らしの井上幸榮さんがお茶会に誘われてもまだ一度も参加していないということも、最後はお茶会に参加しましたとなるよりは、できすぎという感じがなくてよかった。しかし、笑顔で話す井上さんの表情を見ていると「住民タクシー」の存在意義を強く感じた。以前、8月中旬の日曜日の昼間に、新潟県の上越市に現代美術を見に行ったのだが、土日ということでバスが運休で、タクシーも18キロほど離れたところから呼ばないと来ないという状況で、どうしようもなく会場まで3キロ以上歩いたことがあった。結局、途中で関係者の車に乗せてもらえたからよかったものの、地方では車がないと非常に不便である。番組に出ていたおじいさん、おばあさんと同じような状況に置かれている方が全国にいる状況で、「住民タクシー」の取り組みを伝えているこの番組の可能性はとても大きいのではないかと思いながら拝見した。
- コミュニティーバスやデマンドバス、デマンドタクシーは知っていたが、個人の車 を使ってタクシー業務と同業のサービスを提供していることは知らなかったので、い

い勉強になった。地域の人々どうしだからこそできるサービスのきめ細かさがあると 思うし、番組を放送することで、今後この取り組みがさまざまな地域で参考にされて 広がっていくと思う。番組冒頭で、87歳の女性がタブレットで配車をお願いしてい るシーンが衝撃的だった。過疎の町の高齢者と現代社会のコミュニケーションツール という、一見かけ離れてみえるものが一緒に登場することで、この取り組みが将来的 にどれだけ可能性があるものかを見事に印象づけていたと思う。見終わってとても温 かい気持ちになったのだが、それは、登場人物をアングルも含めてとても丁寧に撮っ ていたことや、登場人物のことばを丁寧に拾っていたからだと思う。例えば、小倉麗 子さんが企画したお茶会の当日には、岸壁に波が打ち寄せるシーンやカモメが空を舞 うシーンがあり、何かこれから始まるというのを予感させるような作り方をしていた。 また、卓球をするために、大下さんご夫妻が出かけるシーンでは、風や光の映像がと ても気持ちよく感じられて、このように地域の風景や自然が映像で取り込まれている ところが番組の温かみを感じた理由なのではないかと思う。それに加えて、92歳の 井上さんが、当初はお茶会のお誘いに対してかたくなに参加を拒んでいたが、最後は 井上さんから出てきて、手を握って笑顔でとてもかわいい表情をされているのを撮っ ていて、こういったシーンの積み重ねが切ないまでも温かい作品に仕上がった理由か と思う。番組前半と最後のほうに桜のシーンを入れていたのも、日本人の心に訴える 作りで、こういう象徴的なシーンの積み重ねにより、番組視聴後も余韻を感じられた のだと思う。「住民タクシー」のシステムについては、もう少し説明があるとより身 近なこととして捉えられると思った。

- 私も、番組冒頭で、高齢者がタブレットを使って車を呼ぼうとしている姿に衝撃を受けた。自分の住んでいる地域は、京丹後市よりも過疎の進んでいる地域で、10数年前にNPO法人を立ち上げて住民の利便性の向上と持続可能な運行方法の確立を行おうとしたのだが、社会的な状況や住民の理解を得られなかったため、断念した経緯がある。そういうこともあり、京丹後市でここまでうまくいっているのは、なかなか珍しいと思う。ところどころに京丹後市の美しい景色が盛り込まれていて、車窓からの景色で、海や桜のシーンでのナレーションもとてもよく、ほのぼのとした温かい気持ちになれた。最も印象に残ったのは、老老介護をされている大下さん。85歳というご高齢であるが、りんとした態度で話されていてすごい方だと思った。「住民タクシー」をやられている中でご苦労もあるかと思うが、お手本となるような先進的な取り組みなので、この番組によって、ほかの地域の方も興味を持ってこの仕組みを利用しようと思ってもらえたらと思う。
- お年寄りのためにお茶会を企画している小倉さんご自身も、66歳という年齢で、

日本は本当に高齢化が進んでいると痛感した。ほかの地域の方が見てもヒントになるような番組だったと思う。だからこそ、「住民タクシー」の料金体系、18人いるドライバーの生計、事故が起きたときの対応についてなど、具体的なノウハウをまとめてもらえるとなおよかった。お茶会の取り組みのように、高齢者の孤立を防ぐコミュニティーづくりについての内容もあったが、コミュニティーの再生についての内容と「住民タクシー」のシステムについては、分けて取り上げたほうが分かりやすいのではと思った。「住民タクシー」の具体的なシステムや組織、問題点なども触れてもらえると、ほかの地域の人も参考になると思う。この内容でシリーズ化して、「住民タクシー」だけでなく、高齢化によって生じる問題とそれをうまく解決しつつある地域を取り上げて放送してもらえたら全国でも役に立つと思う。

- 持続可能なシステムを導入している京丹後市はすごいと思った。ほかの意見にもあったが、私もコミュニティーとシステムの面は分けたほうがいいと思う。ふだん使っている電話という身近なコミュニケーションツールを用いた方法は、大変分かりやすい。番組の中で"持続可能"というキーワードが出てきたが、持続可能なシステムにはきちんと金銭が発生していると思った。「住民タクシー」は「ライドシェア」のシステムを用いていると思うが、都市部ではタクシーを利用するときと金額は変わらないと感じた。京丹後市でも同じ仕組みなのだろうか。このような新しい仕組みが広がっていくことによって、私たちの暮らしがどう変わっていくのか。高齢者とアプリ、テクノロジーとの関係はどうなっていくのかについて考えさせられる番組だった。友人とも一緒に見たいと思える番組だった。
- 少子高齢化と過疎に悩む地域は全国にたくさんあるが、そんな中で、この「住民タクシー」の取り組みは、高齢者にとって非常に大きな意味と価値を持つ活動だと思った。これからの日本社会にとって、非常に大事になってくるこの試みを、全国に先駆けて関西が行っているのだという事実を全国に広めるという意味でも、関西の放送局が制作した番組を全国放送することの重要性を感じた。出演されている高齢者の方々がとても魅力的で、「住民タクシー」によって、行動の自由、コミュニケーションを取る喜びを得て、笑顔になっていく姿をほのぼのと温かく伝えているいい番組だと思う。耳が聞こえにくいため、人との会話を避けがちだった井上さんに小倉さんが根気強く訪ねていくことで井上さんの態度が変化していく様子などが分かるシーンもあって心が温かくなるような番組だった。いい番組だからこそ、ほかの委員の方が言うように、もっと「クローズアップ現代+」などで深掘りしてもらえるとうれしく思う。例えば、「住民タクシー」に参加協力している住民たちは、全員60歳以上に見えたが、この「住民タクシー」の取り組みを持続可能にしていくには、何が必要なのか、

介護タクシーや行政、NPOとの共存、都市部と過疎地のニーズの違いなども含めて、 今後のわれわれの老後ともかかわってくるので、このような新しい試みの問題点など ももう少し深掘りしてほしい。

- 過疎地の高齢化問題解決の糸口を示してくれた番組だったと思う。公共交通の衰退や運転免許の返納で移動の自由を失うことがお年寄りにとってどれほど重要なことか、影響が大きいかについて知ることができた。そうした中、京丹後市の住民が利用している「住民タクシー」やお年寄りの声がけといった活動は、本当にすばらしい活動だと思う。また、ライドシェアシステムについては、過疎地に大変適したすぐれたシステムだと思う。これは過疎地の特例制度を活用した取り組みとのことだが、京丹後市で終わるのではなく、全国の過疎地に普及していけば高齢化問題の解決に大きく役立つのではないか。引きこもりがちなお年寄りを訪ねて、お茶会や卓球などの地域イベントに粘り強く誘っている小倉さんの姿をみて、お年寄りを支えていくには、辛抱強く寄り添っていく姿勢が大切だと感じた。安全・安心・安価な「住民タクシー」を維持するために、個人やNPOに過度な負担を強いることのないよう、交通事故の際の賠償責任などの法的整備を急ぐべきだと思う。
- 小倉さんの活動・考え方は、すばらしく、そちらに焦点に当ててもよいほど魅力的な人だと思った。「住民タクシー」は二種免許がなくても人を乗せることができる仕組みだと思うが、その説明があってもいいのではと感じた。また、雪や桜の映像があったが、どの程度の期間取材したのか、このNPO法人の「住民タクシー」は、どの程度の期間を要して立ち上がったのかも気になった。 1人暮らしの方へのインタビューで、「人と話すのが嫌なのですか?」という質問が誘導質問のように感じた。また、大下さん宅の電話の受話器が少し汚れていたが、映すときの配慮があってもいいのではないか。このように気になった点もあったが、全体を通してこのような活動はとても心に響くものがあり、大変いい番組だと思った。

#### (NHK側)

「住民タクシー」は、「目撃!にっぽん」の放送後、5月26日(金)放送のかんさい熱視線「希望を育む"つばさ"~京丹後 住民タクシー~」でも取り上げており、そちらでシステムについてもう少し詳しく説明している。このライドシェアシステムを開発した会社は、取材するのが非常に難しいのだが、担当ディレクターが関係者と以前取材で知り合い、よく知る仲だったということで今回の取材が実現した。ドライバーはほとんどボランティアで

やっているのに等しい制度であるため、ドライバー講習なども開いて安全運転に心がけているそうだ。やはり運用上、大変な面もある。例えば、ほとんどのドライバーが60代以上の方々なので、いずれ免許の返納が問題になる可能性がある。今回の番組では、業界のことよりも、「住民タクシー」を使っているお年寄りの方々が外に出るようになり、多少認知症が入った方も少しずつ元気になっていく様子を描く方向にした。「住民タクシー」自体の取り組みについては、報道できることがあれば、継続して取り上げていきたい。

## <放送番組一般について>

- 5月13日(日)のNHKスペシャル「巨大水中洞窟を潜る 絶景 オルダ "水の宇宙"」について。大変スリリングで探検気分と美しい映像を堪能することができた。 極寒の環境での水中洞窟の取材ということで、このような場所で取材された方の勇気に敬意を表したい。
- 圧巻の映像でおもしろかった。命の危険がある撮影だからこその緊迫感が画面を通して伝わってきた。狭いところを進んでいくシーンの迫力もすごく、あたかも一緒に進んでいるかのような気分になった。4 Kで撮影されたということなので、放送局にある大きな画面で番組鑑賞会などしてもらえると、迫力のある映像が楽しめてよいと思う。子どもたちに見せれば、この番組をきっかけに探検に興味を持つ子どもも出てくるのではないか。以前、テーマパークで3Dメガネをかけて楽しむアトラクションに乗ったが、この番組では、その体験と似た感覚を覚えて、映像の力はやはりすごいと思った。タイトルについては、そのままという印象を受けた。
- すごい世界で、映像がとてもすばらしく、この番組を見ることができてよかった。 番組の合間に出てきた岩塩でできたしま模様が非常に美しかった。日本にはほとんど ないような岩塩の発掘現場の情景というのももう少し見たかった。危険な場所での撮 影だったと思うが、これでもし事故が起きていたらどうしたのだろうとも思った。
- 先ほどタイトルについての発言があったが、例えば、もう少し比喩を使い、「絶景暗黒のオルダ 水の宇宙」としてもインパクトがあってよかったのではないか。映像はとても迫力があり、終始美しい風景が映されていたが、音楽も含めて少し怖く感じた。風景映像やCGをとても上手に使っており、見ていてあたかも自分も探検してい

るような感覚になった。

- 巨大水中洞窟というすごいところに行くのだなというのが最初の印象だった。番組の構成がとても上手だと思う。順番によく組み立てられていて、テレビ自体を批判的にみている人でも納得させられるいい番組だと思う。タイトルはそのままでいいかと思うが、番組の中で水中洞窟を"世界一美しい"と紹介していたが、世界一と言ってしまうと、他に1番が出てきたときに困るので、その表現はどうかと思う。
- 番組を制作するにあたり、準備に膨大な時間を費やされたのではと思う。映像も圧巻で美しく、水中洞窟の成り立ちも勉強になった。NHKの女性カメラマンの小出さんが、寒い中でも前向きな意欲的な話をしていてすごいと思った。見えない苦労が本当にあったと思う。4Kが実用放送になったら、ぜひ自宅で4Kで見たいような番組だ。貴重な映像を見せてくれて感謝している。
- 巨大水中洞窟を撮影された取材班に敬意を表したいと思う。透明度の高い洞窟を撮るということで、あえて厳寒の時期に行かれたと思うが、無事に帰ってきて、そこで撮影した映像を視聴者に届けるということは、本当に大変な仕事だと思う。いろいろな新しい世界を見せてもらえてうれしかった。また、"世界一美しい""神秘の空間""オルダ水中洞窟""4 K"といった文字がそれぞれ書体を変えているところも凝っている印象を受けたが、画面左上のマスコットの"巨大水中洞窟を潜る"の字体も硬い感じの書体で探検番組を連想させるような作りとなっており、冒頭から制作者側も楽しんで作っているなと感じた。映像は美しかったのはもちろんだが、撮影時間が限られているなかでのご苦労があったと思う。このあたりの話がもう少し知りたかった。後半部分、ダイバーの方のアクシデントのシーンでは、見ている私も手に汗握ったが、このシーンのために後半の冒険部分の印象が強くなってしまい、前半部分の水の宇宙の印象が薄れてしまったのが残念だった。前半に、苦労した冒険部分を持ってきて、後半に水の宇宙を持ってくるほうが水の宇宙が印象付けられてよかったのではと感じた。
- このような大型の海外ロケを大阪局で行っていたことにうれしさを感じた。厳しい 寒さと危険の中で、何度も打ち合わせをして、照らし出された「ギドロコスモス」の 風景は、本当に圧巻で息をのんだ。地元のダイバーや長年研究されてきた人たちも見 たことのない風景を撮ることができたのは、NHKの技術力があったからだと思う。 後半に出てきたダイバーのアクシデントについてもどきどきしながら見ていた。ただ、 そのダイバーの安否についてきちんと触れられることなく次のシーンにいってしま

ったのは、不親切な気がした。

○ 真っ暗な水中洞窟で撮影したとは思えないすばらしく鮮明な映像に驚き、それと同時にNHKの撮影技術の高さに大変感心した。取材班が1年間、訓練を重ねて命がけで撮った映像ということで、大変価値のある映像だと思う。命綱を使い、レスキュー隊も同行させたということだが、下手をすると命を失うかもしれない撮影によくぞ思い切ってNHKが取り組まれたと思う。洞窟内の撮影は、体温が低下してしまうため時間が限られるということだが、技術が進歩しているので、ロボットは使えないのだろうか。ロボットであれば、どんどん奥まで入っていけるし、人間の限界を超えられる映像を撮ることができるのではと思う。

# (NHK側)

小出カメラマンについては、彼女がこの番組の企画の発案者だ った。ロシア語を専攻していたことから、ロシアで一番有名でか つなかなか行けないような洞窟を撮影したいという強い意志でこ の番組に取り組んでいた。安全管理面について、ご心配のお声を いただいたが、最大限の注意を払ってこの番組に取り組んだ。潜 水という分野の中でも特に洞窟は最も過酷なため、潜水でも洞窟 を潜るための国際ライセンスを取得したうえで、今回のロシア洞 窟に臨んだ。そのうえで、レスキュー隊にも連絡を取って現地の ダイバーたちの情報もすべて仕入れるなど入念に準備をして取り 組んだ。息もつかせぬようにスリリングで、理屈ではなく生理的 に最後まで見てもらえるような番組を目指した。構成については、 水の宇宙の部分を後半にもってくるという構成も試してみたが、 いろいろな議論の中で、中盤に「ギドロコスモス」をおいたうえ で、未知の空間を目指していくという構成になった。また、危機 的状況に陥ったダイバーのその後についてだが、もう少し分かる ようなコメントを入れるべきだったかもしれない。潜水用のロボ ットは、現在開発中だ。この番組は、4 K映像で実際に見ていた だき、さらにバーチャルリアリティなどでも楽しめるような取り 組みを現在検討している。

○ 6月4日(日)のNHKスペシャル「私たちのこれから #子どもたちの未来」について。自分の将来に希望を持てない若者が日本に非常に多いという調査結果からスタートして、子どもの貧困についてスタジオで討議されており、このような問題の啓発

という視点からも非常にいい番組だった。

- 子どもの貧困対策をみんなで考える大変有意義な番組だった。日本では、自分の将来に希望を持てない若者の比率が、欧米はもとより韓国に比べても格段に高いという日本政府の調査結果に衝撃を受けた。司会の三宅アナウンサーが有識者やタレント、母子家庭の方や年金生活者などさまざまな立場の人から上手に意見を引き出していて感心した。また、インターネットやSNSの投稿を逐一取り上げていたのも視聴者の声を幅広く番組に反映させるという面で大変役立っていた。子どもの支援のための負担増や、教育についての考え方でもスタジオで意見が分かれていたことをみても、国民的な共通認識を持つことの難しさを感じた。番組の最後で、子どもは社会にとって宝だということをみんなが合意できるかに日本の未来がかかっているという三宅アナウンサーのことばが非常に印象的だった。
- 6月3日(土)のNHKスペシャル「祗園 女たちの物語〜お茶屋・8代目女将(おかみ)〜」は、見応えのある番組だった。8代目の女将・太田紀美さんの生き方にすごく感銘を受けた。これから自分たちがどう生きていくかを考えさせられた番組だった。ああいった77歳に自分もなれたらいいなと思った。
- 6月10日(土)のNHKスペシャル ニッポンの家族が非常事態!?「第1集『わが子がキレる本当のワケ』」と6月11日(日)のNHKスペシャル ニッポンの家族が非常事態!?「第2集『妻が夫にキレる本当のワケ』」について。脳科学がここまで進歩していることに改めて驚いたし、大変勉強になった。
- 6月7日(水)のクローズアップ現代+「2兆円↑アニメ産業 加速するブラック労働」について。NHKだからこそできる内容だと思った。アニメ業界は、今とても勢いがあり、国の施策としても"クールジャパン"の一つとして力を入れているが、労働環境がこれほどひどいと思わなかった。この問題を取り上げることで、現状が改善されていくといいと思う。伝統産業でも、職人が想像もしないような低い金額で商品が売られており、成り手が減って、産業自体が廃れてきているという話を聞いているので、継続的に利益を作りだすビジネス感覚が大切という話は、非常に考えさせられた。
- 6月20日(火)のサラメシ「シーズン7 第9回」について。東大阪にあるサッシ 工場で働くベトナム人技能実習生に焦点を当てていたが、「この会社潰れますよ」と いう実習生のことばをきっかけに社長がそれまでの考えを改めて経営方針を変更す

るという内容だった。これはくしくも日本の外国人労働者が、技能実習生などで支えられているという現状をプラスの面で浮彫りにしたと思う。外国人労働者の問題については、今後も積極的に取り上げていってほしい。

- 連続テレビ小説「ひよっこ」について。オープニングの桑田佳祐さんの音楽やCGが非常にすばらしい。また出演している役者も粒ぞろいですばらしい役者さんばかりだ。特に、白石加代子さんの存在感は抜群だ。全体的に作りもしっかりしており、安心して毎回見られている。タイトルがなぜ「ひよっこ」なのかについて知りたいと思った。
- ドラマ10「ツバキ文具店~鎌倉代書屋物語~」について。手紙はあまり書かなくなってきているが、もう一度手紙を見直したいと思った。自筆で書くよさを改めて感じた。
- 6月9日(金)のかんさい熱視線「ブラック保育園~受け皿急増のひずみ~」について。「かんさい熱視線」は非常にすばらしい番組だが、今回も期待にたがわずすばらしかった。ただ、ブラック保育園のようなことが起きないようチェック機能を強化するという面の報道だけでなく、それによって起きるひずみについても考慮した取材・報道をぜひ心掛けてほしいと思う。
- 5月17日(水)の「ならナビ」について。「17文字のにおい物語」で足の臭さを 川柳にした「足クサ川柳」の紹介がされていた。夕方の忙しい時間にコント混じりの 川柳が流れて、ほのぼのとした奈良らしいコーナーでうれしく思った。

また、6月2日(金)の「ならナビ」は、開局80年キャラバンで、天理駅前の「コフフン」という施設からの中継で、地元の方と和やかな雰囲気で施設が紹介されていた。奈良は古くからの歴史や文化が連綿と受け継がれているところなので、そのような奈良のよさを全国に向けても放送してもらえたらと思う。

○ 天気予報について。よく「近畿地方のほかでは、三重県が」と言っているが、われ われの世代で社会科を勉強した人にとっては、三重県は近畿だと思っている人がいる と思う。

> NHK 大阪放送局 番組審議会事務局

## 平成29年5月NHK近畿地方放送番組審議会

5月のNHK近畿地方放送番組審議会は、17日(水)、NHK大阪放送局において、 10人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、「平成28年度近畿地方向け放送番組の種別ごとの放送時間」について、報告があった。続いて、事前に視聴してもらったNHKスペシャル「奇跡のパンダファミリー〜愛と涙の子育て物語〜」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、6月の番組編成の説明が行われ、 会議を終了した。

# (出席委員)

委員長 西田 賢治 (大阪商工会議所 参与) 副委員長 小島多恵子 (公益財団法人サントリー文化財団 上席研究員) 委 員 浅野 秀剛 (あべのハルカス美術館 館長) 市田恭子 (デザイナー集団 Team coccori 事業代表) 片山九郎右衛門 (公益社団法人京都観世会 会長) 佐 野 純 子 (奈良インターカルチャー 代表) 眞 人 田辺 (園田学園女子大学名誉教授) 原 さだ (財団法人龍神村開発公社 専務理事) 山 﨑 弦 一 (日本労働組合総連合会大阪府連合会 会長) 山舗 恵子 (京都リビング新聞社 編集部長)

# (主な発言)

< NHKスペシャル「奇跡のパンダファミリー~愛と涙の子育て物語~」 (4月8日(土) 総合 後 9:00~9:49)について>

○ オープニングから、パンダの結浜(ゆいひん)のかわいらしい姿に癒やされた。ナレーションと音楽が番組の雰囲気に合っていた。番組の舞台となっていた白浜町のテーマパークは、世界トップクラスのパンダの繁殖実績を誇り、多い時で9頭のパンダを飼育していたこともある。それでも話題になることがあまりないので、このように番組で取り上げてもらえるのはうれしく感じる。ことし1月6日(金)の「かんさい熱視』で白浜のパンダを取り上げた時も感じたが、丁寧に取材されていて、映像も美

しくて貴重なものだった。パンダの母乳が緑色ということも今回の番組で初めて知ったが、全体を通して新たな知識を得ることが多い番組だった。1,000 日間の密着取材もすごいことだと思う。飼育員の仕事は本当に大変そうで、好きでないとできないことだと感じた。パンダに寄り添いながら、その生態の研究にあたっておられる飼育員たちの強い愛情を感じた。またその愛情を視聴者に伝えたいという、番組スタッフの気持ちも伝わってきた。パンダに子育てを行う能力を身につけさせて中国に返しているという話や、母性についての話など、生物の種を超えて見習わないといけないと思うような普遍的なテーマも織り込まれており、とてもよい番組だった。

- パンダは出産が難しく、授乳もうまくいかない場合が多い。育児のストレスで子どもを傷つけてしまう場合もあるという。生物として、生き延びる力の弱い種なのだと、改めて学ばせてもらった。そのような種が、人間の力を借りて、なんとか子孫を増やそうとしている。パンダの子育てにおいて、人の助けを最小限にすることで、母パンダの母性を引き出す方法を白浜の飼育員の方々が考え出し、その方法が中国にまで伝わっているというのは、大変な努力だと思う。番組タイトルが「愛と涙の子育て物語」ということだが、私自身も番組を見ながら何度か涙がこぼれるような場面があった。また番組の取材が、1,000 日という長期的な計画で進められたことに敬意を表したい。一方で、ひねくれた見方だが、パンダやコアラやコウノトリなど、かわいい動物の繁殖には人間の手厚い保護があるが、ほかの動物に対してはどうなのか。また、動物に対してあれだけ心血を注いで子育てを手伝う方々がいる一方で、自分の子どもに対して虐待やネグレクトを行う人もいる。人間の子どもに対しても、同じように手厚い保護ができるような社会になればよいなと、考えさせられた。
- タイトルの「愛と涙の子育て物語」というのが、パンダの愛と涙というより、飼育員の方々の愛と涙なのだなと思いながら番組を見た。3年にわたって取材をしていたということだが、とても盛りだくさんの内容でおもしろかった。パンダがあのような鳴き声だということを初めて知って驚いた。出産のシーンでは、こちらまで力んで応援してしまうような、興味深いドキュメンタリーだった。最初はほんわかした雰囲気の番組かと思って見ていたが、問題提起も多く、シリアスなドキュメンタリーのようにも感じた。番組を見終わった後、世界で注目される日本のきめ細かな飼育方法に誇らしい気持ちになった。パンダの赤ちゃんの肛門に炎症が起きてしまい、その治療のために母パンダと子パンダを引き離す場面があったが、どのくらいの時間引き離していたのか知りたくなった。一瞬なのか、それとも数日間なのかが不明瞭で、分かりづらかった。

- 外交面ではいろいろな課題があったとしても、パンダという希少動物の保護を通じ て、国家間でさまざまなつながりが生まれているということをこの番組を通じて知る ことができた。1,000 日という長期間にわたる取材は、NHKの体制だからこそでき ることだと思う。飼育場所の清潔感や、飼育員の方々の緊張感などが番組の映像から も感じられ、白浜でパンダがとても大事に扱われていることがよく分かった。野生動 物の赤ちゃんを人間が触ってしまうと、人間のにおいがついてしまうため、その動物 の親は育児を放棄してしまうと聞いたことがある。番組のなかで、飼育員の方々が頻 繁に赤ちゃんパンダを取り上げて、必要に応じてケアを行っている様子が描かれてい たが、各国間の情報交換を長い間積み重ねてきたことで、飼育方法についての正しい 情報がきちんと共有できているからこそ、パンダと人間が子育てにおいて共存できて いるのだろうと思った。人間に過保護に育てられたパンダは、成人しても繁殖意欲が 少なく、育児能力も低いと説明されていたが、人間社会にも似ているところがあるの ではないかと感じた。どこか悲哀も感じさせるナレーションは、人間の年齢に換算し て70歳以上になる父パンダのことばとしてはぴったりだったと思う。パンダを取り 上げたほかの多くの番組は、子育ての過程や結果を紹介するだけにとどまっているが、 この番組はその先に続く末来も見据えて制作されているように感じられて、大いに楽 しませてもらった。
- 初めてパンダが上野動物園にやってきた時のことを思い出しながら番組を見たが、当時はフラッシュ撮影禁止で、立ち止まってパンダを見るのも数秒程度しか許されていなかった。また、新聞紙面に赤ちゃんパンダの写真が掲載された時も、本当に小さな赤外線写真のような写真が1枚載っていただけだった。そのことを考えると、ここまで詳しくパンダの生態を撮影できたことに感心すると同時に、今回の取材は相当なご苦労があったのだろうと推察され、感慨深かった。長年パンダの飼育に携わることで飼育のノウハウが蓄積されていき、それが次の世代の飼育員の育成につながっていっていることが、ベテラン飼育員の熊川智子さんのことばや行動からもよく伝わってきた。パンダの子どもが初めておりから野外に出される時の映像は、人間の子どもの"公園デビュー"のようでほほえましかった。パンダは世界で2,000頭しかいない希少動物なのだから、白浜のように繁殖で実績をあげている場所にもっと多くのパンダを貸してくれてもよいのではないかとも思った。中国ロケをされていたが、中国でのパンダの飼育映像をもっと見たかった。
- 10年ほど前に中国の成都でパンダを見てきた。その頃は、成都がパンダの聖地だ と思っていたが、番組を見て白浜の方が世界に注目される先進的な飼育を行っている ことを知り、誇らしく感じた。飼育員の方々の努力と愛情に敬意を表したい。人間の

手で直接飼育するのではなく、自然本来のパンダの親子のあり方の中で子育てをサポ ートすることで、母パンダが母性を取り戻していくという話は、人間の社会生活の中 でも同じだと思った。自分も後輩の仕事に対していろいろなアドバイスをするが、つ いつい我慢できずに手出しして自分でやってしまったりすることがある。育てるとい う意味で、親子関係に限らず教えてもらうことがとても多い番組だった。番組に流れ る空気感も、母パンダの出産や子育て場面では緊迫した雰囲気になる一方で、父パン ダのシーンでは俳優の優しいナレーションでほのぼのした雰囲気になり、両極性のあ る演出がよかった。命の重みだけをずっと訴えられ続けると、見ている方は重たい気 持ちになってしまうので、ほのぼのとした演出があったことで気楽に見ることができ た。とてもよい工夫だったと思う。一方で、せっかく 1,000 日間という長期の密着取 材をうたっていたのだから、もっとそのことを前面に出して、時間の経過を分かりや すく明確に打ち立ててもらえたらなおよかったと思う。また、"世界が称賛"とか "1,000 日密着"などといったキャッチーなことばをタイトルに入れたら、もっと多 くの人に興味を持ってもらえたのではないかと思った。わたしの周囲でも、上野のパ ンダのことはみんなよく知っているが、白浜のパンダの飼育が世界的に評価されてい ることを知らない人が多かった。世界に賞賛されているということを入り口にして、 興味を持ってもらえたらよいと思った。

- 大変興味深い番組だった。白浜にパンダがいることは知っていたが、世界で最も繁殖に成功しているということは、この番組を見て初めて知った。飼育員の方々のなみなみならぬ努力に敬意を表したいとともに、もっとこのことをアピールしてもよいのではないかと思った。パンダと人間を一緒にすることはできないが、日本もいま少子化が深刻な社会問題になっている。子孫を残していくことをこのぐらい重要な課題としていかなくてはいけないのではとも感じだ。
- 白浜のパンダの繁殖は、飼育員が何人もついて手厚くケアしたことで実績を上げたのだということが分かった。ただ、集客力のあるパンダだから手厚い体制で飼育されているのであり、そうでない動物であれば、飼育員の数はもっと少ないのだろうと思った。母パンダが2頭の子どもを抱いているシーンには感動した。飼育員がかつて白浜で育てていたパンダの梅浜(めいひん)と中国で再会したときに、顔を見ただけですぐに梅浜だと分かったことに感心した。パンダに関係する飼育員が15人いると紹介していたが、おそらくパンダ専属の飼育員はもっと少ないはずなので、15人の飼育員の関わり方や役割分担についてもう少し詳しい説明があったら分かりやすかったと思う。

- かつてNHKで放送していた「プロジェクトX 挑戦者たち」のようなドキュメン タリーだと思った。台風の影響で下水が逆流したり、母パンダの良浜(らうひん)の 破水が始まってからもなかなか出産できなかったり、という問題に対して、飼育員の 方々がどのように決断して行動したのか、とても興味深く見た。動物が本来持ってい る野生の母性を大切にする白浜方式については、なるほどと感心した。白浜方式が世 界的にも注目されて、中国でも取り入れられていることや、永明(えいめい)の子ど もたちが中国に戻り「浜家」と呼ばれるまでにその数を増やしていることなど、日本 人、そして関西人として誇りに感じた。飼育員の方々の涙ぐましい努力や、真剣なま なざしに感動した。また、自分の子どもと離された時の良浜の悲痛な鳴き声や、うな だれてさみしそうな姿には、涙がこぼれそうになった。番組の後半で飼育員の熊川さ んが、これまで白浜での繁殖活動に貢献してくれた永明が、これからの時間を幸せに 過ごせるようにしていくことが飼育員たちの使命だと話していたが、そのことばにも とても感動した。2014年に双子のパンダが生まれた頃から取材をはじめたというこ とで、1,000 日間にわたる密着と紹介していたのだと思うが、昨年の良浜の出産を中 心に構成された番組になっていたので、時間軸がわかりづらく、1,000日間の密着取 材という趣旨が伝わりにくかった。
- 1,000 日間の密着取材ならではの貴重な映像がふんだんに使われていて、白浜のパンダ飼育の集大成にふさわしい内容だった。辛抱強く母パンダに授乳の習慣をつけさせたり、自然界ではどちらか1頭しか育たたない双子パンダを2頭とも飼育できるよう母パンダをサポートしたりするなど、世界屈指の繁殖率を誇る白浜のパンダ飼育の成功の裏には、飼育員の方々の献身的な世話があることがよくわかった。番組を見ているとついついパンダに目が行きがちだが、本当は、絶滅が危惧されるパンダの繁殖に、寝食を忘れて愛情を持って取り組む飼育員たちの1,000 日間の活動を記録したドキュメンタリーなのだと思う。ただ、この1,000 日間の密着の過程は、これまでいくつかの別番組でも適宜放送されてきたものなので、編集の工夫がもう少しあれば映像の重複感を少なくできたのではないかと思った。繁殖のためだけに一生をささげる永明が少しかわいそうな気もしたが、与えられた役割を懸命に果たそうとする永明の気持ちを、ナレーションが上手に代弁していたように感じた。
- とても心洗われる貴重な映像がたくさんあり、とても感動的な内容だった。母性を 大切にすることなど、人間へも通じるところが表現されており、勉強になることばか りだった。飼育員の方々のたゆまぬ努力に感動した。永明のせりふとしてナレーショ ンを入れることで、とても見やすくなっていた。

## (NHK側)

和歌山放送局は、「防災」に力を入れることと合わせて、白浜のパンダを取り上げることにも力を注いでいる。地域放送局は地域の応援団であるべきだと考えるが、パンダを見るために多くの人が白浜を訪ねてくるようになってきており、全国に注目されるよいきっかけになったのではないかと思う。今回の番組は、和歌山放送局と舞台となったテーマパークが関係性を大切にし続けてきたことから実現することができた番組だ。

### (NHK側)

最初はかわいらしいパンダを紹介するつもりで取材を始めたが、 だんだんと飼育員の方々の活動のほうに関心が移っていった。治 療のために母パンダから子パンダを引き離していたのは30分程 度の時間だったが、その程度引き離しただけでも母パンダは悲痛 な声を上げてしまう。番組で紹介した15人の飼育員は、全員が パンダ専属の飼育員というわけではない。出産の時は24時間体 制で見守らなければならないため、ほかの動物の飼育を行ってい る方々が応援として来ていた。中国の映像をもっと見たかったと いう意見については、現在の中国のパンダ飼育は白浜の方式と変 わらなくなってきており、飼育現場だけ見ると白浜の映像とあま り変わらないため、あれ以上の映像は使わなかった。取材を通じ てパンダの自然繁殖の難しさを痛感したが、現在、頭数を増やす 取り組みが世界的に進んでいて、一時は千数百頭まで減った数が、 現在は 2,000 頭を超えてきている。中国では、今度は野生に戻す プロジェクトが始まっている。いま白浜にいる、人に慣れ親しん だパンダたちを野生に返すことはできないが、今後、白浜のパン ダの頭数を増やしていくことで、永明の孫の世代のパンダたちを 野生に返す挑戦ができる可能性がある。世界的にもパンダに対す る取り組みがどうなっていくか、引き続き注目していきたい。

# <放送番組一般について>

○ 4月21日(金)のかんさい熱視線「日本に来てくれますか?~ "働く外国人"新時代~」について。外国人労働者の受け入れの理想と現実が随分違うことが分かった。 労働条件の改善について、何が問題となっているのか、もう少し踏み込んで提起して もらえると、今後のためになるのではないかと思った。住み込み外国人労働者が暮らす部屋の環境の悪さなどが紹介されていたが、もっとほかにも理由があるのだと思う。高度人材の呼び込みについては、国際交流基金などが行っているフェローシッププログラムについても取材をしてもらえたら、より多角的な視点から見えてくるものもあったのではないかと思う。日本国内でのフェローシップを通じ、自分の専門外の職種に携わることでさまざまな分野に興味を持ってもらうきっかけになっていることや、帰国後にそれを広めてもらうことでさらなる関心を引いているということも知られているので、そういった取り組みについても紹介してもらえるとよかったと思う。

- 海外の大学で行われた就職説明会で、日本での就職に興味を持った参加者が 100 人中9人だったことに驚いた。和歌山の介護施設の取り組みが紹介されていたが、企 業努力だけでなく、地域全体で外国人労働者を受け入れやすくしていく必要があると いう提言は興味深かった。その取り組みを実践している具体例を、ぜひ次は紹介して もらいたい。
- 和歌山の介護施設の取材で、誰でもよいから雇い入れて労働力不足を短期的に取り 繕うのではなく、長期的な人材の育成が大切という視点で、留学生に破格の奨学金を 給付しながら施設で働いてもらい、学校を卒業後5年間働けば奨学金の返済を免除す るという取り組みを紹介していた。大変すばらしい取り組みであり、これが一つのモ デルケースになるのではないかと思うので、ぜひ継続して取材をお願いしたい。技能 実習生の受け入れ団体におけるさまざまな不正行為は、安い人件費で雇用したいとい う発想が先に立ってしまうケースが多いことが問題の根源にあると思う。この事実が SNSなどで広く知れ渡ってしまい、日本企業に人気がない大きな要因になっている ことが、この番組でも明らかになったのではないかと思う。労働組合が行っている外 国人労働者からの電話相談には、労働問題以外にも、在留資格や社会保障の問題など、 さまざまな相談が寄せられている。これらの問題に対しても、社会的に対応を整備し ていかなければならない。NHKでもぜひこれらの問題について継続して取材をして いってもらいたい。将来的には、日本の活性化やダイバーシティーという観点からも、 外国人と一緒に仕事を行う社会を作っていかなければならないが、安価な労働力を求 めるだけの場当たり的な対応ではなく、人権問題、働き方改革などを含めて、新しい 日本の社会システムをどのように作っていくのかを考えていかなければならない。引 き続き、さまざまな視点からの取材に基づく番組制作をしてもらえたらありがたい。 また、外国人労働者の問題だけでなく、日本人の不安定雇用をなくすことも非常に重 要なので、その観点も大切にしてもらいたい。

- 番組の最初に、日本で働く外国人を「技能実習生」「留学生」「高度人材」の3つに 分けて説明していたのは分かりやすかった。冒頭で紹介されていたお好み焼きチェー ン店で働いている外国人の方々はどの分類に入るのか気になった。また、それぞれの 労働環境はかなり異なるはずなので、番組で提起された問題についても、できればそ れぞれの場合に分けて取材をして説明してくれると分かりやすかったと思う。海外の 大学の説明会でのアンケート結果についても、高度人材を担える人たちの回答であっ て、技能実習生や留学生では回答が異なる気もする。また、日本で働くことに魅力を 感じない理由として、長時間労働とかキャリア形成における評価のことなどが挙げら れていたが、ややあいまいな気もするので、もう少し掘り下げてほしかった。将来ど この国で働きたいと思うかを尋ねる、番組によるベトナムでの街頭アンケートで、日 本・中国・韓国・英米と分けていたが、英米をひとくりにしてしまうことに違和感を 覚えた。介護施設の現場を取材して、問題解決の方向性を提示していたのはとてもよ かった。介護現場が人手不足なことの理由に、低賃金で重労働という点が挙げられる が、それに加えて、年齢が上がっても賃金が上がっていかないということも問題だ。 これは非正規雇用の問題とも重なる。単純労働に就労する労働力の多くを移民が担う 欧米と日本との構造上の違いも踏まえたうえで、問題を掘り下げてほしかった。
- 番組タイトルの「日本に来てくれますか?」という表現が一見すると気弱に感じられたが、番組の最後で、いまの日本の状況を外国人の方々にもっと知ってもらわなくてはいけないということを強く言っていたので、そういった趣旨を反映した積極的な意味合いでのタイトルなのだろうと改めて思い至った。
- 冒頭のお好み焼きチェーン店のシーンから、おもしろそうだなと引き込まれて見た。 いまの社会動向を踏まえた時宜を得たテーマの番組だったと思う。日本企業で働くこ とに魅力を感じていない方が非常に多いことを知り、驚くとともに残念に思った。一 方で、日本で働く外国人が、この5年間で1.6倍に増え、去年100万人を超えた ことにも驚いた。和歌山の介護施設の取り組み事例は知らなかったが、担い手が不足 しているさまざまな業種のことなど、いろいろなことを考えさせられる番組だった。 和歌山の施設の取り組みについては、ぜひ継続して取材をしてもらいたい。
- 驚くべきデータがいろいろと紹介されていた。和歌山の介護施設の事例の紹介の中で、人の教育が長い目で見れば大切ということばがあったが、その考え方は日本人がここ数十年の間に忘れてしまっていたものだと思う。一世代前には、終身雇用制度を含めて、社会や会社が人材を教育していくのが当たり前だったが、ここ数十年はそういう考え方がなくなっていると思うので、この問題は日本の縮図のように感じた。

- 「日本に来てくれますか?」というタイトルを見た時、「来てくれないよ」と思っ たのが最初の率直な印象だった。外国から労働力を呼び込まないと事業が成り立たな いという現実があるなかで、誰でもよいからと人手不足を取り繕おうとしている。安 い賃金で働いてもらうのが目的ということが、透けて見えてしまっている。そのため 高い賃金を得ることができる資格は取得させない。介護現場でも、資格を取れば高度 人材として長期滞在と高収入が可能になるが、そのための日本語の試験が、外国人に とってどれだけ難しいかを考えなければならない。昔と違って、現在はかなりの人数 が技能実習生や留学生として日本に来ているが、この問題自体は30年前から何も変 わっていない。ドイツやフランスなどは、この問題をクリアにして、かなりの外国人 労働力を受け入れてきた。ただ、その次の段階の問題として、テロ行為の勃発などの 新しい問題が生まれていることも事実ではある。一方日本はまだ最初の段階にすら行 けていないことを、番組を見て痛感した。一番の問題は、日本も世界の中の一部であ るということに気づいていない人が多いことだと思う。今の日本社会が世界から見る とこういう状況にあるということは、この国の中でずっと生活してきた人には驚きだ ったと思うが、今回の番組のように、この現実をもっと日本社会にぶつけていかけれ ばならない。国内における外国人労働者の住環境などは、だいぶ改善されてきてはい るが、今も流れてしまっている悪評を払拭(ふっしょく) するには相当な時間がかか ると思う。だからこそ、日本人全体がこの問題をもっと真剣に考えて、国を挙げて抜 本的な改革を行わなければならない。また、日本の社会では、仕事にいちずになって 働くことばかりが評価されて、プライベートの部分はないがしろにされている。外国 から見たら、日本の労働はプレッシャーが大き過ぎると感じる部分があると思うので、 日本人の生き方自体も考え直さなければならない。また、ベトナムなどの外国と比べ て、日本では夢を持てない若者が増えていることも考えていかなければならない問題 だと、番組を見て痛感した。
- 外国人労働者や規制緩和の話は漠然と知っていたが、番組を通じて、いろいろなことを新たに知ることができ、考えさせられた。例えば、「きつい」「汚い」「賃金が安い」といった労働ゆえに日本人がやらなくなったような仕事を外国人労働者に頼ろうとするのは、根本的な解決策としては間違っていると思った。その労働環境を改善して、日本人も働くようにしつつ、外国人労働者にも参入してもらう形にしなければならない。いわゆる"汚れ仕事"を外国人に押しつけるのは、嫌な国だと思う。また、技能実習生は5年という期限付きの滞在であるということ自体、日本の産業や高齢者ケアを頑張って担ってくれている外国人を、将来的に定住者として日本に受け入れる 覚悟も準備もなく、使い捨てのように彼らを扱っているようで非常におかしいでのは

ないかと思った。高度人材ほど、日本で働きたがらないという事実がとてもショックで、日本人はその事実を反省すべきとも思った。このようにいろいろと考えさせられる、見応えのある番組だった。全体的に深刻な問題をはらんだ事実を追いかける番組だったが、最後に紹介された和歌山の介護施設の取り組みは、非常に明るい希望を感じさせてくれるもので、番組の終わり方としてよかった。小さな企業が始めたことではあるが、今後、行政がその取り組みを応援したりする制度を作ることで、日本が変わっていけばよいと思った。一方で、いろいろな問題を盛り込み過ぎている感じもして、この番組を見ただけでは消化しきれない、自分で考えざるをえない部分もあった。現代的でかつ、非常に深いテーマだと思うので、ぜひこの問題をもっと深掘りした番組も見たいと思った。

アジアの若者たちが今の日本社会や企業をどのように見ているか、端的に表した番 組だった。留学生を対象にした国別魅力度調査で、日本が52位と、中国や韓国のは るか下におり、親日的と言われるベトナムでさえも女子学生などは日本には来たくな いと言っていたが、私には当然の結果に思われた。日本語学校の校長先生が、学生の ハイレベル層がこの先ますます日本に行く必要を感じなくなっていくことを懸念し ていたが、アジアの若者たちの中で日本や日本企業の魅力度は、以前よりも低下して いると思う。日本の大学を卒業するためには、日本語学校も含めて5年かかるが、欧 米では短いと3年で卒業できる。しかも企業での評価は、欧米大学出身者の方が高い ということを、東南アジアの留学生から以前聞いたことがある。昔は高度経済成長の なか、経済大国日本への羨望があり、日本で働きたいという留学生もそれなりにいた と思うが、経済の低成長が続く中で、日本が本当に高度な人材を引きつけるためには、 長時間労働やあいまいな人事評価、年功序列や流動性に乏しい労働市場を抜本的に改 革するような取り組みをしないと無理だと思う。人手不足だからといって、日本の若 者も敬遠するような分野に外国人を雇うというのは間違っている。和歌山の介護施設 の取り組みはたいしたもので、キャリアアップを目指して、高度人材の資格も取得さ せるという取り組みはよいと思う。そのようなことが難しい分野では、ロボットの導 入を本格的に検討すべきではないかと思った。番組を見ていて、高度人材とそれ以外 では、企業が求めるものが違うと感じたので、その点ははっきりと区別して番組が取 り上げるべきだったと思った。外国人労働者を採用する企業の思いはそれぞれだと思 うが、こういった番組を企業経営者にしっかり見てほしいと思う。

## (NHK側)

関西とアジアはとても近い関係性にあるので、今後もこのテーマをさらに追い続けていきたいと考えている。

- 大河ドラマ「おんな城主 直虎」について。以前、「軍師官兵衛」や「真田丸」について、歴史的な事実を踏まえつつ、正確な史実がきちんと分かっていない部分を大胆に創作しているところがおもしろいとお伝えしたことがある。「おんな城主 直虎」もその意味でとてもおもしろい。その一番の典型は、井伊直虎が男性か女性か分かっていないところを、大胆に女性だったとしているところだが、史実の分からない部分をドラマとして描くうえでは、こういった取り上げ方があってもよいと思う。また、木綿の栽培が日本人の生活や経済を変えていく様子もよく描かれていたし、これまでは庶民の側から描かれることの多かった徳政令についても、それを発令する領主の側の苦悩が上手に描かれていた。鉄砲が日本に伝来したあと、国産の鉄砲を製造するにあたり、日本にねじがなかったことが、その製造の障壁になったことなどもうまく描かれていて、とてもおもしろい。
- 4月29日(土)のNHKスペシャル「私たちと"象徴天皇"~政府の有識者会議"最終報告"を受けて~」は、制作者の気概を感じさせる番組で興味深く見た。出演者のきたんのない意見は、非常に参考になった。象徴天皇のあり方についてはまだまだ議論があるので、NHKで今後も引き続き取り上げていってほしい。今回の番組では女系天皇についての話にあまり触れていなかったが、女性天皇の子どもは天皇になれないのはなぜかなど、根本的な部分の説明が省略されていたように思う。また旧宮家のことについても、詳しく知らない若い人も多いのではないかと思うので、そのあたりについてもきちんと取り上げて、国民に考えてもらうきっかけとなるよう望んでいる。
- 5月10日(水)のクローズアップ現代+「相次ぐ "墓トラブル" 死の準備の落とし穴」について。生前に墓や葬儀を準備しておく "終活"がブームになる中、墓をあらかじめ用意していても、その墓に入れない事態となるようなトラブルが相次いでいるという話だったが、ひと事ではない問題として関心を持って番組を見た。終活の悩みは人それぞれで異なる部分もあるが、NHKには取材や番組制作を通じてのさまざまな情報の蓄積があるのだから、将来はオンデマンドなどで、それぞれに合った解決策を知ることができるような仕組みが作られたらよいと思う。

熊本地震の発災から1年という節目に合わせて、さまざまな関連番組が放送されていたので、そのうちのいくつかの番組を見た。当時の甚大な被害状況を踏まえれば、節目となるタイミングで復興に向けた動きや課題を分厚く取り上げることは当然であるし、「熊本城の修復」という、復興の大きなシンボルとなるような動きもある中で、熊本地震を多角的に取り上げることは理解できる。ただ一方で、熊本地震から半年後の昨年10月には、鳥取県中部で最大震度6弱の地震も発生している。

被害の大きさに関わらず、こういった災害のことにも触れる配慮がほしかった。

- 5月9日(火)の人生デザイン U-29「ボートレーサー」について。今回の主人公は、28歳の滋賀県のボートレーサーの女性だった。スター選手ではなく、レースではほとんどが最下位という、なかなか結果が出せない選手なのだが、番組を見ていて彼女の人柄にどんどん引き込まれていった。レースで負けても、うまくいかなくても、ニコッと笑って「頑張ります」と話す姿がとてもかわいらしく、見入ってしまった。また、規律正しいボートレースの世界で、礼儀作法やあいさつをきちんとしている人たちを見て、とてもさわやかな気持ちになった。主人公の女性は、テレビカメラの取材の前でも自然体でリラックスしていて、彼女の人となりがすごくいきいきと伝わってきたので、どんな方が取材をしてその素直な感じを引き出したのか知りたくなった。
- 4月30日(日)のルソンの壺~4月号~「"伝統"企業の挑戦!~ "こだわり"から の華麗な変身~」について。大変おもしろい番組だった。女性の視点を取り入れた おしゃれな突っ張り棒を企画して成功した大阪の会社や、伝統的な和柄や幅の常識 を捨てることで海外展開に成功した京織物の老舗、独自の製品開発に成功して下請 けから脱却した京都の寝具会社が紹介されていた。短い時間のなかで、それぞれの 企業の取り組みが簡潔に分かりやすく紹介されていた。突っ張り棒を製作している 大阪の会社については、3代目の社長に就任した女性社長が、最初は男性の社員や 職人に反対されながらも、粘り強い取り組みにより、女性の視点を盛り込んだ商品 開発を成功させるエピソードが紹介されていた。この女性社長は、時短勤務制度を 導入して優秀な女性デザイナーを雇うなど、女性が働きやすい職場環境を整備する ことで、女性の視点を盛り込んだ商品開発を行える環境を作っていった人だが、せ っかくならそういった取り組みにも焦点を当ててもらえると、なおよかったと思う。 4月最終週の「ニュース630 京いちにち」で、京都の政治、経済、文化を代 表する4人の方々へのインタビューを放送していた。京都国際マンガミュージアム の新館長に就任した荒俣宏さん、京都大学総長の山極壽一さん、日銀京都支店支店 長の植木修康さん、京都府知事の山田啓二さんへのインタビューだった。荒俣さん の時はミュージアムの中を巡ったり、山極さんの時は研究されているゴリラの現地 調査の画像があったり、植木さんの時は京都の製造業や観光ビジネスについての解 説画像があったりして、それぞれの回で演出の工夫がなされていておもしろかった 一方で、知事の時だけは同じ部屋のなかで話をしているだけだった。インタビュー 内容はおもしろかっただけに、少し残念だった。

○ 「ならナビ」の中で放送されているコーナー企画「西山教授の仏教よもやま話」と「岡本教授の大和まだある記」について。これらのコーナーで取り上げられている話題やそれぞれの教授の解説は、奈良県内の人たちだけでなく、全国の人々にとっても、共感したり気づかされたりすることが多いものではないかと思う。ぜひ奈良県だけでなく、関西地域、そして全国に向けて放送してもらえたらうれしい。

4月26日(水)の「ならナビ」のなかで、大和郡山市にある番条地域のことが取り上げられていた。番条地域ではすべての家が、それぞれ小さなお大師さんの座像をお守りしていて、4月21日の弘法大師の命日には、その像を門先に出して、一般の方々に集落内で四国八十八か所巡りをしてもらう風習が残っているそうだ。私はこのことをまったく知らなかった。奈良県にこういう地域が残っていることを知り、とても感慨深かった。地域放送局は地域の応援団であることを、この番組を見ていると強く感じる。奈良は地域から全国に向けて発信できる素材がとても多いところなので、これからもさまざまな番組を通して奈良の魅力が届けられていくことを楽しみにしている。

# (NHK側)

さまざまな番組についてのご意見、ご要望については、これからの番組作りに生かしていきたい。現在、NHKでは放送だけでなく、インターネットを利用して、どのように情報を伝えていくべきか、考えながら取り組んでいる。すでに、大災害が起きたときなどに、放送をそのままインターネットに流して、多くの人に情報を入手してもらう取り組みや、番組の補完情報として、放送とは少し違う角度から情報を付与して伝える取り組みなどを、放送法に基づいて、放送を補完する業務と位置づけて実施している。これからの社会の中で、公共放送であるNHKがどのような役割をどのように果たしていけばよいのか、本日みなさんからいた

だいたご意見ご要望も参考にしながら、視聴者・国民のみなさん

と一緒に多角的に考えていきたい。

NHK 大阪放送局 番組審議会事務局

## 平成29年4月NHK近畿地方放送番組審議会

4月のNHK近畿地方放送番組審議会は、19日(水)、NHK大阪放送局において、 10人の委員が出席して開かれた。会議では、事前に視聴してもらった、「アオゾラカット~大阪発地域ドラマ~」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、5月の番組編成の説明が行われ、 会議を終了した。

## (出席委員)

委員長 西田 賢治 (大阪商工会議所 参与) 副委員長 小島多恵子 (公益財団法人サントリー文化財団 上席研究員) 委 員 浅野 秀剛 (あべのハルカス美術館 館長) 片山九郎右衛門 (公益社団法人京都観世会 会長) 小林祐梨子 (スポーツコメンテーター) 佐 野 (奈良インターカルチャー 代表) 純 子 田辺 眞 人 (園田学園女子大学名誉教授) 原 さだ (財団法人龍神村開発公社 専務理事) (日本労働組合総連合会大阪府連合会 会長) 山崎 弦 一 (京都リビング新聞社 編集部長) 山舗 恵 子

#### (主な発言)

<「アオゾラカット~大阪発地域ドラマ~」

(3月15日(水) BSP 後 10:00~10:59)について>

○ ドラマを見て西成のイメージが大きく変わった。人情味のある西成の街が表現できているヒューマンコメディーだと感じた。SNSの口コミでたくさんの外国人客がお店に押し寄せるシーンや、借金の返済を促すために銀行員がいろいろなところに突如現れる設定など、少しついていけないところもあったが、随所にクスッと笑えるところがあり、最後は感動する部分もあった。何より主人公の父親である吾郎のキャラクターが個性的で面白く、演じている吉田鋼太郎さんもこの役にとても合っていた。林造都さんや川栄李奈さんなどの若い役者を起用していることで、若年層でも楽しめるドラマになっていてよかった。西成ならではの個性と人情味を感じさせるキャラクターが随所に登場するところも興味深く、ドラマの舞台である西成の雰囲気をうまく表

現できていたのではないかと思う。

- 最初は話が分かりにくいところもあったが、だんだんと西成の地域の雰囲気がうまく表現されていき、人情味あふれる大阪のドラマだと感じた。吉田鋼太郎さんの演技は幅が広く、関西が舞台となるストーリーに合った好演だった。ことばの面でも、「不義理」ということばのように、セリフの中で方言がきちんと表現されていたのもとてもよかった。ただ、「息子のせいで」というセリフの「せいで」のイントネーションが気になった。またストーリーの展開について、母方の祖母と一度も会ったことがなかったという点や、それまで廃れていた美容院に大勢の外国人客が突然来だして、美容院が急に持ち直すという点、主人公が幼い子どもでもないのに、母親が家を出て行った理由を「自分の浮気のせいだ」として、父親がずっとうその説明をしていた点などに違和感を持った。
- どんな理由にせよ、母親が子どもを置いて家を出ることには違和感を覚えた。また、 美容院の資金繰りが苦しいのに、かわいいアルバイトを雇っていたり、主人公のカット技術の評判がSNSで一夜で広がったりするのに不自然さを感じ、阪神タイガース の金本監督のそっくりさんは必要だったのかなどを突っ込みながら見ていた。しかし、 全体的には大阪らしく人情あり、笑いありのドラマでおもしろかった。生まれ育った 町のよさを感じながら、親子が屋上の青空の下で地元の人たちの髪をカットするラストシーンも非常に印象的でよかった。
- アルバイト店員の遙が、人の気持ちを明確にことばに置き換えるところがおもしろかった。このドラマは、関西でしかできないドラマだと思う。先ほどからいくつか不自然なシーンについての指摘もあったが、不自然なところも不自然なりに味わいとなり、それが喜劇の一つの要素となって、全体を通してクスッと笑えるドラマになっていたと思う。また、パリまで行って技術を学び、その時代のファッションの最先端で成功しかけていた若者が、西成の人々の気持ちの温かさに触れることを通じて、金銭以外のもっと大事なものを見つけるというストーリーに感動した。このドラマのポスターで使われているすがすがしいブルーの色が、ドラマで描かれている気持ちのよいすがすがしさを表していたと思う。
- 最後に出てきた母親の形見のはさみのシーンは胸に響くものがあり、非常に人間味 あふれたいいドラマだった。ただ、やはりストーリーにとっぴな飛躍があるのが気に なった。また、主人公と祖母とが葬式で初めて出会うシーンにも違和感があった。一 方で、アルバイト店員の遙が、ドラマ全体を根底の部分で支える役割になっていて、

とてもよかった。ちなみに、主人公役の林遣都さんは「精霊の守り人」シリーズのシュガ役も演じているが、作品によってずいぶんと違うキャラクターになるものだと感心した。

- 1話完結のドラマの中に大阪のいろいろな要素が詰まっていておもしろかった。人情と笑いだけでなく、外国人観光客が集っている簡易宿泊所の中の様子を見ることができるなど、今の大阪への発見もあった。SNSの拡散で外国人客がお店に押しかけるという演出はやや大げさだと思ったが、ドラマなのでそれはそれでいいのかとも思った。主人公が手がけた遙のヘアスタイルがとてもかわいく、ドラマの設定どおり"パリ帰りのスタイリストの作品"という感じで好感が持てた。全体を通して力強く何かを訴えるという内容ではなかったが、気持ちのよい終わり方で、とてもさわやかな気持ちになれたドラマだった。
- 大変おもしろかった。大阪らしいギャグがあり、今話題のSNSやインバウンドなどの話も詰め込めるだけ詰め込んだドラマだと感じた。まさに、笑って泣けるヒューマンコメディーだった。散髪屋や美容院は後継ぎ問題を抱えているところが実際に多くある中で、チェーン店やフランチャイズ店に勧誘されるというストーリーは結構現実味があると思った。ただ、このドラマを関東の人が見たときにどういう感想を持つのか聞いてみたいと思った。関西らしさ、大阪らしさをどういうところに求めていくのかについて、少し考えさせられたドラマだった。
- ドラマは人により好みが異なるが、私は大阪のドラマは奇想天外でおもしろいと思っている。そのため、このドラマも最後までおもしろく見ることができ、それなりに楽しめたが、もう少しリアリティーがあるほうがよかった。例えば奇想天外だった主人公のカット技術が、ある段階から急にそれなりにバランスのよいものになったことや、SNSの拡散で一夜にして客が大勢来るようになったのは不自然だった。客と話すのが苦手だった主人公が瞬く間にうまくなっていたことや、主人公の父親が黙ってレジのお金を持ち出すという演出にも違和感を覚えた。主人公の母親が入院した経緯を父親が息子に黙っていたことも不自然だが、この前提がないとドラマの根底が崩れてしまうので、いたしかたない設定だったのだろうとは思った。
- 大阪が舞台のドラマや映画を見ていると、演者の中に必ず標準語なまりの大阪弁を話す人がいるが、このドラマは出演者全員が自然な大阪弁もしくは関西弁を話していて、非常に気持ちよく見ることができた。大阪のボケとツッコミ、いわゆる"コテコテ"の阪神ファンなど、非常にありがちなネタが出てきたが、実際大阪にはこのよう

な人がたくさんいるので全く違和感がなかった。東京の友人から、大阪の人はみんな 漫才師みたいだと言われたことがあるが、実際に冗談ばかり言っている人や、せっか く突っ込んでいるのにどうしてボケてくれないのかと怒る人など、ドラマに出てきた キャラクターに近い人たちが現実にもいるなと、笑いながら見ることができた。コメ ディーだと思って見ていたので、多少の無理やストーリーの飛躍は笑って許してしま えた。役者も非常に演技がうまく、キャラクターの設定もとてもおもしろくてよかっ た。父親の吾郎が、店の客や地域の人と非常に密度の濃いコミュニケーションをとっ ていて、大阪に実際によくいるような、ちゃらんぽらんな"おもろいおっちゃん"と いう雰囲気がうまく表現されていた。一方でその明るさの裏では、冗談で紛らわさな いとやっていられないくらい重くてつらい悲しい現実を背負っているということも 描き出されていて、明るさと深い悲しみとがうまく描かれているように感じた。最後 に、青空の下で仲直りした父と息子が仲よく地元の人たちの髪をカットしながら、息 子の翔太が「ここが俺のパリや」と言い切るシーンもとてもかっこよかった。見終わ ったあとに、母方の祖母が真実を明かさなければ、おそらく吾郎は最後まで翔太に自 分から真実は明かさずに、正面から息子と向き合うこともしなかったのではとも思っ たが、そういう意気地なしであかんたれな男も愛して許してしまうところも大阪らし いドラマだった。これだけの自然な方言を話せるいい役者を集められるのは大阪局制 作のドラマならではであり、大阪人らしい人情味あふれる非常にいいドラマだったと 思う。

□ 最初に主人公が西成に降り立つシーンで、あべのハルカスやたくさんの外国人が集まるツーリストインフォメーションが映っていたが、変貌を遂げた西成の街の様子が大変印象的だった。かつては日本最大の簡易宿泊街である釜ヶ崎で、幾度となく暴動が起きていたところという印象が強い街だ。今でもいろいろな課題を抱えているが、一方で、もともと地下鉄やJR、南海の駅が集中していてアクセスが非常によいため、かつての労働者向けの簡易宿泊施設が外国人のバックパッカー向けの施設に変わってきていることも功を奏して、インバウンドが急増している。表通りをみると本当に変わったという印象を受けるが、今でも長らく住んでいる方がおられて人情味は色濃く残っている地域でもある。そんな西成の地域特性を生かして、考え方の違いやコミュニケーション不足による親子間の対立、その確執がなくなるまでをコメディータッチで描くことで、決して重苦しくなく気軽に見ることができるドラマに仕上がっていたと思う。コミュニケーションの苦手な若者役を演じた林遺都さん、人間味にあふれるけれどもダメおやじを演じた吉田鋼太郎さんともに、持ち味を発揮したいい演技をしていた。ただ、息子が母親に捨てられたと思わないように、母親が出て行ったのは父親の浮気のせいだとした設定は無理があるかなと思った。いずれにしても、「アオ

ゾラカット」というタイトル通り、このドラマが西成のイメージアップにつながるといいなと思う。

○ 不器用すぎる父子、冒頭の少々過激かと思われる親子げんかのシーンは鬼気迫る迫力だった。滋賀出身の林遣都さんをひいき目に見ていることは否定しないが、よい俳優だと思う。存在感ある吉田鋼太郎さんを始め、個性豊かな地域の方々とも調和していた。おじさんたちを屋上でパリの最新のヘアスタイスに変身させるシーンは楽しく印象的だった。大阪発となると笑いの期待があるが、最後の阪神タイガースの金本監督のそっくりさんの"KANEMOTTI"のシーンくらいがほどほどで、いい気分で見終わることができた。

## (NHK側)

今、西成は街の風景が大きく変わってきていて、安い代金で泊まれる外国人向けの宿泊施設に諸外国からたくさんの外国人客が訪れているという現実が実際に起きている。3か月以上長とう留している旅行者もたくさんいて、今回はそういった方々にも取材を重ねてきた。その中で、おそらくドイツから来たであろう方が、この西成には建て前はないので、とても居心地がいいところだと言っていた。西成には、このようにほかの地域や外国から訪れた方々でも住みやすさ、生きやすさを感じる何かがあり、それに引かれて多くの人々が集まってくるのではないかと感じた。また、美容業界の人たちにも話を聞く中で、インバウンドで訪れる外国人客に商機を見いだせないかと試行錯誤していることも知った。今回のドラマは、そのような状況をこん然一体にして、多少とってな要素もありつつも、ファンタジーの要素を込めて元気なドラマを作ってみようという趣旨で制作した。今回いただいたさまざまなご指摘を今後のドラマ制作に生かしていきたいと思う。

## (NHK側)

変貌を続ける西成の街については、このドラマだけでなく、日頃のニュースや番組などでもお伝えしているが、西成の街の「変わるもの」と「変わらないもの」の両方の側面を今後も丁寧にとらえながら、さまざまなニュースや番組を通して引き続き多角的に伝えていく。

- 3月5日(日)の「紀の国スペシャル BOSAI FASHION RUN—AW AY RUNWAY〜楽しくそなえて 楽しくおでかけ〜」(総合 後 4:00〜4:43 和 歌山県域)について。番組による公募でデザイン案が選ばれた一般の方が多く出ていて、見ていてたどたどしい部分はあったが、得てして被災を連想することでなんとなく重い印象になりがちな防災の暗いイメージがふっしょくされるという意味では意義のある番組であり、その点を評価したいと思う。こういった番組は、一回限りの放送に内容を詰め込むのではなく、何年かにわたって場所を変えながらでも続けていってほしいし、やっていくべきだと思う。会場の和歌の浦は、万葉集にもゆかりのある風光明美な美しい土地であるが、せっかくすばらしい景色を誇る会場で開かれたイベントなのだから、例えば有名な不老橋をもう少し美しく長く映すなど、その土地ならではの風景をきちんと捉えて、番組の売りのひとつにするという観点があってもよかったのではないか。景色や風土、文化など、その土地のさまざまな特性にも着目して丁寧に取り上げることで、イベントを開催する放送局も、それに携わる地域の側も、さらにそれを見る視聴者も、そのイベントの趣旨や開催地の魅力を有機的につなげて、番組の意義をいっそう深く捉えていけるのではないかと思う。
- とてもいい企画だった。子ども部門や大人部門がなく、どの世代も同じ土俵で選考されていたのもよかったし、小学生でもこういうアイデアを生み出すのかという驚きと発見がたくさんあったのもよかった。番組を見ながら、自分だったらどのファッションがいいかなと考えながら見ていた。少し残念だったのは、会場にモデルが歩くランウェイを作っているのに、映像が全体的にやや古風な感じがしたことだ。また、司会の2人の背景にもう少し華やかさがあるとよかったのではと思う。ゲストの篠原ともえさんは、子どもにも大人にも感じよく語りかけることができる方で、華があってよかった。もう一つ欲を言えば、全体を通してファッションやデザインに寄りすぎな印象を受けたので、もう少しこれらの服が実際の防災に役立つものであるという面を強調して、そこがしっかりと伝わるような演出があるとよかった。例えば番組の最後に、それぞれの服の防災機能の紹介をオムニバスでまとめて取り上げることで、ファッション性だけでなく防災上の観点からの機能性がクローズアップされて、なおよかったのではないかと思う。
- このような企画を考え、防災についてふだんから啓発しようとしている和歌山局の 取り組みに改めて敬意を表したいし、評価をしたい。「逃げる」という意味の「ラン ナウェイ」と、ファッションショーの舞台である「ランウェイ」をかけている番組タ

イトルも関西らしくておもしろいし、そこを起点に服をデザインすることによって、 防災について考えることと合わせて、自らのアイデアが具体的な形になっていくこと を子どもたちが学べるといった点もよかったのではないか。444点の応募が寄せられ た中で、実際に番組で紹介されたのは9点だったが、今回紹介されなかったものの中 にもアイデアとして役立つものはもっとたくさんあったのではないかと思う。そうい ったものをもっとオープンにしていくことも、今後検討していってほしい。一方で、 ファッションショーにもかかわらず、司会のアナウンサーはいかにもNHKらしく、 やや硬い印象だったのが気になった。

- 防災がテーマとはいえ、ファッションショーということで、もう少しスマートで華やかな感じがあるのかと思っていた。最初に出演者が全員並ぶシーンがあったが、全員集まってもこの程度の人数しかいないのかという印象があった。内容はおもしろくないわけではないが、番組全体の作りとして、明るさや華やぎ、楽しさといったものがもの足りなく、司会のアナウンサーも寂しい印象だった。そのため、見ている側としても番組の中に没入できなかった。また、いずれの服もよくできているが、半分ぐらいはふだん着られるものではないと思った。ファッションを通して防災を身近に考えるという趣旨の企画であるならば、果たしてどうなのかと感じた。
- 興味を引くような防災ファッションのデザインをしていたのが、一見するとファッションの世界とは縁遠いように思えるような小学生の男の子だったというのが少し意外でおもしろかった。またその子たちが、将来の夢について聞かれた時に、決してデザイナーを目指しているわけではなく、それぞれ違う分野の職業についてみたいと素直に言っていたのがおもしろかった。防災をテーマにした番組はいろいろあるが、こういった取り組みを通して防災について考える一つのきっかけとなるのはいいことだと思う。
- もう少し地味な感じの番組なのかと思っていたが、それなりに華やかなファッションショーで、ショーの様子や舞台裏も見ることができてためになった。災害時に家や身の回りのものを失っても、身にまとっている服は最も身近に体を守ってくれるものだと改めて気づかされた。最優秀デザイン賞は小学校6年生の男の子の作品だったが、ポケット風の手袋だったり枕付きのフードだったり、ポンチョになるリュック、寝袋になるコート、笛ライトなど、たくさんの工夫がなされていた。444点から選ばれた9点の作品すべてに防災機能が満載で、ファッションを通じて改めて防災について考え、防災をもっと身近に感じることができるとてもよい番組だった。ゲストの篠原ともえさんの起用も功を奏しており、その場の状況や雰囲気を踏まえての適切なコメン

トもよかったし、司会のアナウンサーも頑張っていたと思う。今回紹介された9作品は、全体的に小学生の作品が多数を占めていたが、応募総数の内の小学生の割合も高かったということなのだろうか。今回のイベントは2月の開催ということで、全体的に冬物の作品を中心としたファッションショーとなっていたが、次回は夏期のイベントとしても開催してほしい。地震が起きた際、避難を余儀なくされるのは、決して和歌山県だけではないので、実用化して日本中に広がっていくような作品が今後も数多く出てくればいいなと思う。

- 防災についていろいろな形で考える機会を作っていくことは大切だと思うし、そう いった意味でも今回の番組は新しいやり方の一つだと思った。小学生の素朴で柔軟な アイデアや、高校の環境防災科で実際に防災を学んだりボランティア活動を続けたり する中で培った高校生の実践的なアイデアが、服飾関係の専門学校生によって実際に 形になるという大きな成果につながっていた。今後は、ファッションショーだけでな く、それを実用化する手だてについて考えていってほしいと思う。最初にこの番組の 「BOSAI FASHION」という英字タイトルだけを見たときに、防災のファ ッションショーでなく、高野山開山 1200 年を記念したお坊さんのファッションショ ーを「紀の国スペシャル」として制作したものだと思った。タイトルの堅苦しさを避 けるために、防災ということばを漢字表記でなくあえてローマ字表記にしたのだと思 うが、防災ということばに関しては漢字のほうが誤解がなかったのではないかと思う。 また、今回取り上げられたファッションは、防災というよりもむしろ実際は避難ファ ッションなのではないか。いずれの作品でも、果たして二次災害が防げるのかと疑問 に思うし、どちらかというと避難するときのファッションとしたほうが適切ではない かと思った。とはいえ、いろいろな世代の人たちが、いろいろな形でそれぞれの能力 を合わせてひとつのものを生み出していくというのはいいことだし、作品の実用化に 向けて、今後も具体的な動きにつながっていけばいいなと思う。
- 自分では思いつかないような斬新なアイデアがたくさんあり、若い力を感じた。ゲストとして出演していたデザイナーの太刀川瑛弼さんや、京都大学の牧紀男教授のコメントも、口調が優しく聞きやすくて分かりやすかった。一つ一つの指摘も専門家ならではの視点で的を射たもので、説得力があった。最優秀デザイン賞に選ばれた小学6年生の男の子が、自分の部屋に防災グッズを備えている様子が紹介されたが、それを見て自分もきちんとしなくてはと思った。どんな防災番組よりも、その場面に一番説得力があった。

## (NHK側)

和歌山県は、南海トラフ巨大地震で人口の1割が犠牲になると いう想定が出ており、東日本大震災以降、和歌山局では局をあげ て防災に取り組んでいる。例えば、災害時も放送を継続するため 技術的な機能を強化したり、ニュースで毎日防災に関する情報を 伝えたり、防災関連の特集番組を制作したりするなど、日常的に 放送の中で防災を積極的に取り上げている。防災はあたかも行政 がやるものとして、どうしても受け身になりがちだが、和歌山局 では、地域に根ざした防災の基盤をしっかり作っていくために、 いくつかの独自イベントを行っている。そのうちの一つが「NH K BOSAI体操」で、避難するときに必要となる筋力を作るた めの動きや頭を守る動きなど、防災に役立つさまざまな動きを取 り入れた体操を考案して、地域の体操教室で年に数回イベントを 開催している。また、小学生向けには「挑戦!NHK防災サバイ バル」というロールプレイング形式のイベントを実施し、300~400 人ぐらいの子どもたちを集めてゲーム形式で防災の知識を学ぶ取 り組みを行っているほか、外国人向けにも「NHK Let's S tudy BOSAI」という防災基礎講座を開催している。これ は和歌山県在住の外国人を対象にしたイベントで、今年で3年目 になる。そして今回、なんとかして若者にも防災に興味を持って もらいたいということで、ファッションと防災を組み合わせたシ ョー形式のイベントを企画した。この企画を担当したのは入局2 年目の若手職員で、教育委員会を通じて各小学校や中学校、高校 に案内を送付し、一般募集も行った。結果 444 点の応募が寄せら れ、防災の専門家である牧教授とデザイナーの太刀川さんと私が 審査をして、20点ほどのデザイン案を選んだ。そこから服飾学 校の専門家の意見を聞きながら9点を作品化した。演出方法につ いては今後も検討の余地があるが、イベント自体は継続していけ ればと考えている。先ほど実用化を検討してほしいという意見が 出ていたが、寄せられたアイデアを実用的な服として形づくって いくために、どのような方法があるのか考えてみたい。なお、防 災の表記についてのご意見もあったが、和歌山局の防災イベント は、国籍を問わず普遍的な概念として共通認識を広げていくため にも、すべてローマ字表記にしている。今回のご意見を踏まえて、 もう少し分かりやすく防災とわかってもらえるような表記の工夫

を検討したいと思うが、引き続きカタカナや漢字ではなくローマ 字表記を使って、ありとあらゆる人に理解してもらいたいと思っ ている。

- 3月27日(月)の関西UP!「STOP!人口流出 関西に住みまSHOW」(総合後7:30~8:43 近畿ブロック)について。ここ1~2年の間に、地方創世をテーマに各地で行政がいろいろなイベントを開催したり、組織上でも課を作ったりして専門的にこの問題に取り組もうとしている中で、関西、特に大阪といった大都市と言われる地域での現状や実情がよくわかり、重く受け止めた。関西から若者がどんどん流出している実態や、特に女性の有業率がこれほど低いという現実が、具体的な数値で分かりやすく示されており、一般の人たちの生の声があることで、全体を通してとても説得力があり、考えさせられる番組だった。そんな中、子育て世代が多く移住してきているという京都府綾部市の取り組み事例が紹介されていたが、希望を感じさせるような話に救われる思いだった。この成功事例があったので、スタジオの参加者からの「私たちにもできることがもっとある」という番組最後のメッセージが、より一層心に響いた。
- 関西の人口流出、企業流出を取り上げていて大変よかった。子育てしやすい町作りについては、実はこれまでも行政や財界が継続していろいろな形で取り組んでいるが、なかなかうまくいっていないという実情がある。日本総研が発表している「47都道府県の幸福度ランキング」の2016年度版によると、近畿圏各府県の順位は、滋賀が7位、次に京都が12位、兵庫が31位、奈良が35位、和歌山が38位、大阪が44位となっている。ちなみにこの調査では政令市の調査も実施しているが、政令市20市の中で、大阪市は最下位の20位だった。何もかも行政ができる時代ではなく、世代を超えて市民も参加し、関西の地の利を生かして地域全体で大同団結すべきと番組でもあったが、まさにそういった視点が大切だと改めて感じた。
- 全体的に非常にテンポがよく完成度の高い番組で、仕事と暮らしとに分けて整理したうえで作り込んでいることがよく分かり、好感が持てる番組だった。スタジオ参加者も適度な人数で、ほとんどの参加者が複数回発言していたのもよかったと思う。毎年たくさんの採用応募があるという中小企業のスタジオ参加者が、「学生は"親しみのある企業"を選ぶ」という趣旨の発言をしていたが、個人的には新鮮な意見だった。また、京都府綾部市の地元の方々による有志の団体「コ宝ネット」の取り組みとして、メンバーが移住者に随行してあいさつ回りをしたり、地元の習わしや冠婚葬祭を教えたりするという事例が紹介されていたが、ここまでやるのはすごいことだと思うし、

これなら移住者も喜んで定住するようになるだろうと思った。大企業と中小企業とでは、大企業を選ぶという若者たちの正直な発言が多かったが、その理由はやはり、新卒一括採用と年功序列、そして組織の大きさゆえの社長や会長との適度な距離感によるものではないかと思う。大企業は組織内で働く人が大勢いるので、職場にもいろいろなポジションがあり、その中で異動することでさまざまな体験ができる。そしてよほどのことがなければ、年功序列でそれなりに給料が上がり、ある程度の年齢になれば子どもを大学へ通わせることもできるほどの給料がもらえる。中小企業だとどうしても社長が近い距離にいるので、万が一社長と反りが合わない場合、会社の中での居場所がなくなってしまう。うまくいく場合でも、その関係性を継続させるためにストレスになる。その点、大企業は、社長や会長との距離が実質的に遠いので、そういったストレスを抱える必要はない。人によってはそういうところが一因となり、大企業と中小企業の希望者の差となって現れるとのではないかと感じる。この点についても掘り下げる番組を期待している。

- 大阪にできた「ナレッジキャピタル」について、企業人や研究者、一般消費者を結び付けて、新たな知的価値を創造するための仕組みとしてきちんと説明がなされていたのがよかった。この取り組みによって、異業種どうしの関わりが新たな価値を生み出していることがよく分かった。ふだんの日常生活の中ではなかなか感じることも少ない現実社会の厳しい情勢を、番組の中で教えてもらえた気がする。関西には独特なコミュニケーション文化が存在しており、それが関西ならではの国際性の涵養(かんよう)にもとても役立っていて、そこから文化観光を考えることができるのではないか。番組の中で、奈良県の女性の就労率が全国最下位と出ていたが、若者を中心に地域への愛着心が薄れてきているのだと思った。東京にしか働き場がないから、本心では地元にいたいが東京に出て行かざるをえないという意見もたくさんあった。奈良県では行政が民間と連携して観光戦略を考えているが、地元にいることが若者の誇りになるというような状況を作っていけたら、いろいろなレベルの底上げができるのではないか。そんなさまざまなことを考えるきっかけとなるような番組だった。
- 25年間で関西から首都圏に延べ50万人あまりが流出しているという数字を聞いて驚いた。和歌山県もIターンを進めるため、いろいろな取り組みをして頑張っているが、なかなか実を結んでいない。そんな中、番組の中で紹介されていた京都府綾部市の取り組みは、自分たちでもできると思えるような具体的でわかりやすい成功事例で、身近にいる行政の知り合いにもぜひ見てもらいたいと思う番組だった。最近は女性でも備長炭の炭焼き体験や職に就きたいという人がいて、問い合わせも非常に多くなってきており、受け入れる側も努力していかなければならないと思っている。「関

西UP!」は、前回は観光がテーマだったが、今回は人口流出をテーマとしており、 関西が元気になるというコンセプトで分かりやすく好きな番組だ。今後も期待している。

- 兵庫県も人口が大阪府に流出している。県内のいくつかの市ではイメージ戦略でさまざまな政策がとられているが、なかなか効果が上がっていない。関西の正規雇用の女性の数が少ないという意外な事実を、この番組を通じて始めて知った。ほかの地域と比べて、関西にはたくましい女性もたくさんいるし、関西の女性の政治家たちがいろいろな道を切り開いたので、雇用状況はもっといいものだと思っていた。若者が中小企業のことをよく知らずに、一般に名前が知られている会社を選んでしまうということからも、中小企業の特色や強みについて、もっと世の中に伝えていくような番組を作っていくこともメディアとして果たす役割だと思う。また、どこの町にも老朽化したニュータウンというのはあるので、大阪千里のリノベーション住宅であったり、京都府綾部市の子育て支援施策のような取り組みだったり、女性の働きやすさに関する情報についての取材をもっと進めながら、「あなたの町や会社でもこういった取り組みはどうですか」と提言するような番組を放送していってほしい。
- 産後で社会復帰をしたいという私の友人で、関東のほうがやりたい仕事があるけれ  $\bigcirc$ ども、家族との生活を考えると我慢して関西で働くことにするべきかと悩んでいる人 がいる。その話を聞いていたので、この番組の最後に、関西大学の岡絵理子教授が指 摘していたように、「仕事を選ぶかライフスタイルを選ぶか」という二者択一のよう な状況が、まさに現代社会を物語っていると感じた。女性の社会進出がしやすくなっ た今、ライフスタイルよりも働くことに重きを置いている人が増えているが、子育て 環境も含めて関西の女性が働きやすさを感じられる環境を整備していくことが大き なポイントだと思う。会社の仕事内容よりも働き方を重視する若者が増えている中、 そこに企業が寄り添いすぎると特に中小企業にとっては大変な側面もあるとは思う が、番組で取り上げられていたある企業の事例にもあったように、温かさや働きやす さ、会社と社員の寄り添い方を重視している姿勢が伝わる会社は、とても魅力的だと 感じた。そういった中小企業をもっとPRしていくことが大事だと思う。いい会社は 必ずしも東京に偏っているわけではないと思う。全国各地にある魅力ある会社に、ま ずは出会うことこそがそもそものスタートだという話も参考になった。この問題につ いての今後の可能性や課題がよく見えてよかった。
- 人口流出の主な理由が就職や転職となっていたが、大学進学による人口流出についての視点も入れてほしかった。10代後半で出て行く人の割合の多くは大学進学によ

るものがあると思う。30年前だと、東大に行ける学力を持っていても関西にある京大に進学するというような人がざらにいたが、今では東京を目指すという学生が増えてきていて、関西の優秀な学生がどんどん東京に行ってしまい、東京と大阪で学力の差が開いてきている。大学進学で東京にいった学生は、大学卒業後もそのまま関西に戻らずに東京で就職して戻ってこないという状況がある。地方から関西の大学に進学した学生も、就職で東京に行ったり、地元に戻ったりしてしまう。関西には国立大学も私立大学もたくさんあるが、それでも優秀な学生ほど東京に奪われてしまっているという現状を非常に大きな問題だと感じている。この点もひと言付け加えてもらえるとよかった。

総務省が4月14日に発表した人口統計では、日本の人口が6年連続で減少を続け ている。こうした中、東京都を初め7都県では増加する一方、近畿を含む40道府県 では減少しており、特に関西ではいわゆる生産年齢人口、15歳から64歳が、5年 前と比べて6%以上減少している。こうした中で、この番組で経済活力の源泉とも言 うべき若者の流出をいかに食い止めるかというテーマを取り上げたことは、時宜をと らえた非常にいい企画だった。関西のオンリーワン企業を集めた合同説明会が開催さ れたり、各自治体が県内の企業の求職情報などをポータルサイトで発信したりしてい るが、番組を見てこれらの情報が若者に届いていないと痛感した。また、夢を追いか けられる場ができるなら関西でも働けると言っていた若者もいたが、本音では安定志 向が強く、以前にも増して大企業や公務員を志向する傾向が強くなっていると思う。 関西からの人口流出を食い止めるためには、働きたいと思ってもらえる職場の創造と 住み続けたい町づくりの両方を達成していかなければならないが、実際は非常に難し いと思う。スタジオにいる若者たちに、もっと本音を掘り下げて聞いてほしかった。 当然のことながら、人口問題は小さな市町村だけで取り組む話ではなく、もっと広域 的な観点で取り組むべき課題だ。そのためにも、スタジオに関西広域連合から代表者 を招いてもよかったのではと思う。香港にあるイギリスの人材開発会社が駐在員を対 象に実施した調査によると、どの都市がいいかという調査では、大阪が世界で5位に 選ばれ、日本の中ではトップだった。この結果からも、人口の社会的増加を図るため にも外国人の移住を取り上げるのもおもしろいのではと思う。「関西UP!」の第1 弾のときにも意見したが、今回もスタジオの参加者数が多く、討論という形になって いなかったので、もう少し参加者を絞って、紹介するいろいろな事例や時間を短縮す るなどして議論を深めてほしいと思う。また今回のテーマは非常に大きなテーマなの で、1回限りではなく、ぜひ同じテーマで第2弾、第3弾を企画してほしいと思う。

### (NHK側)

継続してこの問題を取り上げてほしいというご意見をいただいたが、今年度も関西を取り巻くさまざまな課題について適切なタイミングで取り上げていくためにも、さらに検討を重ねていきたいと思う。また、中小企業の強みを掘り起こして世の中に伝えていくべきではないかというご意見があったが、月に1回放送している「ルソンの壺」や「おはよう関西」のコーナーでも、中小企業の取り組みを多角的に紹介しており、引き続き今後もさらに力を入れて取り組んでいきたいと思う。

- 3月22日(水)の放送記念日特集「今 テレビはどう見られているか」(総合 後 10:00~10:50)について。興味深い内容だったが、ショッキングな内容だった。放送とネットの境目がなくなってきているという話の事例として、ノルウェーの国営放送局NRKが制作している高校生ドラマ「SKAM」の取り組みが紹介されていた。このドラマでは、シーンの間にSNSを戦略的に発信することで、現実世界とドラマの世界があたかも交錯するような手法で視聴者の関心を引いているということだが、このような手法を日本で実施したらどうなるのか。そうなると現実世界で起きていることなのか、そうでないのかの区別がつきづらくなるが、それをあえてねらうような番組が増えていくのか。ノルウェーがネットに重きを置いて番組を作っていることにもショックを受けた。このようにネット配信を意識した番組ばかり作っていくと、受け取る側の限られた興味関心に偏った報道・番組ばかりになる危険性があるのではないか。放送法の動きも含めて、放送を取り巻く全体状況の問題点をもう少し詳しく取り上げてほしかった。
- 4月7日(金)の歴史秘話ヒストリア「ヤング家康と徳川四天王の絆」について。完成度の面でバランスが悪かった。徳川四天王が三方ヶ原の戦いで果たした役割について、具体的に触れられていなかった。それならば三方ヶ原の戦い自体取り上げる必要はなかったのではないかと思った。また、最後に「徳川十六将図」が紹介されたが、それについての解説がなかった。もう少し歴史番組らしく作ってほしい。

選抜高校野球について。特定の高校の選手の話を過剰なまでに細かくメディアで 取り上げるのはどうかと思う。プロの選手であればまだしも、高校生なのにやり過 ぎでないか。過剰な報道は本人のためにならないと思う。

○ 大河ファンタジー「精霊の守り人Ⅱ 悲しき破壊神」について。アクションファンタジー大河ドラマという新ジャンルを開拓したと思う。主人公を演じる綾瀬はるかさ

んのアクションがかっこよくて美しくて、彼女自身がアクション女優の新境地を開いたと思う。このドラマは国際的にも通用する番組だと思う。特に新ヨゴ国をはじめとする物語の舞台は、実際にアジアのどこかにありそうな国々で、集落や市場などそこで暮らす人々の姿に存在感がある。衣装や小道具や食べ物なども細部までリアルに作り込んでおり感心しながら楽しんで見ている。だからこそ、ただ一つ残念なのは、馬のあぶみだ。ピカピカで20世紀の工業製品といった感じなので、もう少しリアルなあぶみにしてほしいなと思った。

- 番組宣伝について。民放のコマーシャルほどではないが、番組が終わるたびにたく さんの番組宣伝を放送しているのが気になる。数を絞るなど、適切な宣伝のあり方を 検討してほしい。
- ならナビ「防災士大川アナのなら防災手帳」について。防災士の資格を持つ大川悠介アナウンサーが、すぐに役立つ防災情報をわかりやすく解説するコーナーとして、今年4月から新たにスタートした企画だが、NHKのアナウンサーもしくはキャスターが持っている個性や技術には大いに可能性があると思う。今後も個々の特性を生かした番組作りに取り組みながら、NHKの魅力をもっとアピールしてほしい。

NHK 大阪放送局 番組審議会事務局